

## 宗方小太郎日記，明治 45～大正 2 年

大 里 浩 秋

### 1. はじめに

本所報 No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（但し中国滞在時期のもののみ）を載せ、No. 40 に明治 22～25 年、No. 41 に 26～29 年、No. 44 に 30～31 年、No. 46 に 32～33 年、No. 47 に 34～35 年、No. 48 に 36～38 年、No. 49 に 39～40 年、No. 49 に 39～40 年、No. 50 に 41～42 の全部を載せ、No. 52 には、43 年の欧米旅行時期を除いて、43～44 年の日記を載せた。今号ではその続きとして、明治 45（途中から大正元年となる）～大正 2 年の宗方の手書きの日記を活字に起こすとともに、解題を付すことにする。

前回までと同じであるが、お断りすべきことをいくつか記す。解読できなかった文字は□で示した。また原文のカタカナは、西洋の固有名詞、外来語の表記を除いてひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本の人名の漢字は原文のままにした。私が付す解題中での原文の扱いも同様である。日記の解読と入力作業は、本学中国言語文化修士課程修了（文学修士）の増子直美さんに手伝ってもらった。

なお、予めお断りしなければならないことがある。下の 2 の文中に数か所一行分読み取れないところがあり、3 の文中には 2 ページ分欠けていて、その部分が再現できないままになっている。これは、原資料をデジカメで撮影する際の不手際によるもので、今後その箇所を補充したいと考えている。

### 2. 明治 45 年 1 月から大正元年 12 月までの日記

1912 年は、明治天皇が 7 月 30 日に亡くなり、翌 31 日に大正天皇が即位して大正年号が始まった 1 年であった。この年の宗方日記は、1 月 1 日から 8 月 31 日までの一綴じと、9 月 1 日から翌年 5 月 9 日までの一綴じに含まれている。

この年の正月は、それまでと同様上海で迎えた。前年 9 月に日本から上海に戻り、10 月には武昌蜂起が起こってただちに漢口周辺での清朝軍と革命軍の戦闘の様子を観察しに出かけ、上海へ帰る船上からは長江流域の街の様子を見、上海に着いてからは、当地での革命派の状況を見て回って、未だ革命の行方が不透明な状況下に新年を迎えたのである。

そこで、この年の日記には、革命派と清朝側の対立がまだ続く過程で、双方が交渉の舞台に就く動きが書かれ、4 月初めには孫文が解職されて南京から上海に来たこと、また宗方自身が時折各種の中国人と会って情勢理解に努めている様子などが書かれている。どんな中国人と会っているかに触れるなら、以前同様姚文藻とはしばしば会い、姚と共に鄭孝胥や惲祖祁らとも会っているのは、清朝宣統帝復位をめざすグループの活動を支持する動きとして注目される。また、孫文、黄興を含む同盟会の複数の人物

と何度か顔を合わせ、とくに孫文とは単独の場合も団体で会った場合も含め10月から12月にかけて6回(10月9日、12日、11月8日、9日、11日、12月2日)も顔を合わせている。孫文や黃興、同盟会系の人々との接触は、彼らに対する同情からという面もあったに違いないが、同時に彼らがこれからどう動こうとしているかを探る意味合いもあったのではないかと考えられる。

日本人との交流についてみると、革命勃発を機に前年12月に上海に来てそのまま留まっていた頭山満や犬養毅と会っており(2人とも3月に帰国)、宮崎民蔵・寅蔵兄弟とも時折会っている。寅蔵との関係は以前から日記に書かれているが、民蔵とは翌年には北京でも会っていることから、民蔵との関係にも注目したい、さらに、辛亥革命を機に軍艦に載って上海にやって来た多数の海軍関係者との往来が盛んに行われている様子を知ることができる。

以上上海滞在中の動きを1年を通して見てきたが、その間7月初めには帰国して地元熊本に滞在して旧知の人と交流を深め、7月30日に明治天皇が亡くなり当地での追悼儀式に参加した後、10月初めに上海に戻っている。ここで、宗方が得ている各種の手当に触れると、従来海軍から支払われていた手当は前年からひと月200円となり、3か月ごとに600円を入手している他、同じく海軍からこの年1回目は300円(6月26日)、2回目は200円の機密費(臨時手当と表現している個所もある)をもらっている。この年新たに加わった機密費の性格は不明である。また、領事館からひと月ずつ経費を得ていることがわかる。日記に書かれている限りで、前年12月分としては620円(1月8日)、2月分も620円(3月11日)、3月分は640円(4月29日)となっていて、その後も額は一定しないものの、600円を超えるかなりのお金をもらっている。これがどんな性格の金銭授受かは判然としませんが、本所報No. 52所収、明治44年の日記の解題で触れた、宗方が領事に「上海に言論機関を設けることを提議せり」として認められた動きと関係するのであろう。さらに、時報社からは、これまでと同様ひと月50円の報酬を得ている。宗方は『時報』の名目上の発行人であり、時折そこに記事を書いていることは、『宗方小太郎文書』(原書房、1975年)の海軍宛報告中に引用する文章によっても明らかである(3月10日付「貴州省会匪の跋扈」「蘇州附近の幫匪概況」など)。

次に、この年に書いた海軍宛報告の号数と日付を、『宗方小太郎文書』(以下、『文書』と略称)のそれと対照しつつ日記から拾い出す。

1月2日―「報告二通発す」とあり、うちの一通が『文書』にある第369号に当たるのだろうが、もう一通は『文書』にはない。1月6日、8日にも「報告を発す」とあるが、『文書』にはない。なお、『文書』に、明治45年1月として号外「講和談判と其後の形成」と号外「中華民国政府閣員一覧」があるのは、その内容から見ても、あるいは上記の2日の一通か6日か8日の報告に該当するのではないかと思うのであるが、断定はできない。2月7日―「報告を作る」とあるが、『文書』にはない。但し同じ日付で上海社会科学院歴史研究所(以下「上海」と略称)に第371号「支那時局観」が所蔵されている(なお、日記2月9日に「報告を発す」とあるのは、7日の記述に対応する動きと考えられる)。3月1日、4日、16日にも「報告を発す」とあるが、『文書』にはない。但し、『文書』中に日付なしで第375号「袁世凱の幕府」が載っているのは、いつとは断定できないものの、3月1日、4日、16日の報告のいずれかに該当する可能性がある。4月6日―第378号(『文書』の日付は4月5日)。4月10日―第380号。4月12日、12日、30日、いずれも「報告を発す」とあるが、『文書』にはない。5月6日―第382号、5月31日―第383号。7月5日―「支那政党的調査報告を送る」とあるが、『文書』にはない。なお、その後『文書』には、7月12日「号外の一」、7月22日「号外之二」、7月28日「号外之三」、7月29日「号外之四」、8月4日「号外之五」が「宗方代理」と称して載っているが、これらは宗方が帰国中に助手の誰かが執筆したものと理解できる(日記中には、波多博、西本省三、松崎の名前がしばしば登場し、宗方は彼らに報酬を支払っているのも、彼らのうちの誰かの執筆と考えられる)。10

月 12 日―「文書を発す」とあるが、『文書』にはない。但し、上海には 10 月 11 日の日付で第 385 号「孫逸仙との問答」が所蔵されている。10 月 18 日―第 386 号, 12 月 10 日―第 387 号, 12 月 13 日―「報告を写して之を終わる」とあるが、これは『文書』12 月 14 日付の第 388 号を指すのであろう。12 月 22 日―「報告」とあるが、『文書』にはない。

## 日誌

正月元日 陰寒。朝儀式を済まし東和洋行に至り平山岩彦の熊本に帰るを送り、十一時領事館に至り聖影を拝し、正午倶楽部の名刺交換会に出席し、午後井手友喜と同車有吉領事の処に至り賀正し、中食後藤瀬、江崎、河野、児玉、加藤、島田、篠崎、井野、石渡、伊東等の知人を歴訪し、夜に入て帰る。内外知人の年賀状数十通を收到す。

正月二日 陰天。七時半郵船に至り海軍への報告二通を発す。九時小川平吉を弘済丸に迎ふ。各地友人の年賀に答へ数十通を発す。海軍より客年度臨時手当二百円を送り来る。各地知人の年賀状至る。海軍に領収証を發し山川早水に復書す。高橋謙、小田勝太郎等の信至る。之に復す。

正月三日 晴天。井戸川杏花楼に招宴、正金銀行の先約有るを以て之を辞す。午前年賀状を認む。午後有吉、加藤を訪ひ、六時半正金銀行児玉の招宴に六三亭に赴く。同座は西人一名、有吉、松井敬四郎、佐原、井手等なり。九時半去て加藤を訪ふ。

唐紹怡媾和使の任を辞し、以後袁世凱自ら電報にて伍廷芳と交渉することと為れり。直隸凜州の第二十鎮の四十旅団叛し、奉天北京間の汽車不通となれり。

正月四日 半晴。終日年賀状を認む。篠崎来り内人の病を診す。

正月五日 雨。山内崑、田鍋安之助等の信至る。知人の年賀状数十通至る。之に復す。午前有吉、加藤を訪ふ。午後岡田晋を訪ふ。小川平吉、尾越平陸、河野久太郎前後來訪。河野十二時に及で去る。

正月六日 晴天。午前村上貞吉、山田勝治、崎元盛幸来訪。海軍に報告を發す。午後小川を東和に訪ひ、去て領事館、加藤を訪ひ帰る。時報館より昨年六月より十一月に至る報酬三百元送來。

正月七日 快晴。日曜。午前六〔三〕亭の新年謡会伊東米二郎の送別会に出席す。十一時夜に入り七番を謡ひ、終りて宴席を開き独吟、仕舞、福引等の余興を催し、十一時散ず。

正月八日 晴。午後領事館に至り十二月分の経費を受取り、帰途加藤、小川平吉を訪ひ帰る。六時吉領事の饗に領事館に赴く。来賓は頭山満、岡本柳之助、芝五郎、岡崎國助、小川平吉、寺尾亨、並に当地の重立者二十余人なり。十時散ず。海軍に報告を發す。

正月九日 晴。水野梅暁、石井、山口啓三等前後來訪。朝小川平吉、波多博の南京行を送る。辻武雄の信至る。年賀状数十通を發す。興津某、篠崎、緒方、小池来訪。

正月十日 晴。石橋藤次郎、佐々布質直、佐々布遠、遠山一治等の信至る。海軍に信書を發す。午後領事館、加藤を訪ひ、帰途理髮。郡島を訪ひ帰る。

正月十一日 晴。午前郵便局、小川を訪ひ帰る。

正月十二日 陰。夜小川を訪ひ、岡田の処に小談、帰る。河野来談。

正月十三日 雪。午後加藤を訪ふ。夜倶楽部に謡曲を学ぶ。

正月十四日 陰。石橋藤次郎、高田九一、井野春毅来訪。山本安夫を訪ふ。山内崑、内田友義に致すの書を認む。吉田生来訪、近日北伐軍と共に山東に赴くと云ふ。

広東兵二千、劉姓之を率ひ軍艦三隻、運船三隻にて芝罘に上陸し、先づ山東の独立を取消さしめ、進で済南より徐州に在る張勳の背後を衝くの計画なり。一週日の後胡瑛東に赴き都督たるべしと云ふ。一月初機関銃五十四門着、内三十門を南京に、二十四門を武昌に送れり。近日中三百万円に値する兵器、彈藥輸入せらるべしと云ふ。

正月十五日 晴。午前崎元、興津来訪。午後有吉、本庄、加藤を訪ふ。午後謡曲を学び、六時加藤の招

饗に新六三に赴く。会者西安より避難の教員鈴木直三郎以下五、六人、並に武部最上艦長、浮田、及余なり。十一時散ず。

正月十六日 晴。午前書信を認め、午後加藤、本庄を訪ふ。夜松崎、井手を敲き小談、帰る。

正月十七日 晴天。朝郵船埠頭に至り外波海軍少将の一行を迎ふ。山口升、佐々布質直、井戸川、興津に致書す。午後民団に至り伊東への記念品寄附金五円を納め、豊陽館に外波、加藤を訪ひ帰る。村山、高島義恭、軍令部の信至る。頭山満氏来訪。

正月十八日 晴。朝外波少将一行の南京行を送る。午後一時井戸川の南京行を送る。加藤を訪ひ、去て謡曲を学び帰る。六時本庄の招宴に新六三に赴き、十一時帰る。波多南京より帰来。

正月十九日 快晴。午前頭山満を北四川路に訪ひ、正午帰る。午後姚文藻を新馬路登賢里に訪ひ、四時帰寓。橘三郎、高田前後来訪。田中耕太郎、白岩龍平、合原金八、亀雄の信至る。

正月二十日 陰天。海軍に発信す。亀雄に復書す。午前町田大佐の帰国を送る。河野と橘三郎の処に中食、理髪して帰る。河野来訪。有吉を訪ふ。晩内人と井野の招饗に赴く。同座は村上夫婦、井手、島田儀一たり。十一時帰る。雨。

正月二十一日 快晴。緒方二三、赤谷由助来訪。佐々布に致書す。午後軍艦新高に至り川島司令官を訪ふ。晩栃内海軍軍務局長の招宴に新六三に赴く。同座は川島司令官、谷口参謀、波多少将、以下吉田大佐、並に新高、龍田、満洲の三艦長なり。十時半帰る。佐々布南京よりの電報至る。

正月二十二日 晴。前九時加藤と満洲丸に至り栃内少将、吉田大佐を訪ひ暢談。中食を共にし、午後三時の便船にて帰る。夜栃内、吉田両氏を主とし杏花楼に会食す。石渡、藤瀬、江崎、河野、加藤等同座たり。九時散ず。雨。秦長三郎を訪ふ。

正月二十三日 陰。白岩、遠山一治等に復書す。午後秦長三郎の帰国を送り、帰途本庄、有吉を訪ひ、東和に柴五郎、岡田晋太郎を訪ひ帰る。晩有吉領事の招宴に六三亭に赴く。会者川島司令官、柴少将、栃内少将、外波少将等を主賓とし吉田大佐増次郎、新高、満洲両艦長、谷口、寺島、加藤、本庄、板屋、佐藤安之助等海陸軍人、各会社支店長等約三十人。九時半帰る。雨。

正月二十四日 雨。七時四十分栃内少将、吉田大佐の南京行を車站に送る。

正月二十五日 陰。午前有吉領事を訪ひ、上海日報に緒方と会し、中食後橘三郎を訪ひ、松尾氏に抵り謡曲を学び帰る。

正月二十六日 晴。姚文藻来訪。村山正降、山口升、海軍に致書す。鄭永昌、緒方二三来訪。午後豊陽館に川島司令官、谷口参謀、加藤中佐と会食し、九時半帰る。高橋謙の信至る。

正月二十七日 半晴。中津純人来訪、本日熊本より帰来せりと云ふ。午後東和に至り鄭永昌、岡田、郡島を訪ひ、去て河野を敲き帰る。

正月二十八日 晴天。午前十一時より倶楽部の謡会に出席、五時帰。緒方二三、上村源之助来訪せりと云ふ。

正月二十九日 晴。午前拍売処に至り、去て領事館、加藤を訪ひ帰る。午後郵便局に至り池邊吉太郎、井手三郎に其母堂、並に巖君の死を弔し各奠儀を送る。東洋協会に去年三月より本年十月迄の会費十円を送る。本願寺に藤山を訪ひ小談。佐原の処より松尾氏に至り謡曲を学び帰る。飛雪撩乱、衣帽為に白し。

正月三十日 晴。本願寺木村常諦、渡辺哲信来訪。午後領事館に有吉、古谷を訪ひ、去て東和に柴五郎を訪ひ帰る。荻野元太郎来訪。夜佐々布南京より来着。

正月三十一日 晴。午後領事館に至り一月分経費を受取り、帰途加藤、上海日報を訪て帰る。姚文藻来訪。

二月一日 快晴。午前橘三郎、今井邦三来訪。午後謡曲を学ぶ。夜佐々布来談。

二月二日 健。北京川島に電報を發す。理髪。加藤、外波両氏を訪ふ。栃内少将、吉田大佐を南陽丸に



- 迎へ、豊陽館に帰り中食を共にす。六時外波少将の招宴に六三亭に赴く。来会三十四人。十時帰る。
- 二月三日 晴。午前栃内少将の帰国を筑前丸に送り、去て井戸川、緒方を華徳路に訪ひ、中食後緒方と出で之を誘て帰る。晩吉田大佐の招邀に豊陽館に赴き会食、十一時帰る。北京松本の電報至る。之を訳して午前二時に至り就寝す。
- 二月四日 快晴。朝吉田大佐の帰国を税関棧橋に送り、帰途加藤を訪ひ帰る。午後島田儀一、並に同文書院学生来訪。
- 二月五日 快晴。九州日々に通信を發す。午後加藤を訪ひ、去て謡曲を学び帰る。夜藤井来訪。
- 二月六日 晴。午後萩野元太郎の帰国を送り、帰途加藤、井出と談じ、東和に岡田を訪ひ帰る。神尾茂来訪。高橋謙北京よりの信至る。
- 二月七日 晴天。終日在家、報告を作る。佐原篤介、美濃部正美、井上男也来訪。生田清範、栃内少将の信、並に白岩、亀井、大谷等合作の信片至る。
- 二月八日 晴天。井手友喜、橘三郎来訪。午後謡曲を学ぶ。杭州池部より鶴一羽、鳩六羽を贈り来る。
- 二月九日 晴。午後崎元、岡田来訪。池部政次の信至る。之に復す。海軍に報告を發す。夜井手友喜の帰国を送る。
- 二月十日 晴。夜村山正隆を東和に訪ひ、十一時帰る。本日来着せる者なり。池邊、神尾の信至る。
- 二月十一日 晴。午前紀元節の拝賀に領事館に赴く。十一時半軍艦新高のアットホームに赴く。端艇競争其他の余興有り。五時帰る。河野久太郎と橘を訪ふ、在らず。
- 二月十二日 晴。午前同文書院より去年十二月迄の利金を受取る。午後謡曲を学び、帰途佐原を訪ふ。夜佐々布来訪。
- 是日清国帝国位を退き共和政体に改め、袁世凱をして南方の革命軍と妥協し臨時共和政府を組織すべき上諭を發せられ、二百六十七年の君主国是日を以て亡ぶ矣。
- 二月十三日 雨。午後亀井陸良を訪ふ。本日来着せる者なり。加藤、井出と小談、帰る。夜若林来訪。
- 二月十四日 雨。佐原来訪。午後出て理髮。河野久太郎、柴少将を訪ひ帰る。亀井陸朗来訪せりと云ふ。夜天野平八来訪。石原醜男、井手友喜、河口介男、生田清範、崎元盛行、神尾茂等の信至る。夜佐原来訪。
- 二月十五日 晴。海軍、並に熊本平山岩彦列に致書す。午後若林来訪。上海日報社に至り楊紹寅に会し、去て謡曲を学び、佐原を訪ひ帰る。姚文藻来訪。
- 二月十六日 晴。海軍に致書、東洋協會門田正経に報告書を送る。河口介男、石原醜男に致書す。朝加藤を訪ひ、東京に電報を發し、帰途篠崎を敲き帰る。午後内人と大馬路に至り眼鏡、毛布を購て帰る。夜新六三に亀井陸良を招宴、同坐は井戸川、本庄、橘、板屋、西田、岡田晋、横山、佐原等なり。北京、東京の諸友に合作の信片二十余通を發し、十時帰る。
- 二月十七日 晴天。午前佐原を訪ひ、十一時海軍の主催に係はる競点射的に列し二十四点を得、郊外に中餐の饗を受け、四時散ず。晩平野勇造の晚餐に赴き、桂少将と三人田村、熊野、黒塚三番を謡ひ、十一時帰る。
- 二月十八日 晴。午後村山正隆来訪、共に出て狄平、姚文藻に抵り年賀を為し、帰途村山の処に暢談、帰る。
- 二月十九日 晴。朝八時半の小蒸気にて軍艦満州に至り艦長と暢談、中食の饗を受け、帰途旗艦新高に谷口參謀を訪ひ、三時辞して緒方、加藤、亀井を訪ひ帰る。
- 二月二十日 陰。午前田畑安之助来訪、本日大連より来着せりと云ふ。午後村山を東和に訪ふ。夜青木茂、河野、香月来訪。
- 二月二十一日 雨。朝副島八十六来訪、本日来着せりと云ふ。午前出て加藤、亀井、田鍋、七里を豊陽館に訪ひ 一時帰る。夜副島八十六、石井八万次郎と新六三に会し、九時帰る。佐々布来訪。松方五

郎、島田数雄、井手友喜、軍令部、荻野元太郎、佐々布遠の信至る。

是日南京臨時政府より蔡元培を正使とし（教育部総長）、外交部次長魏宸組、参謀次長鈕永建、前議和参贊汪兆銘、法制局長宋教仁、海軍部員劉冠雄、陸軍部員黃可凱、陸軍々需局長曾昭文、武昌外交司長王正廷等之に随行し、又た唐紹怡は民国外交全権代表の名義にて之に加はり北京に赴き交渉を為し、袁世凱を迎えて南京に来るべき筈なり。

二月二十二日 陰天。午前有吉、井出を訪ひ、午後東和に至る。岡田晋太郎来訪、共に出て佐原を訪ひ、四時謡曲を学ぶ。夜高田、田鍋来訪。土屋員安英京よりの信至る。

二月二十三日 快晴。午前七里恭、海津来訪。午後領事館、加藤、外波、橘を訪ひ帰る。晚新六三の会に赴く。会者田鍋、村山、七里、井戸川、緒方、香月、河野、土井、古庄、岡田、澤本、中野、橘等なり。九時半帰る。宝妻の信至る。

二月二十四日 晴天。海軍に発信す。午前理髪。午後真島次郎、並に熊本県学生八、九人来訪。東和に副島八十六を訪ふ。五時井手三郎来訪。夜藤井来訪。

二月二十五日 陰天。日曜。朝香月と電車、徐家滙に至り古庄弘を製革会社に訪ひ、近郊に猟し一も獲る所無し。電車にて六時帰る。夜腹痛、下痢。福州前島真、南京緒方二三に致書す。

二月二十六日 陰。午前豊陽館に松村辰喜、加藤を訪ひ、正午帰る。午後村山、副島八十六を東和に訪ふ。四時謡曲を学ぶ。

二月二十七日 積陰。若林、本庄来訪。晚謡曲月並会に出席、十一時帰る。

二月二十八日 雨。午後井手と村山、田鍋、加藤を訪ふ。晚加藤の所にて亀井隆朗、佐原、井出と会食、十時帰る。

二月二十九日 陰。午前田鍋来訪。午後東和に原口博士等を訪ひ、去て有吉を訪ひ、豊陽館に加藤、橘等を敲き帰る。

三月一日 陰。根津一母堂、島田数雄夫人の訃に接し弔詞を發し各奠儀を贈る。午後井手三郎、松村辰喜、船津辰一郎来訪。船津は本日香港より来着、明日帰国すと云ふ。六時海軍に報告を發し、領事館に有吉、浮田、藤瀬、伊東、外波、加藤等と会し、川島司令官の招宴に軍艦新高に赴く。十時散ず。吉見に復書す。

三月二日 雨。朝井手、松村の漢口行を車站に送る。丸巖、今村直夫来訪。終日在家。中島為喜、山下稻三郎、鳥居赫雄の信至る。

三月三日 雨。午前亀井陸良の満洲行と外波少将、西本の福建行を送る。午後安河内来訪。夜香月、河野、佐々布、波多来談、晩食を共にし十二時散ず。佐々布留宿。

三月四日 雨意。海軍に報告を發し、鳥居、山下稻、中島為喜、石原醜男、生田清範に復書す。本日拍売にて清子の為に「ピアノ」を購入す。代二百七十円。正午大倉組門野の招宴にパレスホテルに赴く。同座は井戸川、児玉、江崎、木幡、最上、熊谷、石渡、河野諸人なり。二時散ず。帰途東和に岡田、郡島を訪ひ、三時帰る。六時当地各会社の招宴に辰虹園に赴く。第三艦隊司令官将校一同を主賓とし会者六、七十人。十時帰る。

三月五日 雨。午前門野を船に送り、正金より三百元を受取り、加藤を訪ひ帰る。夜岡田晋太郎の招宴に新六三に赴く。同座は加藤、佐原、井出等なり。九時半帰る。

三月六日 陰。午後領事館、加藤、岡田、柴を訪ひ帰る。海軍に書信を發す。佐々布、波多を招き晩食す。

三月七日 快晴。加藤中佐、佐々木武蔵、井上男也、岡田晋来訪。海軍より四月至六月手当金を送り来る。領収証を發す。池辺吉太郎本月四日死去の訃に接し弔詞並に奠儀を送り、外に高島義恭に致書す。午後領事館、郵便局、加藤を訪ひ、四時謡曲を学ぶ。

三月八日 陰。安藤新太郎に発信す。理髪後領事館、豊陽館に本庄、板屋、田鍋等に会し、正午帰る。

午後副島を訪ふ。鳥居赫雄の信至る。池邊吉太郎より其母堂五七日忌志として硬質磁皿十枚を送り来る。奚ぞ知らん池邊亦た客月二十八日に於て死去、悼む可哉。晩波多、佐々布、内人と三六庵に至り蕎麦を喫し、佐々布、波多を誘ひ帰る。

三月九日 晴。朝岡田晋太郎の北京行を盛京号に送り、帰途上海日報、加藤を訪ひ帰る。正午波多、佐々布を誘ひ四馬路雅叙園に至り内人と四人にて中食す。二時帰る。副島八十六、橘三郎、木下温知、井上男也来訪。井上を軍艦鳥羽の通訳に推薦し谷口参謀に紹介状を与ふ。村山を訪ひ、姚文藻、汪甘卿に会す。

三月十日 晴。晌午柴少将の催しに係はる園遊会に六三園に赴き、二時半帰る。吉見、山口昇の信至る。夜藤井来訪。鳥居赫雄に致書す。

三月十一日 陰。午前領事を訪ひ小談、二月分経費六百二十円を受取て帰る。本庄少佐、井上男也来訪。夜内人と文路に至る。田鍋安之助、佐原夫婦来訪せりと云ふ。

三月十二日 陰。清藤幸七郎来訪。緒方、阿部野の信至る。午前井野に至り齒療を為し、正金銀行より海軍の手当四百円を受取て帰る。午後加藤、井出、七里を訪ひ、四時七里、副島、原口を春日丸に送りて帰る。晩佐原の招饗に赴く。同座は川島司令官、新高艦長、谷口参謀、桂少佐、加藤中佐等なり。夜雪。

三月十三日 陰、夜来の雪積むこと二寸許。午後御幡雅文の追悼会に本願寺に臨む。

三月十四日 陰。午前田鍋来訪。午後豊陽館に角田、青木、加藤等を訪ふ。

三月十五日 半晴。井手三郎、加来敏夫の信至る。船津辰一郎に致書、御幡夫人に弔詞を發す。午後市原源二郎来訪、昨日大連より来着せりと云ふ。龍田艦長、原篤敬、加藤中佐来訪。晩熊本商業学校職員生徒の招待会に杏花楼に出席し、十時散ず。帰途柴少将を訪ふ。是日午前木村丑徳来訪。井手三郎漢口よりの信至る。

三月十六日 陰。午前海軍に報告を發し、有吉、加藤、龍田艦長を訪ひ、橘三郎と小談、正午帰る。松島正吉来訪。白岩より山根立庵遺稿を送り来る。

三月十七日 陰。午後豊陽館に練習艦隊司令官加藤少将、船越参謀等を訪ひ、一時半海軍候補生百五十余人に対し一時間余支那事情の講話を為す。加藤、川島両司令官、各艦長、参謀皆列席。四時終はる。藤井、佐々布等来訪。

三月十八日 晴。午前領事館、加藤、秦長三郎を訪ひ、井野に至り齒療を為し帰る。午後領事館に有吉を訪ふ。四時謡曲を学ぶ。夜田鍋安之助の招宴に杏花楼に赴き、八時半散ず。帰途村山を訪ひ帰る。

三月十九日 晴、風大。昨夜城内にて兵士の暴動あり。給料不払の為なり。是日又た呉淞に於ける七千の兵給料不払の為め呉淞市中を掠奪せりととの報有り。午前田鍋安之助の帰国を弘済丸に送り、加藤の処で談じ、帰る。土佐屋に致書、内人二十三日の船にて帰国を報ず。晩河野久太郎の井戸川辰三送別の宴に六三亭に列す。研究所出身者を合はせ十二人来会。

三月二十日 晴。午前理髪。正午海軍候補生歓迎会に大慶楼に出席、二時散ず。上海日報社に井手三郎を訪ふ。本日華□より帰来せる者なり。京都大学石川一來訪、狩野直喜の紹介状有り。高島醇来訪。(數行分不鮮明で、判読不可な箇所あり) 加藤□□艦隊司令官より煙草五箱を送らる。晩六三亭の海陸懇親会に出席。加藤、川島両司令官、柴少将、各艦長、並に士官、有志者合計七十余人。九時帰る。

三月二十一日 晴、風強。朝井手来訪。午前領事館に至り引越荷物の説明書□□、上海日報、加藤を訪ひ帰る。加藤少将定吉、船□□□□煙草の礼状を發す。午後秦長三郎来訪。石橋藤次来訪。夜頭山満氏の招宴に六三亭に赴く。会者四十名許。九時半帰。佐々布、波多来談。

三月二十二日 晴。朝美濃部来訪。賀来敏夫北京より来着、之を伴ひて大倉洋行に至り入社せしむ。午後森井左佳置来訪。午後井戸川辰三、河野久太郎来訪。晩伊東米二郎の招饗に辰虹園に赴く。同座は井戸川、井手、木幡、澤本、小畔、中島等なり。八時散ず。高島義恭、井上男也の信至る。夜波多、

加来，佐々布来訪。

三月二十三日 雨。是日内人熊本に帰らんとす。中食後馬車郵船埠頭に至り，内人を送て弘済丸に上る。井戸川，緒方，石橋，久米，松村等本船にて帰国す。午後一時半開船。別を叙して帰る。内人に致書す。

三月二十四日 陰。日曜。午前理髪。午後川内来訪。柴少将，井手三郎，香月梅外来訪。夜井手を訪ふ。熊野一番を謡ふ。

三月二十五日 半晴。漢口岡幸七郎に致書す。午後有吉，加藤を訪ひ，帰途謡曲を学び，佐原を敲き帰る。村山来訪。夜村山を訪ふ。細川護立男，岡本源次，蓑田喜太郎，箱根芦ノ湖より合作の信片至る。

三月二十六日 晴天。午前海軍に致すの書信を認む。午後犬養毅の帰国を送る。美濃部正美の帰国に托し熊本に致書す。天野，香月を訪ひ帰る。若林の信至る。晚佐原の招宴に赴く。同座は井手，篠崎，香月の三人なり。十時帰。雨。

三月二十七日 陰。市原源次郎，松島正吉来訪。午前頭山満を訪ふ。白岩龍平本日来着。午後領事館，加藤，橘，市原，松島，白岩等を歴訪す。内人長崎よりの信至る。小川平吉，橋本基一の信至る。井戸川辰三，並に内人に致書す。松島来訪。夜頭山満の送別会に出席す。新六三に会する者井手，白岩，河野，香月，古莊，秦，青木，橋本，郡島等なり。九時散ず。

三月二十八日 雨天。午後豊陽館に竹下大佐の一行を訪ふ。六時より加藤の招宴に新六三に臨む。竹下大佐，川島司令官，谷口参謀，山川参事官，中村少佐，井手，井出，佐原，有吉等同座たり。十一時散ず。白岩来訪。

三月二十九日 微雨。朝白岩，村山を訪ひ，去て竹下大佐を訪ふ。時事を暢談し，正午杏花楼に至り竹下大佐一行，並に加藤中佐を饗す。竹下，山川，加藤，中村来訪。三時半川内来訪。五時出て吉田健三郎を東和に訪ふ。田島勝太郎の紹介にて来訪，大冶鉄山に赴く者なり。有働政喜来訪。内人長崎よりの信，並に東亜同文会，徳田，西本の信，及び尾野実信，柴五郎両少将よりの案内状至る。竹下大佐より短刀一口を贈らる。

三月三十日 陰。午前竹下大佐を訪ふ，在らず。出師表摺本，並に翡翠三件を贈て短刀の答礼を為す。午後川内来訪。漢口三宅川百太郎に美濃部正美身上の事を托す。宮崎民蔵，村山正隆前後来訪。晚柴，尾野両少将の招宴に六三亭に出席す。九時半井手，河野を誘て帰り松風一番を謡ひ，十二時二人去る。

三月三十一日 晴天。日曜日。午後河野来訪。井手を誘ひ三人軍艦新高に至り川島司令官，谷口参謀，榊原艦長と談じ，五時辞帰。六時井手，佐原と電車有吉領事官邸の晚餐に赴く。同座は川島司令官，竹下大佐，榊原大佐，満洲艦長奥田大佐，谷口参謀，寺島，井出両少佐，中村少佐，山川参事官，浮田，岡本，井手，佐原等なり。九時半散ず。電車にて帰る。

四月一日 陰。朝七時半竹下大佐一行を車站に送る。波多南京迄同行す。一行は漢口，長沙を経て北京に赴く者なり。熊本宅に発信す。午後有吉，加藤を訪ふ。領事館より三月分経費六百二十円を受取て帰る。雨。夜河野来訪。謡曲二番を歌ふ。三木甚市，吉田健三郎来訪。

四月二日 雨。朝豊陽館に至り，帰途理髪。井手三郎来訪。岡幸七郎，中久喜信周，岡田晋太郎，上妻博路の信至る。松寄来訪。

四月三日 快晴。神武天皇祭。午前井手友喜を迎ふ。板谷大尉来別。

唐紹怡南京にて共和内閣を組織し臨時大統領孫文解職。本日午後唐，孫兩人南京より上海に着したり。

四月四日 晴。中久喜，上妻に復書す。井手三郎，秦，川内前後来訪。井手友来訪。夜香月，河野，橘，波多，川内来訪。寛談夜更に及で散ず。

四月五日 雨。宮寄寅蔵，山田純，菊池某来訪。午後宮崎民蔵，井手三郎来訪。晚篠崎の招宴に新六三



に赴く。会者井手、浮田、村上、村山、佐原、西田、井手友、秋田等なり。九時帰る。

四月六日 快晴。加藤壮太郎来訪。海軍に報告を發す。午後井手三郎、井出少佐、板谷大尉、小山田劍南等の帰国を送り、松嵩の病を訪ひ、豊陽館橘の処に河野と会し、三時波多、河野と馬車を同ふし徐家滙に至り桃花を觀る。四郊の花屏正に満開にして紅雲墟落を罩め、麦綠菜黃、春色可掬。製革廠に古莊、高柳を訪ひ小座、郊外に散策して帰る。途中有吉を其官舎に訪ひ、六時帰る。是夜伊東米次郎よりアストルハウスに招宴、辞して行かず。清子、並に七里恭の信至る。

四月七日 半晴。午後藤瀬宅の園遊会に赴き、六時橘、河野と倶楽部に帰る。七時より伊東米次郎、石井の送別会に出席、八時半帰る。

四月八日 半晴。朝河野久太郎、橋元勇藏来訪。清子に復書す。七利恭三郎に復書す。外波少将を豊陽館に訪ふ。本日福州より帰来せる者なり。加藤の処に小談、佐原と共に帰り其寓に至り小坐、五時帰る。西本福州より帰来、肉脂、箸を贈る。前島真より汪瘦石の画幅一軸を送り来る。前島に礼状を發し、別に平井中佐より肉脯を贈りしに對し謝状を發す。夜西本、波多、川本来訪。

四月九日 陰。午後上海日報に至り、三時半伊東米次郎の帰国を弘済丸に送る。英国敦倫に転任する者なり。川島司令官、榊原艦長、谷口參謀と有正書局に至り字帖を購ふて帰る。河野来訪。市原源の信至る。

四月十日 晴。辻武雄、田鍋安之助、御幡尚一の信至る。佐原篤介来訪。午後領事館、加藤を訪ふ。海軍に報告を發す。小詩一首漢口吟侶に次韻す。

桃源開説春光新、泛舸羨君去問津、到日如逢避秦客、為言東海有仁人。

山川端夫の信至る。夜木下温知来訪。

四月十一日 晴天。細川護立男爵に返書を呈す。浮田宅より祝餅紅包一重、鰯等を贈り来る。夜河野来訪。

四月十二日 晴天。海軍に報告を發す。熊本宅に致書す。午後有吉、加藤を訪ふ。帰途理髮。白岩来訪、晩食後帰る。夜青木茂、西本来訪。

四月十三日 陰天、風大。村山正隆来訪。午後平岡小太郎来訪。五時より平岡勇藏宅の謡曲小集会に出席す。支那料理の饗有り。同座松尾師匠、木幡、幡生、長野、桂等なり。十時帰る。井戸川辰三、高洲太助、井手三郎の信至る。

四月十四日 晴暖。朝加藤中佐来訪。九時より波多と龍華百歩橋の同文書院端艇競漕会に臨む。三、四回を觀、三菱の汽船にて帰る。途中加藤を訪ふ。今村直夫来訪。夜佐原、西本、波多来訪。

四月十五日 陰。宝妻の信片至る。佐原より西伯里のバター包を贈り来る。正午小越平陸来訪。午後有吉、加藤を訪ふ。熊本留守宅に致書し肉脯三缶を小包にて送る。帰途謡曲を学び、佐原を一訪して帰る。佐々布、光明寺内藏造来訪。夜東和洋行白岩の処に小越平陸、香月、村山、郡島等と会談、十一時半帰る。

四月十六日 晴天。午前小越平陸の帰国を送り、帰途外波少将、橘三郎を訪ひ帰る。本庄少佐来訪。夜青木茂、村山正隆来訪。

四月十七日 晴。午後尾野兼基を楊樹浦上海紡績に訪ひ青木茂の事を托し、帰途光永眠雷を華徳路に訪ふ、在らず。加藤、谷口と豊陽館に暢談して帰る。六時小畔、弘内の送別謡会に倶楽部に出席、十一時半帰る。内田信子、吉見、井手の信至る。

四月十八日 晴。午前内人熊本よりの信至る。午前青木茂、井手友喜来訪。午後領事館、橘三郎、本庄、高橋栄七を訪ふ。高橋には吉見春生身上の事を商量せり。謡曲を学び、五時帰る。夜長尾楳太郎来訪。佐々木武藏より蕨を送り来る。

四月十九日 晴。正午香月、波多、西本等を招き汁子を会食す。村松虎雄、青木茂、木下温知来訪。夜高田九一、佐々布来訪。七里より元田先生進講録一部を送り来る。

四月二十日 晴。熊本内人、井手三郎、吉見春生、七利恭三郎に復書す。井手友、波多来訪。午前有吉を訪ひ、去て木幡恭三夫婦の帰国を送り、豊陽館に加藤、外波を訪ひ帰る。村松虎雄を軍艦の通訳に推薦し谷口参謀への紹介状を村松に与ふ。井手三郎、島田数雄の信至る。

四月二十一日 晴。六時半より香月と電車楊樹浦の終点に至り下車、鳴簾を為す。獲る所無し。晌午帰る。熱甚し。内人より美濃部正美の来滬に托し袴、セル衣、子ル衣、蚊帳を送り来る。竹下大佐勇、岡幸七郎漢口よりの信至る。午後二時義勇隊の慰労会に六三園に臨む。熱甚し。白岩、河野と同車河野宅に帰り、香月四人会食。寛談九時に及で帰る。

四月二十二日 晴。朝小山逸平、美濃部来訪。小山は印度ビナンよりの帰途なり。熊本宅に発信す。午後領事館、加藤、外波を訪ひ帰る。有働政喜、甲斐友比古来訪せりと云ふ。夜村松生来訪。雷雨。

四月二十三日 陰。午前光明寺内蔵造来訪。午後甲斐友比古来訪。長春川口市之助より電報至り、商業失敗の爲め一時三千金の代籌を求め来る。直に返電を發し、別に一書を致して将来を戒飭せり。

四月二十四日 半晴。河野、香月を訪ふ。午後清藤幸七郎来訪。川口市之助に発信す。海軍軍令部の信至る。熊本井手の信、並に土屋員安、井手、井芹、山田等静養軒より合作の信片至る。土屋は新たに欧洲より帰来せる者なり。松元勢蔵の信片至る。井手、土屋に復書す。狩野直喜に致書す。

四月二十五日 晴。午前村山正隆来訪。午後加藤、秋元来訪。秋元少佐は井出の後任として来着せる者なり。川口の電報至る。午後佐原を訪ひ、去て謡曲を学ぶ。夜仏蘭西学校附近失火、延焼甚広。東和の主人来訪、昨日其旅館二十二号室にて邦人三、四名共謀にて宝石類詐取の悪計にて支那人を絞殺せりと云ふ。

四月二十六日 晴。朝河野久太郎来訪。内人に致書す。午後上海日報、加藤、秋元を訪ひ、五時帰る。吉見、伊東小三郎の信、並に旅順安村少佐より其内君死去の訃至る。

四月二十七日 晴。勝見雄助来訪。吉見春生、海軍吉田大佐に致書す。午後加藤、外波を訪ふ。安村少佐に其夫人の死去を弔す。池辺一郎、齋藤國男、板谷清寛の信至る。熊本留守宅の信至る。之に復す。

四月二十八日 雨。是日香月、迎、平岡と出簾を約せしも雨を以て止む。午前白岩を東和に訪ふ。井上男也の信至る。午後加藤を訪ふ。

四月二十九日 陰。午前領事館に至り四月分経費六百四十円を受取り、帰途松寄を訪ひ本月の手当を渡し、西本、波多にも手当を支給して帰る。午後謡曲を学び、帰途佐原を訪ひ、茶話時を移して帰る。夜高島、波多来訪。

四月三十日 晴。海軍に報告を發し、内人に致書す。西本省三の帰県に托し黄瓜、菀豆一筆を熊本留守宅に送る。午前西本を船に送り、有吉、加藤を訪ひ帰る。午後佐原、安河内、村杵来訪。安河内より本年正月より三月末日迄の利子三ヶ月分百三十五元を送り来る。

本日北京電報

四国公使の強硬なる抗議に辟易し白耳義借款は予約を取消すことは誓ひし上、六国敗因に対し焦眉の急を訴へ先づ三千五百万両を供給のことを要求し来りたるに、敗国は貸附の条件として中央に財政監督官を入ることと、塩税の管理を海関と均しく外人の掌中に帰せしむること、及び公使館附武官をして軍隊給与の実況を調査し是れが監督を為さしめんとするの要件を提議せり。

五月一日 晴。午前波多と姚文藻を訪ひ小談、去て静安寺路に村山正隆を訪ひ、中食して帰る。中根齊来訪せりと云ふ。長春川口市之助の電報、並に書信至る。横山吏弓、美濃部正美の信、並に三菱三宅川の案内状至る。夜宮崎信夫、古澤来訪。木幡恭三、岳翁、小山田劍南の信至る。

五月二日 晴。海軍に訳稿を送り、小山田に復書す。午前上海日報、河野、香月を訪ひ正午帰る。荒尾の妹□□子、伊東米治郎の信、並に長浜浅見又蔵より慶雲館二十五周年祝典の案内状至る。勝見雄助来訪。

五月三日 晴。午前加藤中佐来訪。池辺一郎より其父の遺墨摺本を送り来る。島田数雄より茶一缶送

来。岡幸七郎の信片至り名墨三本を送り来る。岡に復書す。浅見又蔵に復書す。午後殷雷暴雨。海軍に訳稿を送る。出て理髪。上海日報、中根齊、立川、加藤を訪ひ帰る。

五月四日 晴。午前佐原を訪ふ。午後青木茂、神田正雄来訪。大阪鳥居より神田に托し墓口二個を贈り来る。川島、名和両海軍少将より来九日招宴の案内状至る。午後河野久太郎、加来敏夫来訪。井手三郎、小山一平の信至る。夜三宅川百太郎の招宴に六三亭に赴き、九時帰る。深水十八来訪せりと云ふ。小山一平に復書す。

五月五日 快晴。日曜。午前六時香月、平岡、迎と朝食を共にし、江湾附近に獵す。鶺鴒三羽を獲、正午帰る。深水十八、天野平八来訪。村松虎雄、佐々木武蔵の信至る。佐々木は九江に転任せりと云ふ。夜神田正雄を東和に、深水を豊陽に、中根を全上に訪ふ、在らず。加藤と暢談、十時帰る。神崎正助来訪。

五月六日 快晴。鳥居、川口市之助に復書す。海軍に報告を発す。中根齊、青木茂来訪。午後上海日報、秋田を訪ふ。夜佐原来訪。

五月七日 快晴。午後三宅川百太郎、中根齊の帰国を送る。軍令部に訳稿を送る。井手、秋元を訪ひ帰る。西本、小野清秀、宮崎民蔵、吉見春生等の信至る。晩佐原を訪ひ、去て杏花樓の北京会に出席す。同座は神田、齋藤延、本庄、板屋、西田、波多、佐原、遠藤等なり。十時帰る。

五月八日 半晴。朝名和新司令官を迎ふ。郵船遅着の爲め加藤の処にて朝食し帰る。板屋大尉清寛来訪。午後名和少将を筑後丸に迎へ其寓豊陽館に至り小談、帰る。深水十八来訪。林貞良、牧卷次郎の紹介状を携へ来訪。神田正雄来訪。晡時神田を東和に訪ひ別を叙す。本夕漢口に赴くを以てなり。白岩、天野等を訪ひ、去て佐原宅の晚餐に赴く。同座は香月、白岩の二人なり。十時四十分帰る。階上の居室二間皆開放され簞笥中に在りし日本紙幣三百七十五円盗み去らる。

五月九日 快晴。井手友喜、林貞良来訪。熊本宅に致書す。領事館の巡查、並に居留地警察の探偵来り昨夜盗難の調を為す。清水十八、清藤幸七郎、青木茂等前後来訪。五時加藤を訪ひ、共に出て軍艦新高の招宴に赴く。名和新司令官、川島少将主人たり。十時散ず。福岡頭山満の信至る。

五月十日 雨。午前深水来訪。午後上海日報、加藤を訪ふ。晩倶楽部の謡会に出席す。

五月十一日 陰。午前吉田昉来訪。其嚴君義静氏の逝去せるが爲め帰国すと云ふ。午後佐原、井手、加藤を訪ひ、五時川島前司令官、弘内一海、吉田の帰国を送て佐渡丸に至り、帰途南新吾と共に佐原宅に至り茶話、七時帰る。内人の信、並に井手、松倉、右田の信片至る。夜香月、波多来訪。九時より名和、川島両少将の招宴に新六三に赴く。清国前南北洋水師總統薩鎮冰亦来会。十二時帰る。

五月十二日 晴天。午前六時香月、迎、波多と朝食を共にし、江湾附近に獵す。獲る所無し。時計を遺落す。正午帰る。波多と中食す。午後有留重利、並に名和第三艦隊司令官、榊原新高艦長、加藤中佐来訪。六時白岩、河野来訪。留て晩食し寛談、夜更に及で去る。高洲太助、今井邦三来訪。

五月十三日 晴。本願寺木村常諦より晩餐の案内有り、事を以て辞す。木村を訪ひ、帰途理髪して帰る。午後高洲太助を「アストルハウス」に訪ひ、去て上海日報に至り、転じて豊陽館に岡本柳之助の病を問ふ。昨日より腸出血にて危篤に瀕せるを以てなり。深水十八、秋元少佐と暢談。帰途木下温知夫婦を鈴木病院に見舞て帰る。篠崎来訪。

五月十四日 晴。午前高洲太助、加藤中佐、波多、村上夫人前後来訪。午後岡本柳之助の病氣危篤の報に接し行て之を訪ふ。途次宮崎民蔵を訪ふ、在らず。尾崎、宮崎寅、白岩等と小談。何天炯、熊越山亦来会。加藤の処にて名和司令官、谷口参謀、榊原艦長等と談じ、五時帰る。岡本柳之助氏本日午後三時半豊陽館に客死す。

五月十五日 風雨。午後四時岡本の葬儀に東本願寺に列し帰る。七時より河野の招宴に新六三に赴く。同座は船津辰一郎、有吉明、白岩龍平、岡本、及余なり。十時帰る。西本省三の信片、並に辻武雄より其夫人の死去を報じ来る。

五月十六日 陰。熊本宅に致書す。辻武雄に其夫人死去の弔詞を送る。有留重利来訪。六時倶楽部に深水十八、船津辰一郎を招宴し、九時帰る。豊島捨松漢口よりの信片至る。

五月十七日 風。朝加藤壮太郎来訪。午後佐原、尾崎、加藤を訪ふ。海軍に致書す。香月を訪ひ帰る。船津文雄、有働、深水来訪。佐原宅より赤飯を送り来る。

五月十八日 晴。朝豊島捨松を東和に訪ふ。午後郡島忠二郎、豊島捨松、高洲太助、橘三郎来訪、六時帰る。川口市之助、生田清範の信至る。

五月十九日 晴。日曜日。午前六時波多と汽車江湾に獵す。獲る所無し。九時の汽車にて帰る。加藤、勝見、藤富敬二来訪。午後井野春毅来訪。五時名和司令官の晚餐に豊陽館に赴き加藤中佐と三人寛談、九時帰る。柴少将来訪。

五月二十日 半晴。午前尾崎行昌来訪。午後清藤、深水来訪。出て河野、井手、加藤、佐原、宮崎等を歴訪して帰る。

五月二十一日 晴。午後侍従武官長中村中将を迎ふ。帰途村山を訪ふ、在らず。同文書院山本熊一、外一名来訪、来る土曜日書院の講演会に一場の講話を求む。夜佐々布来訪。海軍吉田大佐の信、並に内人の信至る。清子七日の午後二時より重患に罹り一時危険状態に陥りしも十五日より漸く快方に向ひ粥、牛乳を用ゆるに至りしと云ふ。慶幸何ぞ之に加へん。辛島、安達列連名にて故毛利篤の遺族扶助損金を求め来る。

五月二十二日 晴。熊本宅、河口介男、井手三郎、久野尉太郎、海軍に致書す。久野に毛利弔慰金五円を送る。午後出て豊陽館に至り、去て東和に豊島を訪ひ暢談、四時帰る。海軍少佐高倉正治、村山正隆来訪。生田青範に復書す。有留重利来訪。夜磯部太郎、山川早水の添書を携へ来訪。

五月二十三日 快晴。朝豊陽館に至り名和司令官に別る。本日出港、長江に溯航するを以てなり。加藤と暢談、帰る。有留生来訪。午後有働、河西信、香月梅外等来訪。晩豊島捨松を杏花楼に招宴す。同座は佐原、西田、波多、齋藤、本庄、遠藤、神崎等なり。十時散ず。

五月二十四日 積陰。午前河西真、加藤、橘を訪ひ、正午新六三に白岩、豊島と会食し、三人去て橘に抵り小談、帰る。軍令部に発信す。晩白岩の招宴に辰虹園に赴く。同座は河西、橘、並に研究所出身者十余人なり。九時帰る。雨。

五月二十五日 雨。午後一時豊島捨松の北京に帰るを車站に送り、佐原の処にて辜鴻銘と三人会食し、去て本庄、宮崎民を訪ひ、豊陽館に加藤と小談、帰る。岡幸七郎、辻武雄の信至る。  
江西鉄道に我東亜興業会社より五百万円貸附の仮契約成立す。

五月二十六日 晴。午前村上貞吉、光明寺某、岡吉次郎来訪。午後島田数雄を訪ふ。昨日帰来せる者なり。帰途佐原を訪ひ帰る。加藤、清藤、岡等来訪。

五月二十七日 晴。午前島田数雄来訪。海軍に訳稿を送る。午後有吉、加藤、古谷を訪ひ帰る。晩海軍記念日にて加藤、並に淀艦長の招宴に新六三に赴く。同座は海軍士官と領事館員三名、本庄、天野、藤瀬、佐原、及余なり。十時帰る。熊本宅の信至る。

五月二十八日 晴。午前九時橘三郎、天野平八、真島二郎等の帰国を送る。岡幸七郎に復書す。井上男也の信至る。之に復す。夜井手を訪ふ。

五月二十九日 雨。内人、軍令部に致書す。午後領事館に至り本月份経費六百四十円を受取り内二百円を熊本留守宅に郵送し、波多、松寄、西本三人の手当を波多に交付し、加藤を訪ひ帰る。晩井手の招宴に杏花楼に赴く。同座は島田、小池、遠藤、岡等なり。九時帰る。本庄少佐来訪。

五月三十日 微雨。午前河野久、深水十八、藤井太七来訪。藤井は大秦洋行を辞し来月一日の船にて帰国すと云ふ。竹下大佐、山川端夫、中村良三の信至る。中島止水、加藤中佐、鳥巢少佐来訪。

五月三十一日 晴。朝鳥巢少佐、伊東米二郎の欧州行を送る。海軍に通信を発す。出て理髪す。

六月一日 晴。午前小池、藤井太七、幡生、荒木等の帰国を送る。島田数雄来訪、金五十円を返却す。



有留重利来訪。同文書院学生二人来訪。森茂，河口介男の信，並に井手，古庄，右田以徳合作の信片至る。

六月二日 晴。海軍に訳稿を送る。午後加藤，佐原を訪ふ。夜井手を訪ふ。

六月三日 晴。六時宮寄寅藏の晩餐に山田宅に赴く。同座は宮寄，山田，本庄，岩本千綱等なり。十時半帰る。雨。

六月四日 雨意。村杓来訪。竹下大佐，山川参事官に復書す。吉田大佐に致書。午後漢口郵便局長渡辺の帰国を送り，帰途本庄，加藤を訪ひ帰る。有留重利，村松虎雄来訪。加藤中佐，山本，秋元両少佐来訪。

六月五日 陰。午前河野，杓崎来訪。朝山本少佐の漢口行を車站に送る。吉田大佐，増田中佐，西本の信至る。増田は加藤に代はりて上海駐在と為りし者なり。増田に復書し，並に吉田大佐に訳稿を送る。石橋藤次郎，真島次郎の信至る。七時安場男，浮田郷次の送別会に倶楽部に出席，両氏に対し一場の挨拶を為し，十時に至り散ず。会者五十余人。

是日午後高昌廟に於て譚人鳳の兵と第九旅団の兵と小衝突あり。

六月六日 晴。午前光明寺来訪。午後出て佐原，宮崎，加藤を訪ひ，五時帰る。木下温知来訪。

六月七日 陰。寺中猪介，萩原勝造来訪。森茂，真島次郎，石橋藤次郎に復書し，海軍に訳稿を送る。

上海日報社に至り五時半帰る。

六月八日 晴。午後佐原，加藤を訪ひ，五時半新六三に加藤，浮田の送別会に出席す。同座は白岩，河野，村上，篠崎，神崎，遠藤，井手，佐原等なり。十一時半散ず。熊本内人の信，並に林正良の信片，及び北京小川勝猪病死の訃報至る。

六月九日 晴。午前井手友，小平篠坪，松崎在雄，崎元盛幸来訪。十時井手と同文書院に根津を訪ふ。昨日来着せし者なり。帰途寺中猪介を敲き帰る。加来来訪。五時河野の晩餐に赴く。白岩，香月，郡島，土井同座たり。九時半帰る。

六月十日 晴天。午前郵便局に至り熊本宅，並に吉田大佐に致すの信を發し，加藤を訪ひ前借の金子を返納し，郵便局にて本日海軍より送り来れる七，八，九，三ヶ月分の手当を受取り，帰途理髮。正午佐原宅の午餐に赴き，二時帰る。夜白岩の招宴に六三亭に赴き，九時帰る。李泉溪南京よりの信至る。

六月十一日 晴。下痢を催す。終日静養。木下温知来訪。近藤軍令部副官に金子領収書を送り，吉田大佐に国民捐規則書を郵送す。夜迎英輔来訪。

六月十二日 晴。土屋員安の信至る。台北中学校長に転任せりと云ふ。今井邦三の信片至る。午後立川医士夫婦来訪，夏布一反を贈る。午後加藤，中島両中佐来訪。中島は伊太利に赴く者なり。西本省三来訪，本日帰来せりと云ふ。晩加藤の招宴に杏花楼に赴く。同座は中島，秋元，西尾秋津洲艦長等なり。九時散ず。

六月十三日 陰。午前奥村金太郎来訪。台湾観光団の一行として昨日来着せりと云ふ。木下温知来訪。午後立川秀一，西本，崎元，奥村金，金萬，加藤，深水，本庄，中島中佐，秋元，高倉等を訪ひ帰る。金萬，浮田来訪。雨。晩杏花楼に奥村金太郎を招饗。深水，井手，島田同座たり。八時半散ず。

六月十四日 雨。午前豊陽館に至り奥村金太郎を送り，加藤，原龍田艦長等と暢談，晌午帰る。午後佐原を訪ふ，在らず。波多，西本と小談。李泉溪に南京に復書す。昨日時報館より去年十二月より本年四月に至る報酬二百五十元を送り来る。

六月十五日 半晴。午前浮田郷次の帰国を送る。五時佐原，吉阪写真館より倶楽部の根津歓迎会に出席し，九時帰る。井手三郎，藤井太七，鳥居赫雄の信至る。立川医士来訪。□□□□留守府の事務を□徳□に引渡し□□□□廃す。是日南京の留守黃興職を辞して上海に来る。

六月十六日 陰天。午前加藤中佐来訪。午後加藤と軍艦龍田を訪ひ原艦長と暢談，四時帰る。明日出港帰朝するを以てなり。島田数雄来訪。台湾土屋員安，並に鳥居，藤井に復書す。中島為喜の信，並に

写真至る。北京実相寺、鷺澤、板谷、齋藤等合作の信片至る。中島に復書す。

六月十七日 晴。午後郵便局、佐原、香月に至り、四時帰る。阿南鎮民より写真を送り来る。天野平八、西村時彦、牧卷次郎、川口市之助等の信、並に神田正雄より其夫人の死去を報じ来る。河野久、篠崎、井上男也来訪。夜佐江田隈城来訪。

六月十八日 晴。朝根津一來訪、晌午迄寛談。佐江田生来訪。神田正雄に弔詞を發す。天野平八に復書す。午後安河内、並に書院生徒二名来訪。有働、立石、高山三生亦来訪。出て理髮。村山正隆来訪。七時加藤中佐、岡本官補の送別会と金万副領事の歓迎会に俱樂部に出席、九時帰る。

六月十九日 雨。是日端陽節たり。尾崎行昌、伊東祐二前後来訪。夜波多と福家に至りアイスクリームを喫す。

六月二十日 晴。午前加藤を訪ふ。午後有働来訪。内人の信至る。

六月二十一日 半晴。午前宮崎民来訪。午後郡島、西本来訪。(一行分読み取れず)

六月二十二日 晴。熊本宅に致書す。津田武来訪。正午山田純三郎の招宴に杏花楼に赴く。同座は同盟会の幹部有力者徐紹楨、呂志伊、曾昭文、何天燭、戴天仇、陶鑄、廖国仁、姚志强、王夏、陳方度以下三十余人。二時半散ず。帰途篠崎に至り診を乞ひ帰る。津田武、波多、西本と会食し、九時津田を送て帰る。本人は雲南より帰来せる者なり。

六月二十三日 晴。午前加藤中佐と旗艦新高に名和司令官を訪ふ。本日漢口より入港せる者なり。正午加藤の処に中食して帰る。土屋員安、岡西門の信片至る。深水、木下来訪。五時深水と公園に至り熊本県人一同と撮影し、杏花楼の同文書院同県出身者第九期卒業生佐藤、佐藤、中島、有働四生の送別会に出席、九時帰る。

六月二十四日 雨、熱甚。午前宮崎民来訪。廖国仁より今夕雪花亭に招宴の帖至る。六時之に赴く。同座は何、鄧、肱、李、呂、以下十余人。熱甚。八時帰る。阿南鎮民の信至る。

六月二十五日 大雨。吉田大佐、有働信義、有働善行、石橋藤次郎等の信至る。名和司令官、本庄少佐の案内状至る。七時木幡恭三の招宴に六三亭に赴く。同座は加藤中佐、秋元、高倉両少佐、石渡、須賀、外一名なり。九時帰る。

六月二十六日 陰。午前豊陽館に至り加藤等と出て増田高頼を迎ふ。午後井上男也来訪。五時豊陽館に増田、加藤を訪ひ、六時半名和第三艦隊司令官の招宴に旗艦新高に赴く。同座は加藤、寺島、増田三中少佐、有吉、金万、佐原、榊原艦長、奥田満洲艦長、谷口參謀、隅田艦長、秋元、高倉両少佐、岡本、本庄、外数人なり。九時辞帰。十時三菱齋藤の招宴に六三亭に赴く。同座は加藤、増田、高倉、秋元の四人なり。十一時帰る。海軍より本年度内第一回機密費三百円を送り来る。

六月二十七日 晴天。午前増田、加藤両中佐来訪。午後佐々布を訪ひ、去て商務印書館に小平を訪ひ書籍を買ひ、帰途河野を一訪して帰る。有留生来訪。

六月二十八日 晴。午前加藤を訪ひ明日帰国するを以て土宜一包を贈る。帰途佐原を一訪して帰る。晌午近郊火有り。波多、香月、佐原、有働、辻、井手、西本、松嵩等来訪。奥倉司令官より三十日の案内状至る。七時増田、加藤の招宴に六三亭に赴く。主賓四十余人。十二時散ず。

六月二十九日 晴。午前加藤壮太郎、角田隆郎の帰国を春日丸に送り、領事館より本月份経費六百四十円を受取て帰る。島田数雄来訪。午後有留重利来訪、本人を軍艦新高の支那語教師に推薦す。船津辰一郎来訪。安藤新太郎に致書す。領事官補岡本武三来訪。長沙に転任する者なり。同文書院生二名来訪。晩本庄少佐の招宴に六三亭に赴く。来客は黃興、何天燭、曾昭文、楊某、並に奥倉大佐、増田、板谷、林、有吉、宮崎、山田、白岩、根津等なり。十一時半帰る。

六月三十日 陰。鹽谷温、松崎、秋元前後来訪。午後二時より馬車にて同文書院第九期卒業式に列し、六時半帰り、七時與倉漢口駐屯隊司令官の招宴に六三亭に出席し、十一時帰る。

七月一日 雨。近藤副官に本年度機密費三百円の領収証を發し、軍令部に通信を出す。熊本宅、長崎土

- 佐屋に帰国を報ず。正午新六三に増田高頼、塩谷温、寺島参謀を招宴す。同座は白岩、河野、神崎、齋藤、佐原等なり。三時散ず。増田を訪ひ小談帰る。津田武、川口市之助、遠山一治の信至る。
- 七月二日 陰天。岡に致書。岡本に托し銀三元を岡に返還す。七時東和に與倉大佐、板谷大尉を訪ひ、去て郵船碼頭より八時半の小汽船にて軍艦新高に至り、名和司令官、谷参謀、榊原艦長と談じ、十一時帰る。有吉を訪ひ小談。午後村上貞吉、有働来訪。出て村上宅を訪ひ其内人に面して帰る。川口市之助、阿南鎮民、姚文藻に復書す。夜襄陽丸に與倉、板谷、岡本を送り帰る。
- 七月三日 陰。午前村山正隆来訪。午後郵船会社に至り長崎迄の往復切符を購ふ。四十五円なり。篠崎、井手、島田を訪ひ帰る。加藤中佐の信片至る。
- 七月四日 晴。有留重利、郡島忠前後來訪。夜佐々布、佐原、加来来訪。
- 七月五日 雨。午前海軍に支那政党の調査報告を送る。帰途有吉、古谷、増田、高倉等を訪ひ別を告て帰る。深水、勝見、宮崎民、島田、波多、松寄、井手、西本、副島、井野来訪。六時河野の招宴に辰虹園に赴く。来賓は黄興、徐紹楨、李平書、以下内外三十余人。九時半辞帰。佐原を訪ひ小談、帰る。
- 七月六日 陰。井上、島田、村上夫人、有働来訪。正午行李を船に送り、二時半筑後丸に上る。根津一と同室たり。黒川新次郎、匝嵯少佐同船たり。名和司令官、谷口参謀、榊原大佐、秋元、高倉兩少佐、増田中佐、本庄少佐、木幡、平野、宮寄兄弟、尾崎、前島、清藤、香月、平岡、迎、井野、郡島、土井、澤本、佐々布、波多、松寄、西本、塩谷温、井手、上海日報社員、篠崎等来り送る。三時十五分開船、五時吳湘口を出つ。
- 七月七日 陰。波浪頗高。
- 七月八日 陰。午前十時長崎港に入る。検疫後根津と別る。終て土佐屋に入る時に午後零時半也。宮崎寅藏、波多、松寄、西本、小早川等に致書す。午後御幡未亡人を新大工町に訪ひ、五時帰る。
- 七月九日 晴。是日前六時半の汽車にて熊本に帰らんとす。早起行李を戒め六時車站に至り上車す。十時十五分鳥栖に至り換坐、十二時二十分上熊本着、河口、田中、亀雄等来迎。一時新屋敷の宅に帰る。平山岩彦、井手三郎来訪。夜田中清司来訪。
- 七月十日 陰。午前井手、大江、古莊、物産館、小早川、山田、河口、鎮西館、内藤儀十郎、古閑信夫、田中、佐々布、上妻、井芹、井場、辛島、正木宅を歴訪して帰る。午後緒方、阿部野、山田珠一、山田九郎、白石卯一等前後來訪。夜亀雄宅を訪ふ。古閑信夫並に家族来訪。
- 七月十一日 積陰。午前肥後銀行支店に至り八百円を預入し、高道齒科医に就き齒療を為し帰る。井場熊喜、内藤儀十郎、中島為喜母堂前後來訪。内藤翁を留め申す。午後石原醜男、古庄頼来訪。
- 七月十二日 暴雨。上妻博之来訪。辻武雄、上妻博路、奥村金太郎、井手三郎の信至る。板井鹿男来訪。午後齒療を為し理髪して帰る。松倉善家、井手三郎、久野尉太郎等来訪。
- 七月十三日 暴雨。白川増水の為め明午橋交通遮断と為る。午前井手、大江を訪て帰る。是日盆会の仏事を行ふ。
- 七月十四日 晴雨無定。田中清司、佐々布遠来訪。午後齒療を為す。傍晚陸軍中佐晴気市三、同少佐木藤弥太郎来訪。晴氣は清国に於ける旧知なり。夜井手、小山令之、林田某来訪。
- 七月十五日 陰。午前井手を訪ふ。本日より上京すと云ふ。高道の処に齒療を為し、帰途阿部野、緒方と小談、帰る。午後大江に至り、六時辞帰。晴雨無定。亀雄来訪。
- 七月十六日 晴雨無定。田中大佐、松崎雀雄の信至る。岡幸七郎、波多博の信至る。午後上車洗馬に晴氣中佐を訪ふ、在らず。春日に松倉善家を訪ひ寛談。五時半静養軒の古川権九郎歓迎会に出席、十時帰る。
- 七月十七日 晴。朝齒療を為し、去て河口介男を訪ひ、転じて鎮西館に平山を敲き共に出て研屋支店に至り古川権九郎、中西正義を訪ひ中食寛話、四時帰る。東京加藤壮太郎の信至る。夜内人と藤崎神社に拝し市内を散歩して帰る。

七月十八日 晴。蓑田大九郎来訪。海軍吉田大佐、加藤中佐、並に上海有吉領事、増田中佐、波多博、木幡、平野に致書す。蓑田大九郎来訪。

七月十九日 朝雨、午後晴。午前高道に至り治療を為し之を完る。上田仙太郎の露国より帰来せるを聞き行て之を訪ふ、在らず。勝木来訪せりと云ふ。宮崎寅藏、長野一誠翁の信至る。佐藤、有働、津野、永原来訪。

七月二十日 晴。午前上田仙太郎、山田珠一、佐々干城来訪。夜中将姫の祭を観る。

七月二十一日 微雨、少時にして歇む。佐々干城氏来訪。吉田松陰真筆忠表記実の抄本を貸与さる。陳化成殉難の始末を記せる者なり。佐原篤介に致書す。夜井口忠来訪。

七月二十二日 微雨。午前理髮。河口、鎮西館、阿部野、緒方等を訪ふ。午後松倉来訪。市原源、松寄奎雄、鳥居赫雄、檜木野等の信至る。夜大江に至る。微雨。

七月二十三日 陰、午後大雨。上海村山正隆、井手友喜、波多博、佐々布の信至る。木下俊雄来訪。二時鎮西館に至り、四時より山田珠一、小早川、上田仙太郎、緒方、阿部野、古庄、木下、岡、平山、松村、上田茂、三津家、勝木、中路、江島等と静養軒に会宴し、九時帰る。雨。

七月二十四日 雨。波多博に復書し、海軍吉田大佐に致書す。松崎、村山、井手友、佐々布、河野、島田、本庄に致書す。午後不破昌材、平山、阿部野、岡、中路来訪。晩食を共にす。

七月二十五日 雨。吉田大佐、上妻博路の信至る。

七月二十六日 陰、微雨。東京井手三郎の信至る。

七月二十七日 陰。黒川徳次来訪。午後二時東亜同志会の求に応じ物産館集議室に至り上田仙太郎と共に一場の談話を為す。来聴者四百余人、五時終る。散後上田、緒方、(一行分読み取れず)飯を吃し、帰途河口宅を訪ひ帰る。

七月二十八日 雨。齋藤國男の信至る。午前井芹経平、古庄頼、今井精一、奥村金太郎、瀬谷佐次郎、生田清範、古川権九郎等来訪。上田を留て中食す。午後古閑信夫来訪。

七月二十九日 晴。東京井手、齋藤國男に復書す。午前理髮。山田珠一、阿部野、河口、鎮西館を訪ひ、正午帰る。西本、光明寺、清藤幸、佐原、細山、井上保昌、岡本武三、川本静夫、鳥居等の信至る。鳥居、西本、清藤に復書す。

七月三十日 晴。是日午前零時四十三分を以て天皇陛下崩御あらせられ、本日前一時皇太子嘉仁親王殿下下祓祚せられ、同時に劍爾渡御の式を行はせらる。天皇陛下には本月十九日より御不予にて御就床せられしが今日崩御の発表有り。挙国皆悲。本日午前済々覺にて講話を為すの約有りしも陛下御崩御の為に中止す。宝妻の信至る。十一時陛下の遥拝式に鎮西館に列す。晡時上田仙来訪、今夜より上京すと云ふ。

七月三十一日 半晴。是日より大正と改元す。

八月一日 晴。正午高等学校生徒入江某来訪。

八月二日 晴。岳翁来訪せらる。吉見生来訪。

八月三日 晴、熱甚。午前緒方二三、松村辰範来訪。午後(一行分読み取れず)。

八月四日 晴。午前田中清来訪。午後小早川来訪。是日晌午古莊嘉門翁を訪ふ。

八月五日 晴。佐藤逸人來訪。夜家族と河口宅を訪ふ。

八月六日 微雨、忽にして晴る。加藤中佐の信至る。之に復す。上海波多博の信、並に七月分百三十円送り来る。夜家族と田中清司を訪ふ。夜更下痢三回。

八月七日 半晴。午前葉室侃温、田中清司来訪。井手三郎、上田仙太郎、米原繁藏に致書す。勝木、三城来訪。佐原篤介に致書す。

八月八日 半晴。午前理髮。坪井郵便局に至り波多博よりの送金百三十円を送〔受け〕取り、帰途緒方、阿部野と小談、帰。河口来訪。狩野直喜、鳥居赫雄、土屋員安に致書す。葉室謙純、上妻博路の信至る。



る。就寝後波多博、佐藤逸人、有働来訪。波多は本夕上海より来着、白水館に投宿せりと云ふ。上海島田数雄の信至る。是日立秋。

八月九日 晴。朝波多来訪。十時半家族、波多同伴上車、水前寺に至り旗亭に投じ午餐を共にす。佐藤逸人亦来会。雷雨至る。午後五時帰る。帰途白水館に波多と談じ、六時半帰。夜波多来訪、別を告ぐ。明朝大分に帰ると云ふ。美濃部正美の信至る。

八月十日 晴、午後大雷雨。夜井手来訪。本日東京より帰熊せり（一行分読み取れず）。

八月十一日 午後雷鳴微雨。鳥居赫雄の信至る。朝井手を訪ひ晌午帰。

八月十二日 晴。吉田寿三郎、上田仙太郎の信至る。午前松倉来訪。夜大江を訪ふ。

八月十三日 晴。佐野直喜、狩野直喜、奥村金の信至る。午前不破昌材来訪。佐野に復書す。夜河口を訪ふ。

八月十四日 晴。午前北御門松次郎来訪。晚亀雄の晚餐に家族と共に赴く。

八月十五日 晴。午前十時の汽車にて家族と宇土に墓参し、奥村氏に中食して、四時帰る。

八月十六日 晴。午前二時上海増田中佐より松村虎雄大治にて病死の電報至る。朝古庄頼来訪。午前村松の留守宅を京町に訪ひ弔意を致し、帰途木藤少佐、葉室侃温を訪ふ。午後小早川秀雄来訪。八代教育会より余の講演を求め来りしを告ぐ。之を辞す。東京吉田大佐、上海増田中佐、松崎奎雄に致書す。

八月十七日 晴。佐野直喜、野満四郎の信至る。午前石原醜男を武部に訪ふ、在らず。帰途井芹経平を訪ひ帰る。午後三城豊造、今井精一、井手三郎を訪ふ、皆在らず。波多博の信至る。田中清司来訪。

八月十八日 晴。朝板井鹿男、佐々干城来訪。宮崎民蔵（一行分読み取れず）。

八月十九日 晴。上海西本、佐々布の信至る。午前十時半の汽車にて内人と球磨川畔の瀬戸石に至り茶亭に投じ鮎を食し、午後六時の汽車にて八代に至り帯屋に投宿す。

八月二十日 晴。午前八代宮、松井神社一帯を徜徉して宿に帰り、十一時車を賃して麓の熊屋に至り鮎を命じて午餐し、麓の稻荷社、並に松井氏の墓所を巡覧す。代陽の勝区なり。四時八代駅に至り茶亭に休憩し、六時の汽車にて熊本に帰る。池部奎彦、浅井正夫、佐藤逸人、石原醜男等来訪せりと云ふ。

八月二十一日 晴。午前池内源七来訪。細川護立男、養田喜太郎、古城貞吉、笠五郎、新美辰馬等富士山頂よりの葉書至る。是日午後より下痢数回に及ぶ。

八月二十二日 雨。午前浅井正夫来訪。午後石原を竹部に訪ふ。

八月二十三日 雷雨。午後七時家族一同と洗馬開陽亭に至り洋饌を喫し、九時半帰る。

八月二十四日 晴。細川護立男、安達、池部奎彦、波多博に致書す。石原醜男来訪。海軍吉田大佐に致書す。有働生来訪。

八月二十五日 晴。土曜。島田常三郎来訪。

八月二十六日晴。上海増田中佐、松寄、西本の信至る。増田に復書し、別に平岡小太郎、井手友（一行分読み取れず）。

八月二十七日 晴。午前荒木善八来訪。鳥居に復書し七言古風一篇を贈る。昨年春の作に係はる。

去年逢君浪華津、今日迎君吳江浜、  
萍路西東無定在、飄零剩此自在身、  
往事茫々何須問、青眼只与故人親、  
連榻一夕話不尽、半窓春雨別恨新、  
送君坐憶曾游迹、一場清夢落萊茵。

八月二十八日 晴。午前池部奎彦来訪、留て中食す。三時去る。夜河口を訪ふ。

八月二十九日 晴。午前歩して沙取に至り佐々干城氏を訪ひ、正午帰る。清藤幸来訪せりと云ふ。夜田中を訪ふ。

八月三十日 晴。午前板井鹿男来訪。

八月三十一日 晴。今上天皇天長節。白岩、大倉の信至る。白岩に復書し、七里、宝妻に弔詞を發す。  
七里は其父恭三郎病没、宝妻は其子を亡ひしを以てなり。七里に奠儀を贈る。牧次郎來訪。

大正元年九月起

九月一日 晴。午前緒方二三を本莊に訪ふ。午後生田清範、佐藤逸人、有働信義、河口介男等前後來訪。大阪鳥居赫雄の信至る。

九月二日 晴。朝板井鹿男、河口介男來訪。小山逸平の信至る。之に復す。上海佐々布質直に致書す。  
夜井芹経平を訪ふ。

九月三日 晴。上海西本省三、有留重利の信至る。西本より八月分外務省手当の中百五十円を送り来る。波多博の信至る。河口介男、佐々布遠來訪。午後角田政治來訪。是日晌午大江を訪ふ。東京山田珠一、井手三郎、古莊頼、上田仙太郎、土屋員安等合作の信片至り余の上京を促す。西本に復書す。  
井手列に復す。夜井芹経平を訪ひ小談、去て河口介男を訪ひ、十時帰る。夜半南千反畑火有り。

九月四日 朝小雨、食頃乃ち晴る。午前長野一誠翁來訪。午後六時より内人と大江に至り結納の祝宴に列す。媒人板井鹿男を主とし、河口介男と我兩人之に陪す。九時帰る。海軍軍令部近藤副官より十月至十二月手当六百円を送り来る。

九月五日 陰。朝井芹経平來訪、之に托して佐藤潤象氏二男敏人を我家の養子に貰受けんとす。其近日上京するを以て在京中の佐藤氏に交渉を試んが為なり。井手三郎、松寄奎雄の信〔至〕る。夜松倉善家、古閑信夫前後來訪。波多博の信至る。亀雄來り鰻一籠を贈る。

九月六日 晴。海軍に手当の領収証を郵送す。佐原篤介の信至る。夜石原醜男來訪。

九月七日 晴。波多に復書す。午前河口を訪ひ、晌午帰る。

九月八日 陰。心気不佳。東京山田珠一、井手三郎、佐原篤介に致書す。午後井芹を訪ふ。本夕より上京すと云ふ。去て松倉善家を春日に訪ひ鳥松にて鰻飯の饗を受け、六時帰る。夜古閑信夫來訪。

九月九日 暴雨。午後生田清範來訪。加藤壯太郎の信至る。

九月十日 雨。増田高頼の信至る。四川に遡航すと云ふ。小山逸平、最上國藏、軍令部の信至る。

九月十一日 晴、秋冷頓に催す。午後緒方二三、阿部野利恭、上田仙太郎來訪。小山逸平の信至る。

九月十二日 晴。午前高橋謙の長男守來訪。午後家族と白川堤に沿ひ渡鹿天神附近に散歩し、帰途大江に小憩して帰る。是日午前河口を訪ひ洋服一着を注文し、帰途物産館水産組合に緒方、平山と談じ、晌午帰る。

九月十三日 晴。是日先帝の御大葬式を青山に挙行政せらる。東京佐原篤介、上海香月梅外の信至る。香月に復す。午後松倉善家、橘三郎來訪。夜十一時鎮西館の大葬遥拜式に列し十二時帰る。微雨。是夜八時先帝の靈柩宮城御發引の時刻に於て陸軍大将乃木希典氏夫妻殉死の報に接す。

九月十四日 雨。名和司令官、加藤中佐、西本、松崎、佐々布、土佐屋に致書す。中食後鎮西館に至り平山、緒方、松村等と上車、春日松倉宅に至り橘と会し、五時橘を誘て竹田屋に至り会食す。同座は平山岩彦、緒方二三、松村辰喜、小早川秀雄、勝木恒喜、松倉善家等なり。八時散ず。橘と別れて帰る。是日先帝の靈輦東京より京都桃山に遷され御歛葬式を挙げさせられたり。

九月十五日 半晴。東京山田珠一の信至る。晡時明午橋に至り理髪す。

九月十六日 微雨。北京市原源次郎の信至る。午前坪井郵便局に至り上海よりの送金百五十円を受取り、茶業組合に上田仙太郎、阿部野利恭、緒方二三等と談じ帰る。

九月十七日 雨。午前沙取臨水亭に至り上田仙、緒方、阿部野、甲斐大牛等の至るを待ち、正午船を泛て画湖に下る。三時松村辰記來会。清遊半日、日暮船を臨水亭に返し歩して帰る。井手三郎の信至る。夜半下痢二回。井手の信至る。

九月十八日 雨。五時大江に至り、八時義妹を送りて旗亭岡崎の結婚式場に至る。菅村三之に帰ぐ者な

り。式終りて十一時半帰る。列席者は岳父母、河口夫婦、古閑信夫、菅村三之の兄某、板井鹿男、大畑秀夫、園田郭六、宮永婦人、内柴兄弟、並に我家族となり。

九月十九日 雨。上田仙太郎来訪。明朝出発、露国に帰任すと云ふ。有蘭善行来訪。井手に復書す。午後井芹、阿部野、緒方、山田列を訪ひ、鎮西館に小談帰る。

九月二十日 朝微雨。前六時上車、上熊本駅に至り上田仙太郎の露国行を送り、帰途田中清司に抵り立談片刻にして帰る。山田珠一、勝木恒喜前後來訪。午後石原醜男を訪ふ、在らず。勝木を敲き小談、帰る。

九月二十一日 雨。東京安達謙蔵、上海井手友喜の信至る。午後四時井芹を訪ひ小談。去て石原醜男を訪ひ其の帰るを待て共に佐藤翁を訪ひ、日暮帰る。

九月二十二日 雨。午前古閑信夫来訪。午後五時より大江に至り菅村三之の初入に列席、八時半帰る。

九月二十三日 晴。波多重雄、岡幸七郎、海軍の信至る。午前鎮西館に至り、帰途河口を訪ひ帽子其他二品を購ひ帰る。田中清司、奥村養子来訪。佐々布遠、河野某、吉見春生、角田政治来訪。岡幸七郎に其女兒の死を弔す。夜家族と藤崎神社に参詣し、去て菅村三之を訪はんとす。其の来訪に逢ふて中止す。

九月二十四日 快晴、秋意漸く動く。午前立石登、佐々干城前後來訪。波多重雄の信至る。之に復す。夜家族と共に菅村三之を訪ひ、藤崎神社に参拝して帰る。

九月二十五日 晴。中食後藤崎神社に参拝し能を観、社務所にて神酒を受け帰る。辛島格来訪。夜藤崎に参拝す。

九月二十六日 晴。午前田中清司来訪。午後藤本渡翁、佐々干城、藤森茂一郎、生田清範来訪。藤森を留め晩食す。今井精一、陸軍大尉清水巖来訪。夜内人と木戸組町に古閑家を訪ひ、帰途河口宅に至り十時帰る。此夜八月既望月明気清。

九月二十七日 晴。岡幸七郎、佐々布質直、西本省三の信至る。岡よりは其亡女を傷むの詩二首を送り来る。午前古庄韜、緒方二三、阿部野、井場熊喜来訪。晌午古、緒、阿三子と出で鴨川に至り中食し、鎮西館に小談帰る。平山岩彦、中路新吾、松倉善家等来訪。

九月二十八日 半晴。門司、長崎両地郵船会社支店に致書、上海行郵船の事を照会す。西本、佐々布、土佐屋に信片を發す。午前肥後銀行支店に至り百円を受取り、去て河口、鎮西館を訪ひ帰る。午時河口来訪。午後春日に松倉善家を訪ふ。生田清範の信片至る。之に復す。徳丸、葉室兩人に松倉と連名にて信片を發す。

九月二十九日 雨。午前岳翁来顧、鶉十羽を恵まる。

九月三十日 半晴。午後上車、阿部野、緒方、鎮西館、山田珠一、板井、小早川、河口、佐々布、田中、上妻、菅村、石原、井芹、井場、古莊、大江、正木、其他一二家を歴訪して別を叙す。夜菅村夫婦、河口母子来訪。長崎郵船会社より電報並に松倉の信片至る。上海加藤中佐、秋元少佐に信片を發す。

十月一日 雨。明日啓行清国に向はんとす。行李を收拾す。午前佐々干城、河口介男、田鶴信子来訪。午後佐々布遠来訪。吉田大佐、佐原篤介に致書す。坂田長平夫人死去の訃に接し弔詞を發す。長浜浅見又蔵より慶雲館紀念帖並に目錄を送り来る。之に復書す。清水巖に致書す。原田隆升来訪。夜田中清司、池部雀彦、石原醜男、金津、上妻、古閑来訪。

十月二日 暴風雨。朝三城豊造、井芹経平、田中清司、有蘭、井手三郎、正木某来訪。井手は今朝帰来せりと云ふ。晌午に及て風雨始て歎み日光を見ることを得たり。岳翁、河口と中食を共にし、十一時五十分岳翁並に家族に別れ家門を出で上熊本駅に至る。佐々布遠、三浦喜傳、井手三郎、松倉善、緒方二三、阿部野、小早川、古庄、板井、今井、石原、生田、清水、池部、上妻、吉見、荒木、河口、田中、菅村、有蘭等来り送る。零時二十八分発車、諸氏と握別す。二時四十一分鳥栖にて長崎線に乗

換、八時長崎着、土佐屋に投ず。熊本宅に発信す。

十月三日 晴雨無定。一昨夜朝鮮、満洲、北京を経て歐洲行の途に就きし狩野直喜、上田仙太郎に北京宛に一書を發す。午後二時土佐屋を辞し上車、税関埠頭に至り小蒸氣船にて上海行の近江丸に至り搭乘す。四時開船。松岡健一同室たり。本船は英國にて製造せし者、今回を以て初航とす。五島附近に至れば船体頗動揺。晩食後就寝。

十月四日 穩晴。海上不波。夜に入て碧落如洗、星斗爛干甲板上に盤桓し快甚し。

十月五日 快晴。午前八時上海着。車を駆て寓に歸る。十時有吉、金万、村上、古谷、本庄、島田数等を訪ひ、去て豊陽館に橘三郎、秋元少佐を訪ひ、秋元の処に中食して歸る。松寄、西本、有留、佐々布等來訪。海軍に書信を發す。岑春煊の福建行顛末の意見を致すなり。熊本の内人並に清子に致書す。本庄少佐來訪。夜佐々布來訪、十一時半去る。

十月六日 陰。日曜日。午前佐々布來訪。橘三郎來談。十時村上夫人を訪ひ小談、歸る。晌午河野久太郎宅を訪ひ、転じて島田数雄、宮崎寅、尾崎行昌、遠藤等を歴訪して歸る。午後秋元と軍艦淀に菅野艦長を訪ひ、共に旗艦新高に名和司令官、谷口參謀、榊原艦長を訪ふ。千代田艦長、山岡豊一、其他二三子と晩餐の饗を受け寛談、九時半歸る。井野春毅、木村恒夫、立石登、高山正之、塚本、有働政喜等來訪せりと云ふ。

十月七日 晴天。朝河野久太郎、宮崎寅、尾崎行昌來訪。松寄、迎英輔、甲斐靖等來訪。午後一時青木少将の北京に歸るを車站に送る。加藤中佐に致書す。夜松寄を訪ひ小談。佐々布來訪。

十月八日 積陰。晌午甲斐靖の招請に杏花楼に赴く。同座は宮崎、尾崎、山田純、中野熊、末永節等なり。歸途香月梅外を台華公司に訪ひ、転じて井野春毅、村上貞吉、上海日報、篠崎等を訪ひ歸る。夜神崎正助來訪。昨日北京より歸來せりと云ふ。香月梅外亦來訪。

十月九日 快晴。午前十時電車徐家匯通に至り孫逸仙を訪ひ暢談、正午に及て歸る。午後有吉、上海日報、橘三郎を訪ひ歸る。篠崎、水野梅曉、高田九一等來訪。井手友、佐原、辻武雄の信並に狩野直喜、上田仙太郎、井手三郎、門司より合作の信片至る。狩野、上田は歐洲行の途次なり。晚宮崎寅藏の病氣快復祝に招かれ其寓に赴く。同座は村井啓太郎、秋元少佐、中野熊五、甲斐靖、末永節、西田耕一、山田純、尾崎行昌、並に主治医兩人なり。甲魚の鍋焼を飽食し、十時歸る。河野等來訪せりと云ふ。

十月十日 晴天。河野久太郎の午餐に赴く。橘、香月、町田、迎同座たり。中野熊、甲斐靖來會。四時歸る。是日武昌革命一週年に當る。民國政府は是日を以て國慶紀念日と為せり。市中若干の商家に国旗を掲て夜に入て滬防軍、並に救火會員の提灯行列有り。井上男也來訪。

十月十一日 晴。遠藤麟太郎來訪。寺中猪介の信片至る。午後隈元武治、勝見雄助來訪。甲斐靖來訪。晚甲斐の招邀に杏花楼に赴く。同座は隈元、秦、青木、中野等なり。

十月十二日 晴天。海軍に報告を發す。外に熊本宅、大江、河口、田中、菅村、古閑、佐々布、古庄に着報を發す。郵便局に投函後上海日報に小談、乍浦路にて理髮し、秋元を豊陽館に、水野、木村を西本願寺に訪ひ歸る。名和司令官に朝鮮餉一箱を贈る。晌午漢口領事松村の帰国を送る。隈元亦た同船にて歸る。迎英輔來訪。晚三菱中島の招待に六三亭に赴く。孫逸仙、黃興を主賓とし、邦人七八人同座たり。十時散ず。孫文十七日發南昌に赴くと云ふ。

十月十三日 晴天。日躍。井芹、石原、緒方、阿部野、板井、今井、小早川、生田、池部奎彦、三浦喜傳、松倉、吉見、井手、荒木、上妻に致すの書信、並に信片を發す。宮崎、末永、尾崎來訪。十時軍艦新高に至り名和司令官の午餐に列す。寛談三時に至り司令官、艦長、參謀と出て東本願寺尚武會の主催に係はる乃木大将の追悼會に列す。式終て香月と共に河野宅に至り晩食し、八時半歸る。

十月十四日 晴天。午前宮崎等を訪ひ、中食後歸る。午後郵便局に至り留守宅に金百円を為替し、別に焼栗一缶を小包にて送る。歸途有吉を訪ひ小談、歸る。夜佐々布來談。三田村源次の信片至る。



十月十五日 雨。海軍に訳稿を送り、外に金津、三城、清水、波多、内人に信片を送る。太田三次来訪。

十月十六日 晴。海軍に致書す。水野梅暁来訪。午後宮崎等を訪ひ、去て上海日報、秋元、橘、水野、木村、中村、甲斐等を歴訪し名刺を留て帰る。

十月十七日 晴。終日晒衣。午後西本、鈴木直治来訪。漢口宛にて山座円次郎に致書。黄興と長沙に会見の事に付き注意する所有り。夜銭舗〔に〕至り金三十円を兌換す。

十月十八日 晴。午前晒衣の後室内の掃除を為す。午後秋元少佐、甲斐靖来訪。報告を作り夜郵便局に至り投函し、宮崎寅の帰国を送り帰る。副島、加来、香月前後來訪。

十月十九日 快晴。尾崎来訪。午前有吉領事、上海日報を訪ふ。午後姚文藻を訪ひ暢談移時而帰。松倉、田中清司の信至る。熊本沙取人吉田武平、佐々干城氏の添書を携へ来訪。夜井手照人、岡吉次郎、高島醇、有働数喜等来訪。十一時去る。新高艦長榊原大佐の帖冊に題す。

十月二十日 晴天。日曜。午前安河内来訪。午後名和司令官来訪。寛談の後司令官を誘ひ電車雅叙園に至り晩食し、八時歩して帰る。姚文藻来訪。

十月二十一日 快晴。孫逸仙日本行の事に付き清浦奎吾、鳥居赫雄、根津一に致書す。午後本庄を訪ふ。中野二郎に逢ふ。昔年の同志なり。上海日報に小談、帰る。橘三郎、並に画家杉原鼓澤、山口武洪の紹介にて来訪。澤村良臣、牛島吉郎の信片宮口より至る。姚文藻の請帖至る。藤森茂一郎に致書。

十月二十二日 晴。午前秋元少佐を訪ふ。外出中姚文藻来訪せりと云ふ。午後姚を訪ひ寛話。夜姚の招邀に「パレスホテル」に赴く。同座は鄭孝胥、沈耕華、西本の三人なり。八時半散ず。

十月二十三日 陰。東京井戸川辰三、高洲太助に致書す。海軍に外債表を送る。午後豊陽館に至り中野二郎、松岡等を訪ふ。内人の信、並に清水巖、隈元武次、海軍の信至る。午後雨。

十月二十四日 雨。午前河野久太郎来訪。午後松岡健一、岡田徳好、村上貞吉、西本省三前來訪。熊本宅の信至る。夜佐々布を訪ひ共に出て副島綱雄に抵り小談、帰る。

十月二十五日 晴。午前山ノ井格太、橘三郎来訪。内人に復書す。午後出て理髪す。晩江崎、木幡、黒川等の招宴に六三亭に赴く。中野二郎同座たり。十一時散ず。

十月二十六日 晴。午前香月梅外、河野久太郎を訪ふ。河野より塩鮭一本を贈り来る。緒方二三、岡幸七郎の信至る。狩野直喜、上田仙太郎、西伯里鉄道よりの信片至る。

十月二十七日 晴。日曜。秦長三郎来訪。岡幸七郎の信至る。之に復す。名和第三艦隊司令官より明日晩餐の案内至る。之に復す。夜豊陽館に秋元、松岡等を訪ひ、上海日報を敲き帰る。

十月二十八日 雨天。深水十八に東京に致書し緒方に詩を転寄す。熊本緒方に致書す。午後森少将儀太郎を南陽丸に迎ふ。豊陽館にて小談、去て橘の処に小坐、帰る。五時名和司令官の招宴に軍艦新高に赴く。森少将を主賓とし領事、各会社支店長等同座たり。十時散ず。河口市之助来訪せりと云ふ。本日満洲より来着せる者なり。

十月二十九日 陰天。午前名和司令官の帰国を送り、橘の処に小談帰る。川口市之助、西本省三、森海軍少将、秋元少佐前來訪。夜香月梅外、川口市之助来談、深更に及で去る。領事館より本月分経費を受取る。

十月三十日 雨。夜森少将歓迎会に六三亭に出席す。九時帰る。吉見春生の信至る。

十月三十一日 晴。朝車站に至り増田を迎ふ、来らず。滬上評論社福地善二来訪。其著支那語学本の序文を求む。午後森少将を訪ひ、三時増田高頼を岳陽丸に迎ふ。四川より帰来せる者なり。六時増田の招宴に六三亭に赴く。森少将、榊原大佐、谷口参謀、宮坂九郎、江寄真澄、武部中佐、秋元少佐等同座たり。十時散ず。雨。

十一月一日 晴天。尾崎行昌来訪。福地善三の求に応じ上海語学書の叙文を作り之に与ふ。佐藤逸人、堀内干城、菅村三之、波多博、藤森茂一郎の信至る。熊本宅に致書、金百円を郵送す。上海日報、篠崎を訪ひ、四時帰る。熊本人野田某来訪。夜高島、加来来談。

十一月二日 快晴。午前増田、中野二郎等を訪ふ。深澤暹に逢ふ。本日来着、杭州領事代理として赴任する者なり。深澤を主賓とし河野、香月、橘、秦等と新六三に会食す。七時半車站に至り山座円次郎を迎ふ。清浦奎吾氏の信、並に海軍、波多の信至る。篠崎来訪。

十一月三日 晴天。午前河野、橘と同車、領事館官舎に山座円次郎を訪ひ小談。去て孫逸仙を訪ひ帰る。午後一時東西本願寺、本國寺三寺の主催に係る明治天皇の聖忌法要、並に乃木大将夫妻の追悼会に列し、終て六三園の滬上神社上棟式に列す。長崎の諏訪明神、浦東金比羅大明神を合祀せる者なり。四時帰る。甲斐靖、山田純三郎、有留重利等来訪。三菱より往日写す所の孫文、黃興列同座の写真を送り来る。四十余年来十一月三日先帝の天長節を奉祝し此の佳辰は深く国民の脳裡に刻まれつつ有りしに、今夏先帝崩御の大厄に遭ひ今年今日より起りて長く佳辰としては是日を奉祝する能はず。寥廓たる秋空猶去年の如く、東籬の黄花猶去年の如くにして、独り佳節の去年と同じからざる有り。感慨何ぞ窮まらん。

十一月四日 晴。島田数来訪。海軍に発信す。菅村三之より鮎醬一瓶を送り来る。菅村に礼状を發す。夜香月の処に至り会食す。太田来談。

十一月五日 陰。午前森少将、増田を訪ふ。午後一時宮坂九郎を車站に送る。重慶に赴く者なり。吉田大佐、高洲太助、内藤熊喜の信至る。上妻博路に信片を發す。清水洵平、平岡小太郎の紹介にて来訪。六時倶楽部の山座参事官、森少将の歓迎会に出席。散後八時半より森少将の招宴に六三亭に赴き、十一時帰る。雨。

十一月六日 雨。朝森海軍少将の北京に帰るを送り、井手三郎の来滬を迎ふ。橘、増田の処に談じ、井手に抵り小坐、帰る。夜松崎、尾崎来訪。

十一月七日 雨。朝井手三郎来訪。午後理髮。豊陽館に至り増田、中野と談ず。夜車站に至り議員視察団を迎ふ。昨来天漸寒。

十一月八日 雨。北京辻武雄の信至る。海軍に致書す。午後池部政次を常磐舎に訪ふ。杭州より漢口に転任する者なり。増田中佐来訪。三時電車雨を侵して宝昌路に孫逸仙を訪ひ小談、帰る。増田、中野二郎と小談、帰る。

十一月九日 雨。福地善三来訪。其著滬語新篇の叙文を請ふ。書して之に与ふ。午後大雪。菊月下雪三十年来の罕見の事たり。同文書院生小口五郎来る。来週土曜日に講演を乞ふ、之を諾す。六時尾崎を訪ひ、去て領事館の議員招待会に列す。衆議院議員守屋此助、三土忠造以下十余人と支那人側にては孫逸仙、張謇、熊希齡、陳其美、虞洽卿、李雲書、周廷弼、朱某以下内外合して五十人許。十時半散ず。池部政次を古谷の室に訪ひ小談、帰る。池部は今夜の南陽丸にて漢口に赴任する者なり。

十一月十日 快晴。日曜日。午後佐々布来訪。二時同文書院の武道大会に赴き晚餐の饗を受け、帰途佐々布と蕎麦を喫し、八時帰る。内人の信、並に佐原の信至る。

十一月十一日 快晴。午前伊東知也、水野梅暁来訪。孫逸仙より本タパレスホテルに招宴、国民、共和、民主三党の代表者、並に新聞記者等内外合はせて百四五十人。宴散じ一同撮影す。

十一月十二日 晴。晌午山座円次郎、議員一行を新横浜丸に送り、増田の処に中食し、三時帰る。隈元の信至る。夜野田、岡吉次郎来訪。夜更雨。

十一月十三日 晴。内人、隈元、海軍に致書す。夜佐々布、松壽来談。内人の信片至る。

十一月十四日 晴。午前熊本商業学校教諭谷口寅次、並に卒業生吉田某来訪。西本来談。内人の信、並に鳥居赫雄の信至る。東京高洲太助より高杉晋作の真跡扇面一枚を贈り来る。

十一月十五日 晴。高洲太助に礼状を發す。午後一時迎英輔の漢口行を車站に送る。

十一月十六日 晴。午前渡辺某来訪。午後一時同文書院の講演会に出席、支那の政況に付き一時間以上講話を為し、六時帰る。児玉英蔵来り薩摩焼茶器を贈る。夜波多博、川口市之助、今井邦三来訪。波多は本日日本より帰来せる者なり。杭州深澤の信片至る。

- 十一月十七日 半晴。日曜日。午前土井伊八、波多博来訪。午後村山正隆より柿一簍を贈り来る。有留重利、平岡小太郎来訪。晩熊本商業学校職員生徒招待会に倶楽部に出席し、九時帰る。
- 十一月十八日 陰。鳥居、同文会に信片を發す。海軍に私信を發す。熊本宅に信片を發す。午後佐々布、井手、谷口參謀、上海日報を訪ひ、理髮後児玉英藏、今井、河口、村山正隆を歴訪して帰る。
- 十一月十九日 半晴。午前児玉英藏、波多博来訪。午後木下温知、吉田武平来訪。厦門加藤壮太郎の信至る。夜井手を訪ひ、去て本莊繁、村山正隆を東和に訪ひ、十時帰る。
- 十一月二十日 晴。加藤中佐の信片、並に内人、学友会の信至る。午後増田を訪ふ、在らず。橘と小談、井手を訪ひ、五時帰る。
- 十一月二十一日 快晴。井手、本庄来訪。午前井手と電車宝昌路に至り孫逸仙を訪ふ、在らず。帰途姚文藻を新馬路に訪ひ小談。正午井手と雅叙園に中食し、去て香月梅外、秦長三郎、河野久太郎、有吉総領[事]、本庄少佐、増田、谷口両中佐等を歴訪し、五時帰る。
- 十一月二十二日 晴。内人、並に河口介男に致書す。午後上海日報に井手を訪ひ小談、帰る。
- 十一月二十三日 快晴。土曜日。是夜五時半の汽車にて香月、平岡、木村、高島、外二人と蘇州に出獵せんとし獵装を整ふ。北京亀井陸良、実相寺貞彦、鄭永邦、鷺澤與四次、中畑栄、森茂等合作の信片至る。五時半乗車、七時蘇州着、車站前に於て船に乗り石湖に向ふ。是夜陰曆十月の望月明鏡の如く霜花雪に似たり。十一時半上方山下の根拠地に達し碇泊す。山影湖光隱約夢の如く清趣欲絶。夜竟に眠らず。
- 十一月二十四日 快晴。前五時起床、六時朝食、結束して獵区に向ふ。午後上方山下に獵し、五時帰船、六時錨地を發し蘇州に帰る。寒月如霜、夜色不可名状。八時就寝。是日僅に鳩一羽を獲たるのみ。
- 十一月二十五日 晴。午前四時結束、船を出で五時半の汽車に上り、七時上海に達す。午後嵯峨艦長菅沼周次郎来訪。杭州深澤暹に信片を發す。夜佐々布来訪。
- 十一月二十六日 陰。昨夜更井野春毅俄然病死の報に接し、直に出て其寓に至り諸事為に周旋す。正午帰る。甲斐靖、本庄少佐来訪。香月、甲斐より晚餐の案内有り、之を辞す。今夜実業協会にて講演の約有りしも井野病死の為に之を辞す。加藤壮太郎来訪せりと云ふ。
- 十一月二十七日 晴。平井德藏の信片至る。午前加藤中佐を豊陽館に訪ふ。昨日厦門より帰来せる者なり。正午井野宅に至る。三時西本願寺にて式を行ひ井野の柩を送て火葬場に至り、四時井野宅に帰り、食後井手と豊陽館に加藤、谷口、増田と談じ帰る。郵船会社石井徹より二十九日山城丸にて晚餐の案内至る。
- 十一月二十八日 快晴。午前加藤壮太郎、小山逸平、太田武彦来訪。小山は本日来着、新嘉坡に赴く者なり。柿一簍を贈る。姚文藻、憚毓昌を伴ひ来訪、談話時を移て去る。午後佐々布を訪ひ、去て理髮、小山逸平を松寄洋行に訪ひ、上海日報、豊陽館に至り深水十八を訪ひ小談。上妻博路亦本日来着、営口より来りし者なり。立談片刻にして帰る。深水来訪。松村貞雄の信至る。姚文藻より案内状至る。夜井野春隆来訪。
- 十一月二十九日 快晴。午後小山逸平、日田次郎来訪。五時豊陽館に至り増田中佐、秋津洲艦長、鈴木海軍々医総監等と郵船会社の招宴に山城丸に臨む。此船は会社の新造にして今回初て入港せる者なり。九時散ず。民国陸軍大將王芝祥より明夕晚餐の案内状至る。
- 十一月三十日 雨意。午前領事館より経費を受取る。上海日報に至り正午帰る。午後四時井手と姚文藻の招宴に赴く。同座は憚毓昌、胡二梅、巢某なり。七時姚氏を辞し王芝祥の招宴に静安寺路一一一の寓所に赴く。同座は有吉、榊原、谷口、増田、児玉、石井、河野、金万、村上、張継、本庄以下七八人なり。九時散ず。河野と車を同ふして帰る。河口介男、深澤暹の信至る。深澤より銃獵全書一冊を送り来る。島田儀一來訪、近日青島に転任すと云ふ。
- 十二月一日 半晴。上妻博路来訪。石橋藤次郎の信至る。藤森茂一郎、並に内人に致書す。午後豊陽館

に増田、加藤と談じ、六時帰る。松寄の処に晩食す。

十二月二日 陰。榊原、西尾、谷口、増田、本庄、秋元、井手、河野に明日の案内状を發す。午後村上の寓に井手並に井野の遺族と会し井野家善後の方法を商量し、去て孫逸仙を五馬路に訪ひ小談。帰途香月を敲き帰る。晩井手代議士当選の祝賀会に倶楽部に出席、八時帰る。西田畊一來訪。是朝八時加藤中佐の帰国を車站に送る。吳淞を本日午後拔錨帰朝する者なり。船津辰一郎、熊本商業学校橋本基一の信至る。深澤に復書す。

十二月三日 快晴。波多来談。午後井野未亡人来訪。日田次郎の信至る。五時半四馬路杏花楼に至り榊原、西尾、谷口三大佐、増田中佐、本庄、秋元両少佐、井手、河野を招宴し、九時帰る。西園寺内閣朝鮮二ヶ師団増設問題の為に総辭職を為せりと云ふ。

十二月四日 快晴。朝宮寄民藏来訪。正午新六三に井手、橋、香月、河野、深水と会食し、帰途増田、秋田を訪ひ帰る。田中清司、藤森茂一郎の信至る。

十二月五日 快晴。晌午中食。井手、篠寄同道軍艦秋津洲に至り訪問し、副長、並に士官と小談。秋津洲の小蒸気にて旗艦新高に至り榊原、谷口同大佐と暢談、四時帰る。五時井手と六三園の無芸会に出席す。同座は児玉正金、石井郵船、黒川同上、幡生三井、西田、神津、山田、村井哲次郎等なり。九時散ず。帰途井手と平野勇造を訪ふ、在らず。

十二月六日 晴。有吉領事より今夕晚餐の案内至る。午前基督教牧師三宅正彦来訪、一夕の講話を求む。長江清介、波多博来訪。午後井手に抵り熊本宅送りの冬筍一包を托し、理髮後増田、谷口と豊陽館に談じ、四時帰る。五時半井手来訪。共に出て有吉領事の招宴に其官舎に赴き、九時半帰る。留守に信片を發す。土井伊八、塩鴨一隻を送り来る。

十二月七日 晴。午前九時半井手三郎の帰国を送り、十時名和司令官を迎へ、帰途橋と小談帰る。正午惲祖祁並に其子惲毓昌、姚文藻来訪。惲は常州陽湖の人、歳七十一、心耘又萊叟と号す。有志の士なり。松寄、波多、深水前後來訪。有蘭善行の信至る。士官候補生として岡山の兵營に入れる者なり。海軍より一月至三月手当六百円（内二百熊本送り）を送り来る。晩滬友会の晩餐に出席、八時帰る。海軍に金子領収証を發し有蘭に信片を郵致す。

十二月八日 陰寒。午後一時深水十八の漢口行を車站に送る。午後新高艦長榊原大佐告別の為来訪。名和中将より長門柴金石の硯一個を贈り来る。六時名和司令官の招宴に六三亭に赴く。会者主客四十三人。十時帰る。

十二月九日 陰寒。午前同人と日清の小汽船にて軍艦対馬、秋津洲、新高を歴訪し、正午帰る。新高は明日出港帰朝する者なり。午後小笠原、西本、波多来訪。晩香月の晩餐に赴く。橋、平岡同座たり。九時帰る。

十二月十日 陰。海軍に報告を發す。晌午堀田艦長、並に和田大尉の帰国を送る。東洋協会に報告を送る。午後対馬艦長平賀徳太郎、秋津洲艦長西尾雄次郎、海軍參謀谷口尚眞、海軍中佐増田高頼、同大尉津田静枝来訪。本莊海軍少佐、齊藤少佐恒来訪。齊藤は本庄の代りとして北京より来着せる者なり。今井邦三の信至る。

十二月十一日 陰。報告を作り稿を終る。夜栗生洋行の招宴に二馬路華慶園に赴く。日支両国の來賓百五十人、極て盛会なり。九時帰る。松寄、波多と談じ、十一時帰宅。角谷八平次の信片至る。

十二月十二日 陰。報告を作る。午後河野を訪ひ、石橋藤次郎、川口市之助等と談ず。石橋は昨日来着せる者なり。帰途台灣銀行より海軍よりの送金四百円を受取て帰る。松崎、波多、西本等と小談。夜報告を清書す。

十二月十三日 陰。報告を写して之を終はる。晩河野の招宴に新六三に赴く。本庄、齊藤両少佐、橋、川本等なり。九時帰る。

十二月十四日 雨。午前豊陽館に赴き本日帰国山岡、谷口両佐と談ず。正午名和司令官の催に係はる鋤



焼会に列す。同座は山岡、平賀、西尾、谷口四大佐、有吉、増田、秋澤、秋元、堀の十余人なり。一時谷口、山岡を春日丸に送る。谷口に托し政況報告を軍令部に送る。晩松寄、波多、佐々布を招き会食す。内人、並に田中清司の信至る。田中は玫瑰女学校長に就任せりと云ふ。

十二月十五日 陰。日曜日。午前上妻博路来訪。午後最上艦長、秋澤中佐芳馬来訪。出て理髪す。五時半名和司令官の招宴に杏花楼に赴く。同座は対馬、秋津洲、最上、嵯峨各艦長、並に増田、堀、秋元等十八人なり。八時散ず。北京、辻武雄の信至る。

十二月十六日 晴。千田一十郎、山田珠一、内藤儀十郎、佐々布に致書す。熊本宅、並に田中清司に復書す。南京船津辰一郎に復書す。午後井野未亡人来訪、明日より帰国すと云ふ。豊陽館に秋澤最上艦長、秋元少佐を訪ひ別を告ぐ。秋澤は福州に、秋元は内地旅行の途に上るを以てなり。帰途宮崎民を一訪し帰る。夜石橋、川口来談。

十二月十七日 雨。午後四時山城丸に西尾大佐、井野未亡人の帰国を送り、橋の処に小談、帰る。山田珠一、河野通器の信至る。山田より、我家養子の件に付き曾て交渉中の佐藤家より其長男不具に付き次男は佐藤の継承者として欠ぐ可からざる者なる理由にて断り来れる旨を詳報せり。

十二月十八日 雨。早朝井手友喜を迎ふ。船延着するを以て帰る。午後甲斐靖、中久喜信周来訪。中久喜の為に孫文に紹介状を与ふ。午後井手友を訪ふ。井手三郎の信、並に留守宅に送品を受取り帰る。海軍より臨時手当第二回分二百円を送り来る。吉田大佐の私信、並に伊集院俊、角谷平次の信至る。

十二月十九日 快晴。午前中久喜、波多来訪。海軍近藤副官に臨時費領収証を發す。吉田大佐に復書す。午後中久喜を車站に送る。井手友喜来訪。大倉に河野を訪ひ之に托し台湾銀行より海軍の送金三百円を受取り小談、帰る。鳥居赫雄の信片至る。中華民國史、並に明治昭代史編纂主幹藤島宇太、有吉の紹介にて来訪。

十二月二十日 微雨。七時佐原篤介を車站に迎ふ、来らず。午前正金に至り銀六百元を預け、十時半一同と軍艦津軽を訪問す。機関候補生を載せ遠洋航海の帰途寄港せる者なり。同文書院上野貞正、時報館主秋平に致書す。船津辰一郎の信片、並に北京より亀井、実相寺、佐原、神田等合作の信片至る。夜松寄、西本来訪。

十二月二十一日 雨。午前佐原を訪ふ。本日帰来せる者なり。午後領事館より本月分経費を受取る。同文書院和田連次郎来訪。本年四月至十二月利息四百五元を交付す。吉田大佐、岡幸七、牛島吉郎、菅村信の信至る。報告を作る。

十二月二十二日 雨。波多来訪。豊陽館より柿一簍を贈り来る。午前海軍に報告並に私信を發し、増田を訪ふ、在らず。正午佐原の処に中食して帰る。秦長三郎其夫人を伴ひ来訪。昨日帰来せる者なり。土宜一点を贈る。山田珠一、森崎武真彦に致書す。森崎には岡本への寄附の事を通知せり。

十二月二十三日 陰。午前秦長三郎に答礼し、河野を訪ひ共に出て、機関候補生歓迎会に華慶園に出席、三時帰る。熊本人機関大尉藤田六郎に晤す。留守中堀参謀来訪、明夕旗艦にて晩餐の案内を為す。藤島宇太に致書す。波多、香月来訪。

十二月二十四日 快晴。午前波多、島田数、佐々布来訪。午後藤島宇太来訪。四時上海日報社に至り金子を預け、五時小汽船にて軍艦対馬司令官の招宴に赴く。同座は本庄、齋藤両少佐、増田、桂、菅沼、平賀、外数人なり。四竈、堀両参謀も列席せり。十時帰る。寒月如霜。千田一十郎、加藤壮太郎の信至る。明早より杭州に出発せんとす。行装を理す。

十二月二十五日 快晴。午前六時起床、結束して出で、七時香月の寓に至り朝食し、南門外車站に至り、八時半の杭州行汽車に乗ず。同行は香月、山成、藤田、清水、加藤、藤川等九人なり。午後二時半艮山門着。香月は荷物を送て拱宸橋に至り余の七人は車を下り城外より拱宸橋方面に向て獵す。途中誤て水に落ち全身尽く没し落湯の鶏の如し。日暮拱宸橋の大東公司に至り、武林洋行の今井賢一郎に束して衣服一切を借り、七時船に上り壩上に至りて香月に会し晩食す。夜船を轎司鎮に進む。

十二月二十六日 陰。午前七時より上陸、一行七人方面を分て出動す。正午船に帰り中食。午後轎司の附近を獵し山鳴一、鶉一を得、四時船に帰る。昨來獲る所雉子一、鶉二、鳴一のみ。夜半船を開て拱宸橋に向ふ。轎司は地方の小鎮にして半山の陽に在り。雨。

十二月二十七日 雪。黎明壩上に達し、八時半拱宸橋の大東公司に入り前日借る所の衣類を今井に返却し、晌午より香月、藤田と日本租界の空地を獵り獲る所無し。十二時半の汽車にて拱宸橋を發す。嘉興に至れば日正に晡ならんとし、風雪満天鴛鴦湖上の煙雨樓模糊の中に隱見し、宛然画中の景なり。午後五時半上海着の筈なりしも七時半に延着し、車站にて諸子と分れ車を賃し十六舗にて車を換へ、八時家に帰る。飛雪撩乱衣帽皆白、佐原篤介、波多博在り。十時に至て晩食を終る。熊本内人の信、並に和田連次郎、鳥居、井手、八田三郎、西村天囚、山田珠一等合作の信片至る。八田三郎歐洲行の途次一昨日來着せりと云ふ。松岡玄雄より厦門の水仙を送り来る。

十二月二十八日 積雪道を埋め乾坤一白寒氣頗嚴。是日時報館より五月至十二月四百円の中二百円を送り来る。午後佐原を訪ひ小談、去て理髮し、四時帰る。夜神崎正助來訪。吉見春生、井野未亡人の信至る。

十二月二十九日 晴。正午佐原、波多、尾崎を招き会食す。午後安河内、菅沼嵯峨艦長來訪。篠崎医院謝儀を贈る。夜佐原の招宴に其寓に赴く。名和司令官、平賀対馬艦長、菅沼、増田、四竈、堀、三村鳥羽艦長、遠藤等同座たり。九時散ず。

十二月三十日 陰寒。伊集院俊、加藤壯太郎に復書す。小平元に致書す。午後上海日報社より正金銀行に至り四百円を預金し、去て郵便局に至り三百五十円を預入れ、豊陽館に増田、橋を訪ひ小談、帰る。夜佐々布來訪、銃の分解掃除を為す。

十二月三十一日 晴天。大掃除を為す。波多、西本來訪。松崎に本月より十五円を増贈す。夜支那新聞を読んで十二時に至る。明治四十五年の一半を承継せる大正元年云々、暮る矣、感何ぞ窮らん。兀坐殘燈に對し旧年を餞し新歳を迎へ寢に就く。

### 3. 大正2年1月から12月までの日記

大正2(1913)年の日記は、前年9月1日から当年5月9日までの一綴じの後半部分と、当年5月10日から12月31日までの一綴じとからなっている。

この年も上海で新年を迎え、前年7月に明治天皇が亡くなって祝賀行事はなかったものの、届いた年賀状への返事を書くなどして、一定の正月気分を味わっている様子がわかる。1月17日と2月1日に姚文藻、惲祖祁、鄭孝胥らと会って、宣統帝復位運動の様子を聞き、(その後も姚とはしばしば会っている)、1月29日には孫文に会って彼の属する国民党が国会議員選挙で多数を占めたことについて、今後の取り組みの展望を聞き、それぞれ海軍への報告(前者については第390号、393号、後者については第392号)にまとめている。また、2月には時報館訴訟事件が起こり、実質的な経営者である狄楚青と何度も会い、日本領事館を訪ねて対策を講じようとしている様子が日記に記されている。

さて、上記時報館の事件が起こった頃に当たる2月11日に、孫文が「籌弁全国鐵路全權」の名義で日本に向けて上海から船で出発した際見送りした宗方は、その後孫文一行が主に東京に滞在して各界の代表に会ってから、3月に九州各地を訪ねた際には、同月13日に帰国して熊本におり、そこから大牟田に出向いて一行を迎え、翌日まで付き合って熊本駅で見送っている。宗方は4月15日まで熊本に滞在した後、同日門司から朝鮮に向けて船に乗っているから、この時の帰国は朝鮮經由東北(「満洲」)、北京等を回る長旅の準備のためと考えられるが、孫文を九州で迎えることをも念頭に置いた日程の組み方であったに違いない。

海軍から「北清旅行旅費」600円が支給されての4月15日からの旅は、釜山から始まり、そこにあ

る加藤清正を祭る加藤神社や日本人経営の釜山日報社と朝鮮時報社を訪ねた後同日中に汽車で京城（ソウル）に着き、3日間滞在して李朝の宮殿を巡ったり、東洋拓殖会社を訪ねたり、漢口樂善堂以来の同志である高橋謙に会ったりした。そして、19日には京城を汽車で出発、平城を經由して安東に着き、2泊する間に吉田茂領事（戦後首相になった）などの歓待を受け、21日に本溪湖經由奉天着、以後大連、旅順と回り、その間に仕入れた各地の在留邦人の数や各地で発行される新聞の発行数、南の国民党の兵力に対抗する北の兵力について等の情報を日記に記している。

5月3日に天津經由で北京に入ると28日まで滞在して、その間順天時報社に泊まりながら国会の運営ぶりを観察するためであろう2度会議を傍聴しており、また、北京在住の多くの日本人（宮崎民蔵を含む）に会い、中国人としては、かつて会ったことのある李盛鐸に会い、梁啓超にも会おうとしたが擦れ違いで会わずじまいに終わった。さらに、北京で会った中国人として他に陳宝琛がいた。日記には「革命以来節を守って動かず……宣統帝に奉侍し」と記している（5月21日）が、この書き方からも、宣統帝復位がのぞましいとする宗方の考えを窺うことができる。28日北京から天津經由で済南、青島に行き、青島ではドイツの占領ぶりを調査するとともに、恭親王に会い、彼が「袁世凱の誤国を憤り」宣統帝復位を自らの任としているとして大いに評価している（5月31日）。その後泰山に登り、曲阜を訪ねて孔子廟の荒れ果てた様子に心を動かして長々と筆を執っている。そこから汽車で移動、南京を経て6月9日に上海に戻るのである。総じて、この時の「北清旅行」は、袁世凱の施政に対する北京を含む各地の反応を探ることを主な目的にした調査旅行であったと思われる。

上海に戻ってからしばらくの宗方の関心事はほぼ革命派が袁世凱の施政の横暴さに対して反旗を翻すかに集中しており、革命派が各地で戦闘を起した世に言う「第二革命」の状況を多く拾って日記に書きとめている。6月13日に孫文を訪ねて「時事を談じ」た内容は、海軍への報告第398号に「孫文訪問」と題して紹介しているが、そこには宗方が北清で見た状況に照らして、袁世凱は「（孫文らの）反抗を挑発して之に痛撃を加へん」としているとの考えを述べ、袁の勢力は孫文たちの勢力に比べてはるかに優勢なので、今は「隠忍して袁世凱失敗の時期を待つに如かず」と忠告したが、孫文はそれに耳を傾けずに「北方の勢力は仮装的にして甚だ恐るべきを見ず」として、袁を打倒することをめざしていると語ったが、しかしそれは失敗に終わるはずだと書いている。そして、6月下旬には漢口で国民党々員20名が捕えられて斬られたという知らせが届いたことを皮切りにして、7月には国民党幹部が主戦を覚悟したが、その後各地で起こった袁政権との戦闘では革命派は苦戦を強いられ、7月末には「昨日黃興南京を逃亡せりとの説有り。孫文も明日広東に赴かんとす」（7月30日）という事態となり、その後も南京その他の戦闘は続くものの、9月初めには終局を迎えることになった。日記には、とりわけ7月下旬に1週間続いた上海市内での北軍と南軍（宗方はこの言い方の他、南軍を「叛軍」とも記す）の攻防をその都度現場近くに出かけて観察して詳しく記しているのは興味を覚えることであるが、そのうち28日の江南機器局を巡る戦闘でその近くに位置する東亜同文書院が全焼したことは、同校に関係が深い宗方としても、大事件となった。

その後、9月15日に姚文藻、鄭孝胥などに会い、同19日には姚が「張勳の電報を示し余の南京行を求む。」と記している事情は、その頃に海軍への報告、9月16日付け第408号「張勳の進退」や9月19日付け号外「張勳と宗社党」などに書かれているが、袁世凱と孫文らの対立抗争を経て、宗方、さらには海軍や外務省も宣統帝復位を支持する方向にますます傾いていったと思わせる動きである。そして、第二革命が一段落を迎えて、宗方は9月20日上海を後にして帰国し、そのまま熊本でこの年を終えることになるのである。

ここで、大正2年に海軍軍令部宛てに送った宗方の報告の日付と号数を、前年と同じ要領で『宗方小太郎文書』中の記載と対照しつつ、日記から拾い出す。

1月20日一第390号（『文書』では1月19日付け）、1月23日「報告を發す」は、『文書』第391号、1月20日付けに該当すると思われる。1月30日一第392号、2月4日一第393号。5月26日「政況報告を發す」、『文書』にはなく、上海に5月25日付け「支那の政況」、号数の記載なし、がある。6月15日一第398号（『文書』では6月14日付け）。7月3日、『文書』にない、第399号の可能性大。7月5日一第400号、第401号。7月14日、『文書』にはない、第402号の可能性大。8月2日一第403号。8月6日、8月16日、ともに『文書』にない、第404号、第405号の可能性。8月25日一第406号（『文書』では8月26日付け）。9月3日、『文書』にない、第407号の可能性あり。9月16日一第408号、9月19日一号外。なお、『文書』には、宗方代理と称する号外として、4月10日、9月30日、10月21日、11月25日、11月26日付けが載っている。いずれも宗方が帰国中の日付けになっている。

## 大正二年

正月元日 晴天。諒闇中年賀の礼を行はず、朝波多と屠蘇を酌み雑煮を食す。午後惲祖祁、狄平を訪ひ、去て佐原に抵り四時帰る。夜木下温知夫婦來訪。薩南血涙史を読で五更に至る。

正月二日 快晴。午前橘三郎來訪。午後川口市之助、石橋藤次郎等來訪。二時半豊陽館に至り司令官、艦長、増田、佐原等と旗艦対馬に至り、晩食後司令官、艦長以下士官一同と共に宣紙を展べ試筆を為し、九時半に至り辞歸。今年は諒闇中各地知人へ賀正を停止せしも昨来年賀状続々來着せり。

正月三日 快晴。午前波多、島田、河野等來訪。夜小笠原來訪。加藤駒二より外交事情一冊を贈り来る。

正月四日 陰。岳翁と内人にと年始状を發す。午後井手友、西本省三來訪。海軍吉田大佐に復書す。加藤駒二に復書し角田隆郎、岡幸七郎に信片を發す。松寄を訪ひ小談歸る。清藤、尾崎前後來訪。

正月五日 陰。波多、光永眠雷來訪。昨來風邪の気味有り。中食後河野宅の招邀に赴く。香月、橘、外社員十余人浪花節の余興有り。八時辞歸。

正月六日 晴。午前甲斐靖、波多來訪。午後増田を訪ひ、去て上海日報に小談、歸る。波多の処に晩食す。和田連次郎來訪。夜佐原來談。

正月七日 快晴。午前田山宗堯に小為替にて八円六十仙を送り日本写真帖二冊を注文す。篠崎に至り薬を取て歸る。午後一時豊陽館に至り司令官、増田と談じ、三時の小汽船にて対馬に至り司令官、艦長以下に別を叙し、五時歸る。対馬は明日出港南清に赴くを以てなり。香月より晩餐の案内有り、風邪の気味を以て辞す。有留重利來訪。

正月八日 晴。朝有留來別。午後時計を修理し桑原に獵靴を注文し、上海日報、佐原等を歴訪して歸る。夜各地友人の年賀答礼の信片を認む。

正月九日 積陰。朝橘三郎來訪。年賀状の返信を認む。午後出て理髮し増田を豊陽館に訪ひ、六時半黒川新次郎、浅野某の送別会に俱樂部に出席し、八時歸る。姚文藻の信至る。夜年始状を認む。

正月十日 積陰。正午無芸会の黒川送別会に新六三に出席。同座は兎玉、石井、幡生、村井、前島、西田、神津、山田、水津、黒川、秦、並に黒川の後任某の十三人なり。二時散ず。姚文藻を訪ひ小談、歸る。微雨。

正月十一日 快晴。午後黒川の帰国を送り、帰途橘の処に小談、歸る。長沙迎英輔より湘筆十余枝を贈り来る。迎に礼状を發す。藤森、菅沼、堀内干城の信、並に各地知人の年賀状至る。夜香月、佐々布來訪。

正月十二日 晴。日曜日。堀内干城、藤森茂一郎に復書す。禾原永井久一郎死去の訃に接し弔詞を發す。午後井戸、橘、増田、西本願寺、角田隆郎等を歴訪し、五時研究所出身者の晩餐会に俱樂部に出席す。会者土井、甲斐、香月、河野、秦、青木、澤本の八人なり。八時歸る。

正月十三日 陰。谷口大佐より国防策議一冊を送り来る。之に復書す。午後豊陽館に至り増田と共に青山秋津洲艦長の招宴に赴く。小杉、並に鳥羽艦長同座たり。八時歸る。



- 正月十四日 雨。姚文藻に致書す。午後佐原を訪ふ。
- 正月十五日 雨。姚に致書す。午後正金に至り六十円を受取て帰る。吉田大佐、西村天囚、高宮議、角田政次の信至る。夜川口市之助来談。
- 正月十六日 陰。午前有吉を訪ふ。石渡邦之丞より二十日招宴の請帖至る。之に復す。吉田大佐、井手三郎に致書す。年賀の回答を認む。佐原の発行する週刊雑誌上海の題字を書す。
- 正月十七日 陰。熊本宅に致書す。西村天囚、鳥居素川、牧放浪、阿多廣介、島田儀市以下に復書す。午前佐原を訪ふ。鳥居の信至る。午後三時姚文藻の処に憚祖祁父子と会し、談時を移して帰る。
- 正月十八日 快晴。鳥居に復書す。午後青山秋津洲艦長、清藤幸来訪。
- 正月十九日 快晴。日曜日。佐原より保命酒を贈り来る。午前佐原を訪ふ。渋川玄耳、牧の紹介にて来談。河口、古閑信夫、富田安兵衛、井手三郎の信至る。井手に復書す。
- 正月二十日 陰。井野春隆来訪。石橋藤次郎より鮭の筋子二缶を贈り来る。海軍に報告を発す。午後理髪。上海日報より大倉に至り、四時帰る。村山の信至る。本日長沙より帰来せりと云ふ。六時半石渡邦之丞の招宴に六三亭に赴き、九時帰る。大雨。
- 正月二十一日 風雨。午後佐原を訪ふ。三時帰る。岡田晋太郎来訪。奈良漬一缶を贈る。晚杏花楼の北京会に出席す。同座は渋川玄耳、岡田晋、齋藤延、西岡、波多、佐原、増田、香月等なり。九時散ず。
- 正月二十二日 晴。晚波多と香月の処に至り汁子を食し、九時帰る。加藤壮太郎、成松静雄、犬童信藏、長安等の信至る。
- 正月二十三日 陰。成松、犬童、加藤に復書し、長沙岡本領事、並に熊本宅に致書す。鮭の筋子一缶を留守宅に郵送す。田山宗堯より定購の日本写真帖二冊を郵送し来る。午後軍令部に報告を発す。郵便局より領事館に至り有吉、並に警察部を訪ひ、去て豊陽館に増田、岡田晋、橘、渋川等を訪ひ帰る。佐原を訪ふ。増岡より塩鮭一尾、並に鰯を贈り来る。山本警部より犬童より囑されし成田蔵巳の踪跡を報知し来る。犬童に一書を致し之を通告す。
- 正月二十四日 陰寒。山本警部に礼状を発す。午後波多と佐原、西本を訪ひ、四時帰る。
- 正月二十五日 晴。正午蛭子義治、志保井雷吉の帰国を送る。紐育原田棟一郎の信至る。内人の信至る。晚佐原、香月、波多を招き甲魚を食す。十時散ず。
- 正月二十六日 微雪。日曜。午前佐々布来訪。田中清司、並に亀雄に致書し訓誨する所有り。狄楚青に日本写真帖一冊を贈る。島田来訪。午後村山を東和に訪ふ。
- 正月二十七日 晴。領事館より本月分経費を受取る。秋津洲、淀両艦長来訪。牧卷次郎、有安一雄、宮坂九郎の信至る。有安より三井入社の保証人たらんことを求め来る。夜秋津洲、淀両艦長を豊陽館に訪ふ。
- 正月二十八日 微雨。内人、有安、海軍、緒方、阿部野に致書す。郵便局に金百五十円を預く。増田、橘を訪ひ正午帰る。吉田大佐、永井久一郎遺族の信至る。長田医士来訪。
- 正月二十九日 快。午前増田中佐来訪。白岩、井手、鳥居の信片至る。午後出て孫文を訪ひ、帰途香月、増田、上海日報を訪ひ帰る。増田の処にて嘉悦敏に邂逅す。雲南に赴く者なり。
- 正月三十日 晴。海軍に報告を発す。別に外務省宛の分を有吉領事に送る。森少将に報告写を送る。午前大蔵省試補大原胤夫、橘三郎、波多等来訪。海軍少佐齋藤國男本月十七日死去の訃に接す。國男は前途有望の人物なりしが一朝病没、真に悼惜に堪へざるなり。午後郵便局、上海日報、増田を訪ひ帰る。六時佐原の招宴に赴く。同座は大原胤夫、増田、神崎、島田、岸本、波多、齋藤、西本、西田等同座たり。九時帰る。
- 正月三十一日 晴。午後佐原を訪ふ。夜佐々布来訪。
- 二月一日 陰。鳥居、井手、中島真雄、田鍋、荒賀、山内崑、勝木等東京より合作の信片至る。犬童信義の信に接す。夜村山正隆と姚文藻の招宴に赴く。同座は憚祖祁父子、鄭孝胥等なり。九時帰る。

二月二日 陰。日曜。午前平岡小太郎来訪。午時川口市之助来談，中食を共にす。午後香月梅外，有働，檜木野以下同文書院生七八人来訪。佐々布来訪。

二月三日 陰。午前理髪。午後時報館より去年分残額全部二百元を送り来る。清藤，堀参謀，橘三郎来訪。村山来訪。

二月四日 積陰。海軍に報告を發す。山本警部，有吉に致書す。午前九時堀参謀の帰国を送り，帰途増田を訪ひ小談，帰る。井手友来訪。正午佐原の誕生祝に列す。波多，西本，島田，遠藤列同座たり。三時帰る。有安一雄の信至る。明朝より香月，平岡等と杭州に出獵せんとす。行装を整齊す。夜波多，島田来訪。

二月五日 陰。午前六時起床，結束，獵装を整へ上車，香月梅外の処に至り平岡と三人朝食し，車を駆て南門外車站に至り八時半の汽車にて杭州に向ひ車中にて中食し，午後二時長山門に着し拱宸橋線に換坐して拱宸橋に至り，大東に入り小休の後直に民船に乗り轎司の獵区に向け出發。一灯豆の如く三人蓬底に鼎坐し興趣如湧，深更枕を並べ寝に就く。夜半船和睦聯橋に達す。是日陰曆除夕に属し臘鼓遠近爆竹の聲と相和し旦に達して息まず。

二月六日 陰天。是日陰曆元旦たり。詰朝食事を了し結束して獵区に入る。和睦聯村は地方の小集にして轎司此を距る七清里と云ふ。午前鴨四羽，鵝一羽を獲，船に帰る。午後再び出獵。山鴨一羽，鴨一羽を獲，黄昏帰船。

二月七日 陰。早朝獵区に入り獲る所無くして帰る。中食後舟子を促し轎司に向ひ三時達す。直に上陸。鴨四羽，鵝一羽を獲，五時帰船。

二月八日 雨。出獵を得ず。朝食後發船，臨平に向ふ。此を距る二十清里，午後一時達す。雨暫くも歇まざるを以て空く船中に閑話し，車站附近の橋側に夜泊す。

二月九日 微雪。是日上海に帰らんとし早朝行李を收拾して船を出で車站に至り，九時十五分の汽車にて臨平を發す。車中午餐を取り，午後二時南門車站着。香月，平岡と分れ車を賃し家に帰る。内人，清子，田中清司，亀雄，池田末雄，緒方二三，内田友義，成衿静雄，高木豊，吉田大佐の信に接す。夜岸陸軍大尉来訪，参謀本部より派遣され北京より津浦鉄道にて来着せる者なり。

二月十日 晴。午前宇都宮少将を東和洋行に訪ひ小談，去て村山の室に至り小坐，出て増田，橘，勝木を豊陽館に訪ひ帰る。中食後佐原を訪ひ海軍の競点射的に列する為め新公園に至る。已に終了の後なりしを以て乍浦路に至り理髪して帰る。北京森少将，東京郡島，並に町田武次郎の信至る。鳥居赫雄より其著「頬杖つきて」一冊を贈り来る。晩波多を招き会食す。狄楚青来訪。

二月十一日 半晴。午前時報館訴訟事件にて領事館に至り商量して，帰り狄を訪ひ小談，十一時佐原の処にて本日より發刊せる週報上海の關係者一同と撮影す。午後二時孫文，何天燭，戴天仇等の日本行を山城丸に送る。岸大尉，洪川玄耳，紀成虎一亦本船にて帰国せり。東和に宇都宮を訪ふ，在らず。村山，齋藤と小談，帰る。是日獵獲の鴨を佐原，西本，波多，佐々布に分配す。夜佐々布来訪。西村天囚，鳥居素川の信至る。上妻，西本来談。是日紀元の佳節なれども諒闇中に属し祝賀を廃す。

二月十二日 陰。朝狄楚青来訪。西本，甲斐，勝木来訪。勝木，甲斐と晩食を共にす。桂内閣崩れ山本権兵衛総理として之に代はれりとの電報有り。

二月十三日 晴。池辺吉太郎の建碑寄附金三円を東京杉原惟敬に送り，外に齋藤國男の遺族に香典二円を致す。池田末雄，岡本領事，鳥居に信片を發す。午後増田，橘，佐原を訪ひ帰る。夜青年會館に至り東郷鳳琴の薩摩琵琶，常陸丸，義士打入，本能寺の三曲を聴て帰る。

二月十四日 陰。宇都宮少将案内状至る。内人，清子，並に内田友義に復書す。午後靴店に至り修繕を托し，佐原，篠崎を訪ひ帰る。有留重利の信至る。台湾総督府木村増太郎，台湾日々新報記者益子逞輔来訪。徳永格，勝木恒喜来訪，兩人は明朝の便船にて帰国する者なり。夜出て徳永，勝木を船に送り名刺を留て帰る。川口市之助，河野久太郎来訪，深更に及で去る。

- 二月十五日 晴。上妻博之、黒川新次郎の信至る。村山正隆、高島醇来訪。夜宇都宮少将の招宴に辰虹園に赴く。有吉、石井、増田、河野、江崎、木幡、西田、佐藤、齋藤以下七八人同座たり。九時散ず。
- 二月十六日 晴。日曜。正午宇都宮の蘇州行を送る。西村天囚より其猥褻の写真を送り来る。西村に復書す。敷波艦長来訪。三時より河野、香月、甲斐、橘、土井、澤本、青木等を会し支那料理を食し、終て鳥居、西村、松倉、角田、牧、白岩、渡部等に合作の信片を郵寄す。十時散ず。
- 二月十七日 午後微雨。午後増田、佐原を訪ふ。晚台湾日々新報記者益子逞輔、同総督府事務官木村徳太郎来訪。
- 二月十八日 雨。吉田大佐に致書す。午後理髪、上海日報社、並に木村、益子兩人を北四川路に訪ひ帰る。深澤暹、神屋茂の信至る。
- 二月十九日 積陰。朝小野清秀来訪、朝鮮にて農業に従事せる者なり。午後上海日報を訪ふ。雨。吉見春生、美濃正美の信至る。
- 二月二十日 陰。深水十八の信至る。午後名和司令官を豊陽館に訪ふ、在らず。帰途佐原に至り、四時湖南の碩学王闔運並に前軍機大臣瞿鴻禨を辰虹園に招宴す。王氏歳八十二、意気壯者を凌ぐの概有り。同座は村山、長尾、佐原、平岡、松崎、篠崎等にして佐原の師増島六一郎も列席せり。七時散ず。長田医士来談。
- 二月二十一日 半晴。午後対馬に至り司令官を訪はんとす。艦長、参謀等の上陸に遇ひ、相伴て豊陽館に至り名和司令官を訪ふ。水野梅暁亦来会。晚篠崎の招邀に赴く。同座は村山、増田、青山、秋田、佐原等なり。十時帰る。
- 二月二十二日 雨。波多来訪。松倉、勝木の信片至る。清国隆裕皇太后薨去の電報に接す。
- 二月二十三日 陰、微雪。午前佐原を訪ふ。午後齋藤少佐恒、郡島忠次郎、安河内弘、佐々布来訪。佐々布より寿司を送り来る。瞿鴻禨より案内状至る。狄来訪、銀二百元を送り来る（本年正月迄の分）。
- 二月二十四日 陰寒。午前領事館に西田を訪ひ時報訴訟事件の事を托し、去て狄平を訪はんとし之に道に遇ひ相伴て領事館に至る。吉田大佐に致書す。厦門碇泊の河内艦長竹下大佐の信、並に北京豊島捨衾、岡田晋太郎の信に接す。杉原惟敬、有蘭善行の信至る。井野春隆来訪。晚水野梅暁、波多来訪。第三艦隊より長江史蹟を贈り来る。
- 二月二十五日 半晴。早朝波多の処に飯し、九時の汽船にて波多と旗艦対馬に至り司令官、艦長、参謀等を訪ひ、談話時を移し中食の饗を受け、一時帰る。河野久太郎の帰国を筑後丸に送り、転じて岳陽丸に至り、今夕湖南に帰る王闔運千秋に名刺を留め、理髪して帰る。長沙岡本領事の信至る。成松静雄に致書、岡本の手紙を送る。岡本に復書す。領事館より本月份経費を受取る。姥子義治の信至る。
- 二月二十六日 快晴。午前郵便局に至り預金を為し、帰途東和に郡島を訪ひ支那蝦子三種を購て帰る。有留重利来訪、琉球塗重箱一組を贈る。鹿児島大野謙二郎に致書、桐野、村田両氏の真蹟代購の事を依頼す。午後宮崎民蔵来訪。
- 二月二十七日 快晴。井手友喜来訪。清子、並に鳥居の信至る。熊本宅に致書す。
- 二月二十八日 快晴。午前清藤来訪。是日先考の二十七回忌たり。午後本國寺分院に至り回向を請ふ。増田、井手を訪ひ小談帰る。夜藤井太七来訪、本日来着、明後日香港に赴くと云ふ。
- 三月一日 晴。午前佐々布、藤井、波多来訪。海軍に報告を發し、別に帰県の事を報ず。夜今井邦三、光永眠雷、川口市之助来訪。
- 三月二日 晴。吉田大佐に致書す。午後佐原を訪ひ、転じて有吉、姚文藻を敲き、四時帰る。島田数雄来訪。現在寓する所北山西路三号宅を近日撤退帰国に決せしを以て、是日僱僕阿三に銀三十二元を賞給す。其三十九年以来服事せしを以てなり。
- 三月三日 晴。岡幸七郎に致書す。午後有吉、西田、齋藤、井手を訪ひ、転て城外に至り六神丸を求

め、大倉に川本、今井、川口、石橋等と談じ、五時香月宅の晚餐に赴く。平岡同座たり。八時帰る。  
佐原内君危篤の報に接し明朝の便船にて急に帰国するを以て、行て之を訪ふ。

三月四日 晴。午前上妻博路来訪、余に書を嘱す。波多、上妻両子に各二枚を書し与ふ。午後波多、西本来り書類の整理を為す。橘三郎、長尾夫人、桑原等来訪。東京勝木恒喜の信至る。夜佐々布来訪。

三月五日 快晴。朝狄楚青来訪。午後時報館より字帖、並に名画集二十余冊を贈り来る。領事館、上海日報等を歴訪し、去て泗涇路に秦を訪ひ帰る。河野夫人来訪。

三月六日 快晴。終日行李を整頓す。

三月七日 雪。午後佐々布来訪。出て理髪、上海日報、増田、秋元等を訪ふ。秋元は昨日支那内地より帰来せる者なり。甲斐靖を訪ふ。石橋藤次郎来訪、明日の船にて帰国すと云ふ。夜に入て雪愈大。

三月八日 雪。姚文藻の信至る。午前十時半石渡、石橋、迫等の帰国を近江丸に送て帰る。午後一時半の小蒸気船にて軍艦対馬に至らんとて果さず。増田、橘を訪ひ、四時帰る。羅孝高来訪せりと云ふ。四時姚文藻来訪。高島醇、羅孝高来訪。河野通器の信至る。

三月九日 晴。朝羅孝高来訪、時報館訴訟事件の為なり。是日北山西路第三号の住宅を引払はんとす。朝家具を整理し之を愛而近路十六号、並に佐原宅に分存す。佐々布、波多、西本、上妻、小笠原等来り諸事を周旋す。回顧すれば寓を此としてより星霜正に五年有半、一朝之を去る眷々の情無き能はず。午後五時家具全部を運搬し終り、波多宅に移り上妻と三人晩食す。

三月十日 陰。午前増田、西田、篠崎、秋田を訪ひ帰る。内田友義、齋藤久熊、深水十八の信、並に海軍より四月至六月の手当を送り来る。近藤副官に領収証を發す。午後正金銀行に至り金子を受取り、帰途上海日報、増田を訪ふ。増田の処にて薩鎮氷に会す。名和司令官、並に河野夫人に致書す。夜宮崎民藏、清藤幸七郎、山東実、島田数雄、佐々布、高島、加来等来訪、十二時去る。増田、船津、村山等より新六三に招邀、辞して往かず。

三月十一日 陰。是日熊本に帰らんとす。朝来行李を戒む。午前船津辰一郎、井手友喜、西本省三来訪。十一時行李を送て出で増田、秋元、金万、村上、西田、齋藤等を訪ひ、山口丸に上る。森勝太郎同船たり。大塚少佐、板屋大尉清寛の遺骨を送りて船を同ふす。秦、木幡、木下、香月、波多、松寄、井手、土井、西田、澤本、宮崎、清藤、川口、川本、加来、島田、岡、橘、村上、齋藤、増田、秋元、小笠原等来り送る。午後零時半開船。海上平穩。

三月十二日 晴。海上。

三月十三日 午前長崎港に入る。税関にて同船の大塚、森、水谷等と別れ、晌午土佐屋に入る。入浴後中食す。二時の汽車にて熊本に帰らんとす。荷物後れて及ばず。四時の汽車にて發す。熊本宅に電報す。夜半鳥栖着、旅館に投じて一睡す。

三月十四日 晴。詰朝結束、午前七時半の汽車を待て發す。十時十分上熊本着、川口、菅村来迎。直に新屋敷の宅に帰る。河口を留めち中食す。午後佐々布遠来訪。九州日々社員師富清、拝郷肋人來訪。夜田中清司夫婦来訪。

三月十五日 快晴。白岩龍平、吉田増次郎の信至る。午前大江を訪ふ。午後近隣を歴訪し、出て古閑宅より春日に松倉を訪ふ、在らず。帰途九日社に小早川、板井、平山等と談じ、去て河口宅に至り、転じて佐々布、田中、上妻、菅村、井芹を歴訪して帰る。是日午前平山、緒方、阿部野来訪、之を留て中食す。

三月十六日 雨。午前松倉善家来訪。白岩、佐原に東京に致書す。河野通器来訪。海軍より北清旅行旅費六百円を送り来る。

三月十七日 陰。佐々干城氏来訪。夜菅村夫婦来談。廣岡理則、吉田大佐、西本省三、東亜同文会の信至る。

三月十八日 半晴。午前理髪。緒方を訪ひ藤崎宮を拝して帰る。木下俊雄の信至る。海軍に旅費領収証



を發し古莊頼来訪。夜古閑信夫来訪。吉田大佐に復書す。

三月十九日 晴。午前古莊を訪ふ、在らず。

三月二十日 晴。午前六時十分の汽車にて松倉、村上一郎、長江虎臣、行徳、内藤、林等と大牟田に至り、孫文の一行を迎へ車を同して熊本に来る。十時二十分着。帰途阿部野と松倉氏に小談帰る。午後五時半春日に松倉を訪ひ、七時一日本店の孫文歓迎会に出席す。主賓孫文以下、戴天仇、何天炯、袁某等五人にして主客合計百三十人。九時帰る。雨。

三月二十一日 雨。午前九時半熊本駅に至り孫文一行を送り、帰途松倉の処に閑談して帰る。岡幸七郎の信、並に佐原篤介より其の夫人の死去を報じ来る。吉見春生来訪。大連立花政樹に致書す。夜石原醜男来訪。

三月二十二日 晴。河口介男来訪。波多博、岡幸七に致書す。岡は其の岳父病氣の為に帰国せる者なり。佐原篤介に奠儀五円を送り弔詞を發す。

三月二十三日 晴。午前田中清司来訪。午後有働生来訪、今夕より上海に赴くと云ふ。

三月二十四日 微雨。本島正礼、西本省三、波多博、岡幸七郎、樋口少佐、林大尉の信至る。西本より李瑞清より張勳への紹介状を送り来る。本島に復書す。午前菅村、河口を訪ふ。午後河口来訪。明日より家族を伴ひ栃木温泉に入浴せんとす。西本に復書す。夜清水巖、河口某来訪。

三月二十五日 陰。是日より栃木に入浴せんとす。早起行装を治し、九時菅村の処に至り、十時の輕鉄を待て之に乗り大津に赴かんとす。人多くして不可乗。不得已腕車三輛を賃し十時半發す。途雨屢ば至る。午後一時半大津着旗亭に投じ中食、二時發栃木に向ふ。風塵迷濛。瀬田、立野を過ぐれば風致愈よ佳。戸下より道路環廻螺旋の如し。車を下て歩す。風雪愈よ急にして向邇す可からず。光景極めて快絶たり。午後五時栃木着。小山旅館に投ず。熊本至此八里半窓前直に鮎返瀑に対し、水流鞆鞆として声有り。溪山如故にして、曾遊を回顧すれば已に二十六年矣。館主人米田寅太郎来談。

三月二十六日 晴。終日観音湯、平湯等に浴す。鮎返滝を觀る。

三月二十七日 晴。佐原、澤村幸夫、隈元武次、松倉、平川常義の信を熊本より転送し来る。午後附近を散歩す。菅村母子来着。

三月二十八日 快晴。午後瀑の上游を巡視す。

三月二十九日 快晴。午前一同を伴ひ戸下に至り朝陽館に中食して帰る。河口介男、波多博、成谷静雄の信至る。安東県小濱為五郎より電報にて余の游期を問ふ。小濱、鳥居、土屋に致書す。

三月三十日 快晴。午前菅村母子、清子と三人馬車熊本に帰る。午後内人と近辺に散歩す。

三月三十一日 晴。午後内人と鮎返の上游に散歩す。午後対岸の山脚水辺に遊ぶ。夜に入て雨。

四月一日 雨。是日熊本に帰らんとす。雨を以て中止す。隈元、平川、森少将、林貞雄、増田中佐に致書す。

四月二日 雨。滞在。

四月三日 半晴。神武天皇祭。午前八時小山旅館を辞し、馬車を賃し立野より数鹿流に至り観瀑。再び立野に帰り、午後一時大津に達し輕便鐵道車站附近に小休中食を為し、三時の輕鉄にて熊本に帰る。五時家に達す。吉田大佐の電報二通、書信一通、並に大連立花政樹より南滿鐵道全線の優待上車券を送り来る。上海波多より三月分外務省手当二百六十円を送り来る。松崎奎雄、徳永格、同文会、阿多廣介、鳥居、岡幸七等の信に接す。夜宮崎盛来訪。是日立野、頼田附近桜花盛開。

四月四日 快晴。志賀哲太郎、波多博の信に接す。午前理髪、午後内人と水前寺に遊び、桜を觀、茶を吃して帰る。緒方、阿部野来訪せりと云ふ。午後大江を訪ひ、夜河口宅に至る。

四月五日 快晴。吉田大佐に復書し、別に野田寛、波多、松崎、西本、立花に致書す。徳丸、佐野に致書す。島田、井手、廣岡理則に致書す。午後河口、小早川、山田、緒方、阿部野、平山等を訪ふ。

四月六日 晴。午前三浦喜傳、佐々布質直来訪。佐々は親の病氣の為に日前帰省せる者なり。晌午内人、

佐々布と新市街イロハに至り中食し御幸坂の桜を見る。本日正に満開たり。二時より佐々布に分れ大和座に至り観劇、夜十一時帰る。是日波多送來の金子を受取り、帰途阿部野を訪ひ小談。野田寛の信至る。

四月七日 陰。午前佐々布、緒方、阿部野等を訪ふ。朝鮮佐野直喜、徳丸作蔵に致書す。上海孫逸仙の礼状至る。午後内人と桜を物産館に観、去て菅村宅を訪て帰る。東京吉田大佐の電報至る。夜不破昌材、高宮議來訪、之を留て晩食を共にす。

四月八日 微雨。朝生田清範來訪。吉田大佐に復電す。田中清司來訪。阿多廣介の信至る。之に復す。台湾志賀哲太郎に復書す。午後内人と大江を訪ふ。奉天中島為喜の電報至る。夜古閑信夫夫婦來訪。

四月九日 陰。中島に復電し別に信片を致す。北京野満四郎、東京吉田大佐に致書す。山田珠一より案内状至る。之に復す。内田友義に復書す。午前河口、緒方、葉室、井場、古莊、井手、中島為喜留守宅を歴訪す。午後成泰靜雄來訪、長沙に教習として赴任する者なり。長沙岡本領事、市川、迎等に紹介す。佐々競京城よりの信至る。松倉、不破に致書す。午後内人と見性寺の桜を見る。四時三浦を訪ふ。山田珠一來訪。夜菅村夫婦來訪。

四月十日 陰。河口來訪。上海福岡祿太郎より時報訴訟の件に付き云云し来る。之に復す。午後四時山田珠一市長就任の披露宴に物産館に出席す。來賓約二百余人。六時帰る。夜松倉來訪。九州日々社後藤是山來訪。黎元洪暗殺の事に付き意見を問ふ。海軍吉田大佐の信至る。

四月十一日 晴。佐野直喜、森茂、田岡に致書す。西本省三、佐野直喜の信至る。午後古莊韜、松倉善家來訪。夜佐々干城氏來訪。

四月十二日 雨。佐野、芥川正に致書す。午後井芹宅にて高等学校生林國雄に会す。夜松倉、古莊來訪。

四月十三日 晴。阿多廣介に致書。南洲翁の真蹟を送還す。午前葉室侃温來訪。西田耕一、波多博に致書。午後井芹、大江、井手、菅村、田中、上妻宅を歴訪、別を叙す。夜宮崎盛、菅村夫婦來訪。

四月十四日 陰。朝理髮。小早川秀雄、不破昌材の信至る。午前肥後支店にて金三百円を受取り、去て古閑、河口、山田、板井、平山、中路、岡、緒方、阿部野列を歴訪し物品数点を購て帰る。夜田中、古閑、河口、菅村、緒方、池田勇來訪。

四月十五日 晴。朝石原、佐々布達、同質直、井場、古庄、井手三郎、河口、平山、岳父母來訪。十一時中食。十二時家を辞し上熊本に至る。井手、阿部野、河口、田中、菅村、佐々布、長船來送。十二時半開車。三時鳥栖着。勝木の上海より来るに邂逅す。五時半門司着、石田旅館に投ず。熊本宅、河口、田中、吉田大佐、森少将に致書す。入浴後食事を取り、九時釜山行の聯絡船高麗丸に乗ず。十時開船。船室、並に諸般の設備善美を尽せり。此夜碧落如洗、春月半截、海平にして波たたず。玄海一望、漁火明滅夜色可人。十一時就寢。

四月十六日 晴。午前七時甲板に出れば左に對州を望み前に釜山の山を認む。八時半釜山港に入る。芥川正、高木正雄、高木末熊、南雅雄、奴留湯、恕策等來迎。諸子の東道にて大倉埋築地より池野町を過ぎ龍尾山角の加藤神社を展す。清正公を祀る所前面絶影島に對す。之を下り南浜町の魚市を見る。魚類屯積雜踏殊に甚し。長手通を経て龍頭山下の釜山日報、朝鮮時報の両社を觀る。釜山報は芥川主管に属し朝鮮報は高木末熊の經理する所なり。龍頭の山松林画くが如く景致甚佳、山上琴平神社有り。去て福田氏の向陽園を觀る。桜花盛開、園内の布置極て雅趣有り。港湾の全景襟帶の下に在り。登臨の勝此を第一と為す。向陽園の三字は故伊藤公の題する所。十時十五分車站に帰り京城行の汽車に上る。芥川大邸に赴くが為に同車す。十時半發、諸子來送。南雅雄送て釜山鎮に至り相別る。左側の山頂小西行長の城址有り。基礎巖然として今尚存す。院洞を経て三浪津に至る。馬山線此に於て分岐す。左側洛東江を望む。山展江緩風致頗佳。麦隴の間土人の耕耘に従事する者皆白衣、恰も白鶴の田に啄むが如し。正午芥川と中食を共にす。午後一時半大邸着、芥川と握別す。佐野直喜京城よりの信、葉室謹純洛東よりの電報に接す。午後七時半成歡を過ぐ。右側參上碑有り、日清の戰役第一戦に

於て松崎大尉戦死の処。此より地勢漸く開豁，只だ小丘の起伏するを見るのみ。九時半京城着。佐野直喜，林市蔵，佐々正之，全競等来迎。大南門を入り旭町の佐野宅に投ず。佐々来談。十二時就寝。是日途上有詩。

邀游恰好及佳辰，一路春風花若塵，剩水殘山何所見，池塘粧点白衣人。

釜山港在住の内地人三万人許，中熊本人七百名有りと云ふ。

四月十七日 快晴。朝林市蔵，佐々正之，深水清来訪。十時共に出て景福宮の光化門を入り勤政殿，慶会楼等を巡覽し乾清宮の廢址に至る。往年閔妃殉難の処。此辺一体の廢墟乱草滿地，光景荒涼を極むと雖も庭前の松林翠色流るるが如く，亭榭点綴，風致甚優。乾清宮後に峙つものを白岳と為す。其西に起伏するは仁旺山なり。山陽の溪間杏花万樹，春色画くが如し。景德宮を出て昌德宮に至る。李王の居る所仁政殿を觀る。裝飾華麗，臣僚を引見するの所。転じて王，並に妃の居室を見る。屋低ふして広からず。坑上座褥を置く，燕息の処なり。去て宮後の秘園を見る。老松林を成し躑躅其間に粧点し，甚美観たり。博物館に至り陳列する所の仏像，磁器，書画を觀る。多くは新羅時代千百余年前の物。半は古墳より發掘せし物。午後二時東華門外の小舗に入て中食し，帰途佐々，深水に別れ百三十銀行に帰り小休。内人，清子，有吉，菅村に信片を發す。五時林，佐々，佐野，深水，木村保太等の招宴に南山町の喜久家に赴く。佐野と南山の一角に登り京城全市を下瞰す。北漢山の奇峯秀拔，半天に雄峙し形勢甚壯。南山は松林画くが如く，恰も武雄の城山に似たり。倭城台有り，征韓の役藤肥州の城址なり。席上談新話旧興趣如湧。細川護立男，古城，鳥居，土屋，佐々干城，高島義恭，井芹諸氏に合作の信片を發す。十一時半帰る。春月一団星火万点，夜色甚好。

四月十八日 晴。午前佐野と林市蔵を東洋拓殖会社を訪ひ暢談。去て佐々正之を敲き，転じて東洋協會専門學校に至り河合幹事を訪ひ，帰途高橋謙を旭館を訪ふ，在らず。深水，大村来訪。午後高橋来談。時を移て去る。山内崑に致書す。林より晚餐の案内有り。奉天中島，井深，中西，松田に信片を發す。午後六時林市蔵の招宴に赴く。佐々，佐野，深水，足立丈二郎同座たり。十一時帰る。

京城人口二十四万，日本人七万人。

朝鮮全部の日本人約二十万人の数に上れり。

朝鮮の水田約八十万町，此中東拓会社の買収せしもの六万町，毎月千町平均を以て買収を行ひ一年一万二千町を得る計画なり。山林の所有に帰せしもの八万町有り。

朝鮮に於て最も有利の事業は，農業を第一とし，漁業之に次ぎ，鉱山，殖林亦た有望なり。

米種惡劣なるが為め収獲の量十分の四に過ぎず。

自今之が改良を施し河内の整頓を実行するの暁には一反歩に於て平均十円つつの増収を得る見込にて，一ヶ年間八十万町の増収八千万円に上るべし。

八道中の沃地は慶尚南道を第一とし，北道，並に全羅南北道とす。

本年度朝鮮行政費の国庫補助額は一千万円なり。

四月十九日 晴。是日満洲に向はんとす。午前八時佐野氏を辞し南大門車站に至る。佐々，佐野と茶を啜て小憩，九時二十分安東県行の汽車に乗ず。林市蔵，高橋謙，佐野，佐々，同競，足立丈次郎，山光勇，三浦泰雄，深水清来送。十一時開城着。地方の小都会なり。山中躑躅甚多。新幕を過ぎ二時半黄州に着す。右側山に倚り城郭を成す。車中熊本人中西虎彦に邂逅す。三時大同江を度り平壤に着す。江を帶び山を負ひ形勢雄大，遙かに牡丹台を望む。新安州を経て五時半定州着。平壤以西線路の左方地勢開豁，地味亦肥沃なり。八時新義州を過ぐ。小濱為五郎，並に同文書院出身者兩人特に此に来迎す。共に車を同ふして鴨綠江鉄橋を度り八時半安東県に達す。赤松，平山氏清，藤村俊房，成田定，松本清司，柿原峯吉，山村金之助，若林兵吉等来り迎ふ。小濱宅に投ず。十時より旧知，並に同文書院出身者の招待に董亭に赴く。吉田領事，堺與三吉，成田定，伊東俊造，小濱，以下同文書院出身者六七人。十二時半散ず。是日途上詩有り。

經東水駅又山郵，踏破鷄林入滿洲，鴨綠江風虎嶺月，客衣春冷憶曾游。

四月二十日 晴，冷氣甚し。早起薄水を見る。午前小濱と共に鎮江山の臨濟禪寺に遊ぶ。日本僧釈仏海此に住持す。茗を啜て暢談。此僧學識有り，詩を善くす。此処眺望佳絶，鴨綠江を隔て朝鮮の諸山を望む。安東の全局襟帶の下に在り。日露戦役後の建設に係はる新市街の規模極て雄大なり。十一年前曾游の時に比すれば転た変遷の甚しきに驚けり。平山來訪。三浦夫人來談。正午吉田領事の招待に赴く。堺，小濱同座たり。吉田茂は先年歐洲漫遊の時羅馬に於ける相識なり。三時辭歸，四時より新築の俱樂部を見，去て有志の招宴に董亭に赴く。山下五郎，中野初太郎，小濱為五郎，太田秀次郎，尾崎濟，南部重遠，久間善助等東道たり。九時散ず。内人，清子，吉田大佐に信片を發す。小濱と談じ深更就寢。

安東県居留民七千人。

鴨綠江の鉄橋は日本第一にして全長九丁，建設費四百万円を要し，二年にして竣工せし者なり。

四月二十一日 晴。奉天中島為喜に電報を發す。山下，南部來訪。九時小濱氏を辭し安東車站に至り安奉線にて奉天に向はんとす。小濱，山下，南部，太田，堺，成田定，赤松慶太，松本，柿原，若林等來り送る。九時四十分發車，沙河駅に至れば平山氏清，外一人來送。蛤蟆塘を過ぐれば右側奇峯の巖峨たるを望む。五龍背駅を過ぎ前面鳳凰山を望む。此辺二十七年前曾遊の道なり。高麗門を過ぐ。鳳凰山下に在り当年の游踪歴に指点すべく，慨然たるもの之を久ふす。鳳山奇峯分立，清秀如画。十一時半鳳凰城を過ぐ。十二時鷄冠山駅に中食し，二時草河口に至る。伊東俊三の電報に接す。三時釣魚台下を行く。奇岩削立して清流に臨む。恰も球磨川清正公岩の状の如し。三時半橋頭に至る。山間の大駅なり。安奉線第一の隧道を過ぎ，四時本溪湖に達す。駅の左方炭礦有り。

本溪湖炭坑は大倉と支那側との合弁にて当初二百万円の資本なりしを，今度製鉄所を併設せし為め更に二百万を増資し四百万円の合弁と為せり。目下毎日出炭八百噸，工夫二千を使用す。運路は營口に取り，冬期結水の間は大連に輸出すと云ふ。製鉄所の第一期計画は毎日百五十噸を製出するに在り。漸を逐て之を拡張し，第二期に於て三百噸を出すに至るべし。鉄山は本溪湖を距る三十一哩の廟兒山に在り。南坎車站より十五清里の距離に過ぎず。本溪湖居留民二千余人。

此地人煙頗盛，石橋子を過ぐれば地勢開豁たり。陳相屯駅に至る。中島為喜此に来て余を迎ふ。六時半奉天着。森茂，佐藤，松田満雄，上田賢三，岡野増，以下十余人來迎。瀋陽館に投ず。八時より同文書院出身者の招待会に金六亭に出席す。書院出身者の外に森，原口聞一，松田満，三谷末次郎，原田鐵藏等を加へて三十余人なり。十一時散ず。森，上田，中島と瀋陽館に談じ，十二時就寢。

四月二十二日 雨。午前原口聞一，上田賢三，森茂，米良，桑原，守田大佐利遠來訪。中食後中島と同車，守田，原口，井原，落合総領事，佐藤安之助を歴訪し，六時井原，中島，守田福松，米良の招邀に金六亭に赴き，十時歸る。森井國雄，佐藤善雄來訪。

四月二十三日 晴。熊本宅，佐野に致書し，森に電報を發す。大阪毎日通信員田村貞一來訪。佐藤安之助，岡野増次郎，染谷，中島，松田満雄，森井國雄等來訪。午後井原真澄，大谷憲，原口聞一來訪。午後八時半瀋陽館を辭し，停車場に至り大連行の汽車に上る。原口，宮崎，佐藤，岡野，米良，染谷，大谷，原田，以下十余人來り送る。中島為喜大連迄同行す。九時十八分發車。

奉天居留民七千人，滿洲全部にて十万人。

朝鮮人の鴨綠江沿岸，並に滿洲内地に移住せし者十万人，間島と吉林を合すれば三十万人の数に上り，本年の移住者は九千人有り。此等の韓人は皆土地買入れ水田を経営せり。

長春以南水田と為すべき地面四千万町歩有り。灌漑は河に近きは河水を引き，河流無き地方は井を鑿て之に用ゆ。

奉天財政支出歳出総額約一千万に對し，歳入七百万に過ぎず，出入不足約三百万以上に達せり。

○滿洲の新聞紙



奉天

盛京時報 毎日発行高五千五百枚, 満洲報 一千枚, 国民党機関

東三省公報 二千枚, 官僚派, 醒時白話報 六百枚, 回教の機関

民国新聞 一千枚

哈爾賓

遠東報 二千枚, 露国東清鉄道機関

吉林

吉長日報, 新吉林報

営口

民舌報 五百枚

大連

泰東日報 一千枚, 日本

○奉天兵力

奉天第二十七師長 張作霖, 部下一鎮半

第二十八師長 馮麟閣, 部下一鎮駐新立屯

○奉天政況

奉天の都督張錫鸞は浙江人にして年七十一歳。幕僚に人才無く纔かに財政司長趙臣翼有るのみ。奉天にては省議會を中心として他省人を排斥するの風甚盛なり。現に張都督が外省人たるの故を以て省議會は張作霖（張同に一丁無く馬賊出身にて海城県人なり）を擁して之を排斥しつつ有り。而して省議會は前奉天教育会長にて現任參議院議長たる呉景濂の主宰する所にして、省會は事毎に呉の意見を聴きて事を行ひつつ有り。張都督の幕僚も作霖、麟閣兩人の推薦せし以外は全く勢力無く、且つ本省人に非ざる者は尽く之を放逐するの方針なるが如し。

四月二十四日 雨。午前八時大連着。森、市原、柳原、野村潔已、外一人来迎。森氏の松山台の寓に投ず。春雨如糸、終日日誌を作り熊本発以来の稿を完成す。晡時市原源二郎来訪。是日森夫人女子を分娩す。

四月二十五日 晴。朝市原、柳原来訪。九時森氏を辞し越後町三十五号市原寓に移転す。中島為喜在焉。午前入浴理髪快甚。午後柳原、牛島吉郎来訪。市原と出て柳原經理と泰昌油房を觀る。松寄翠来訪。柳原の寓に至り小談。去て牛島宅を訪ひ、帰途立花政樹を訪ふ、在らず。晚熊本県人の招待に西公園西園亭に赴く。会者柳原、松井哲夫、市原、牛島、岡本等なり。森茂亦来会。十時帰る。牛島貫吾氏来訪。

四月二十六日 陰。午前松寄翠、立花政樹来訪。出て伏見台に至り田岡正樹の病を問ふ。帰途森滄浪に途に遇ふ。其の東道にて電車に乗り小崗子沙河口を経て星ヶ浦に至る。此間約三十分間を要す。沙河口は満鉄の工作場有り汽缶車車輛等を造る。星ヶ浦原名黒石礁一面の海湾島嶼散点遙に大和尚山を望む。風景甚佳。大和ホテル、並に別荘家屋不少、近年外人の此に来て避暑する者漸く多し。星の家に投じ中食す。午後二時帰る。雨に遇ふ。三時半森氏と税関に抵り立花を訪ひ小談、帰る。入浴後森、牛島と西園亭の歓迎会に出席す。会する者森、松寄、飯塚以下同文書院出身を合せ四十余人。十時帰る。

四月二十七日 晴。午前九時二十分森と旅順に赴く。市原、岡本、中村順之助来送。営城子に至り奉天都督張錫鸞の福島関東都督を訪て帰るに遇ふ。福島氏亦た送て此に到る。福島都督、木野村政徳、山縣初男等と同車、十一時前旅順着。内田友義、村上雀蔵、緒方武、鬼頭玉如、太田、富永三平等熊本人十余人来迎。鬼頭の処に至り安村參謀介一を招て会食す。村上町内会長、並に熊本県人有志今夕歓迎会開催の事を告げ余の出席を切望して已まず。事に托して之を辞す。食後安村中佐と鎮守府の馬車

に乗り先つ安村氏に至り小談。去て平岡参謀長貞一、並に鎮守府司令長官坂本中将一を訪ひ暢談。辞して満洲日々新聞分社に至り安村と別れ、森氏と同車王化成を旧旅順天后宮に訪ひ時事を談じ、時を移し四時関東都督福島安正氏を其官邸に訪ひ、転じて白須直を敲き、去て内田友義、緒方武を訪ひ小談。七時白須直の招邀に大和ホテルに趣き、八時半辞別。森氏と別れ安村参謀の処に至り談話、深更に及で寝に就く。

四月二十八日 晴。安村氏に朝食。馬車を同して車站に至り六時大連行の汽車に乗ず。森氏先在焉。安村と握別、七時半大連着、市原の処に帰る。午前森、田岡、牛島来訪。中食を共にす。午後横山吏弓来訪、余の為に撮影す。旅順内田友義に致書す。晚松寄翠の招待に赴く。市原、森、柳原同座たり。十時半帰る。

四月二十九日 晴。午前立花政樹、岡本大八来訪。熊本宅に致書す。是日大連を發し済通丸にて天津に向はんとす。行李を收拾す。午前森、多岡、柳原、松寄、市原、榊原等と会食す。午後五時市原宅を辞し埠頭に至り大連汽船会社の済通丸に上る。森、田岡、松崎、柳原、牛島、市原、中村順之助、宗像金吾、岡本大八等来り送る。六時開船。山本安夫に邂逅す。老虎灘に至り日全く暮る。済通は千二百三噸にして天潮丸と共に大連を起点として安東、芝罘、天津の間を航運する者なり。大連、天津に至る三百四十五哩、大連安東間百五十八哩、大連芝罘間九十哩、大安間十四時間、大芝間九時間、大連大沽間二十時間、大連起点天津に至り大連に帰り芝罘安東大連

四月三十日 晴。午後三時大沽沖に至り碇泊す。夜に入て疾風狂雨、光景凄絶、船体の揺動甚し。終夜海口に錨泊す。

朝鮮の駐屯軍は一個師団半にして満洲も之と同数なり。北清の守備隊は山海関瀋州の鉄道（京奉鉄道）守備に一個大隊、北京に三個中隊、天津に七個中隊なり。一個師団一ヶ年の総経費は二百三十六万円を要し満洲にては四百万円を要す。

#### 参考

北清に於て袁世凱の用を為すべき軍隊は十六鎮にして、南清国民党の用ゆべき兵は兩湖雲貴を除き十二鎮有り。北軍には兵一人に付き彈藥三百二十發の準備有り。袁世凱の股肱は梁士詒、趙秉鈞、段祺瑞等にして、軍警六万五千を擁して袁を推し専制政治を行はんと期する者も此等の輩なり。甘肅西寧に在る升允は年齒五十六、回教徒の大部分之に属し、陝甘兩省に声望有り。蘭州に於ける馬安良（十營を管す）、馬福祥（十二三營を領す）、馬青山（陝西の協統）等之に属す。又た甘肅の固原に在りて馬聖人の称有る馬元璋と相善し。馬の名望陝甘兩省を傾くるの概有り。又た天下の碩学にして清廉高潔を以て聞へたる王樹枏は山西綿県に在り、升、馬と相許し清朝の恢復に志有り、時を以て動かんとす。升、馬一たび動かば西北一隅は一呼して響應せんとす。甘肅九百万の人口中回教徒約四百万を占め、之等は升允兩馬の為に用を為す者なり。又た直隸の馮国璋も王にして起たば之に応ずるに至らん。

大正二年度の歳出予算は、經常四億二千二百余万円、臨時一億六千二百余万円、之に追加予算の六百四十六万円を加ふれば五億九千三百三十八万円に達す。之を本予算とす。之に特別会計の追加予算を合算すれば実に八億九千万円の巨額に上り、之を六千万の人口割当れば一人に付き約十五円の負担となる。大正元年の輸出貿易額は五億二千六百余万円に過ぎず、本予算のみを以て之を比するも歳出の貿易額より超過すること七千余万円。欧米各国の歳出と輸出貿易とを比較するに英国の貿易は歳出の三倍に当り、仏国は一倍半、独逸は三倍、米国は四倍に当り、皆歳出以上の貿易額を有せり。独り伊国は兩者略匹敵し、我国と類似の境遇に在る者は一の露有るのみ。

五月一日 晴天。是日午前十時の満潮にて大沽に入らんとせしも吃水十一呎の船脚に僅かに十呎の水深有り、動くこと能はず。已むを得ず晩潮を待て進まんとす。夜十一時満潮を報ず。即ち船を進む。

五月二日 快晴。前七時塘沽着、上陸車站附近を散歩す。郵船会社出張所、陸軍運輸部、並に小旅館二

戸有り。九時半開船、白河を上る。芦荻蒼々平疇涯無く南村北□残花尚看るに堪へたり。午後四時天津仏租界の棧橋に達す。上車芙蓉館に投ず。直に出て小幡総領事を訪ひ小談。帰途梁啓超を訪ふ、在らず。井阪秀雄、本田佐八来訪。北京亀井陸良に電報を發す。今夕当地在留の同文書院出身者より招待を受けしも所労の為に之を辞す。夜本田佐八、塚崎敬吉、井阪秀雄来訪。

当地在留の邦人約二千人。

五月三日 晴天。午前七時旅館を出て車站に至り、八時北京行の汽車に上る。十一時北京着、実相寺に野満、辻、菊池、岡田、中川等来迎。扶桑館に投ず。岡田と中食を共にす。亀井陸良、宮崎民蔵、水野梅曉、桑田豊蔵等来訪。午後亀井と同車、森少将、伊集院公使、水野、鄭兩書記官、青木少将、小村俊三郎、高尾亨、森脇等を歴訪し、四時帰る。熊本宅、河口、柏原文、山内崑、波多、西本、迫、西田畊一、福岡禄太郎、加藤壮太郎、大井少佐、津村秀雄、佐々干城、吉田中佐、村松岩彦等の信に接す。野満四郎、新橋栄次郎、鄭永邦等来訪。七時旧知の招待に大和倶楽部に赴く。会者水野幸吉、小村俊三郎、高尾亨、亀井陸良、鷺津與四次、神田、辻武雄、桑田豊蔵、山田勝治、実相寺貞彦等なり。十一時散ず。

五月四日 晴天。午前吉田大佐、有吉、市原、西田畊一、西本、波多、柏原、佐原、加藤中佐、増田、高橋謙、森茂に致書す。安東県出發前後より腸を害し今に治癒に至らず。本日朝来頭痛微熱有り。病を強て書信を作る。午後山田勝治来訪、中食を共にす。出て森少将を訪ひ、去て青木少将を敲き暢談帰る。五時扶桑館を出て化石橋の順天時報社に移寓す。七時半青木少将の晚餐に赴く。同座は日野中佐強なり。寛談十一時に至て辞帰。

五月五日 晴天。午前辻武雄、桑田、実相寺、鷺津、亀井、神田等を歴訪し、帰途土井駐屯隊長を敲き帰る。午後二時衆議院の議事を傍聴す。国民党政府の五国借款二億五千万円の違法を攻め表決の結果借款案を否決せり。是日段祺瑞代理総理として軍装にて出席す。國務員席、並に政府委員席共に一人の出席者無し。七時帰る。森少将より明夕の招帖到る。之に復す。

五月六日 晴。午後順治門外南横街普濟医院に宮崎民の病を問ひ、野満四郎〔と〕小談、帰る。四時東単牌樓に至り理髪し、新橋栄次郎、小田切萬寿之助、中根齊等を訪ひ、去て岡田の処に至り入浴、山本安夫と立談。七時半森少将の招宴に赴く。同座は青木少将、松平、水野、高尾、小村の公使館員、亀井、鷺澤、神田、水野、岡田、鄭永昌、同永邦、土井隊長、外一人なり。十一時帰る。風塵迷濛。熊本宅、並に迫良隆に復書す。吉田大佐、並に天津義大洋行本田佐八の信至る。

五月七日 晴。午前野満四郎来訪。海軍、並に上海有吉に致書す。午後出て伊集院公使を訪ひ寛談、去て鄭永昌、工藤少佐を訪ひ、六時帰る。小田切萬寿之助、増井宗俊、辻岡三郎等来訪。田岡、立花、坂田、森井、菊池、佐藤、小谷、中島、白須、松崎、柳原、小濱に致書す。朝鮮林、深水、佐々、葉室、高木末、芥川、大連牛島等に信片を發す。

五月八日 晴。波多、吉田領事、上田賢、伊東俊、三浦泰雄、山下五郎、香月に信片を發す。上海増田中佐に致書す。旅順安村參謀、鬼頭玉如、村上雀蔵に致書す。午後小村俊三郎を訪ひ時事を論じ、日野中佐、林出賢二郎を敲き帰る。公使館より衆議院參議院の長期傍聴券を送り来る。山本安夫より牛肉を送来。

五月九日 晴天。名和第三艦隊司令官に致書す。吉田大佐に司令官宛私信の写を送る。九州日々社に通信す。村松岩彦に復書す。午前日野中佐強来訪。新橋栄次郎来訪。五時海軍官舎に至り森脇を訪ふ、在らず。森少将と暢談帰る。夜野満四郎来談。山内崑、内田友義、波多博の信至る。

大正二年五月起

五月十日 晴天。朝中川芳三郎来訪。朝鮮高橋に山内の手紙を封寄す。内田友義に復書す。午後坂西中佐を訪ひ、去て山本、岡田を扶桑館に敲き小談、帰途青木少将に抵り談時を移て帰る。四時より亀井

と衆議院に至り傍聴し、六時帰る。波多の信至る。村松岩彦に信片を發す。八時北京同学会の招待にて其會館に赴き一場の講話を為し、會長巖谷博士孫藏以下二十余人と談じ、十一時半帰る。風塵面を撲ち向邇す可からず。

五月十一日 晴天。午前狄楚青來訪。上海福岡祿太郎、西田畊一に致書す。晌午武官室に於ける庚子日露兩役殉難者の招魂祭に列席し、三時帰る。晚同文書院出身者の招待に三条胡同大和俱樂部に出席す。中根齋、岡田晋太郎、前同文書院支那語教習忠某亦列席す。書院出身者は川上、岡本、増井、奈良、林出、山田、米内山、村田、外六七人なり。十一時帰る。

五月十二日 陰。正金小田切より案内状至る。森茂、波多の信至る。森に復書し内田友義に致書す。午後岡本理治、中川芳三郎、辻岡、外一人來訪。波多に信片を發す。六時中根齋の晚餐に赴く。同座は亀井、水野幸吉、新橋栄次郎、岡田晋太郎等なり。夜に入て風雨甚暴。十二時席散じ中根宅に宿す。

五月十三日 晴。中根宅にて朝食。査士標の山水を購ひ、出て新橋を訪ひ小談。亀井を訪ひ共に出て李盛鐸を敲き談時を移し、正金に実相寺を訪ひ、一時亀井、桑田と「グランドホテル」に中食して帰る。河口介男の信至る。海軍に第四信を發す。夜野満來談。

五月十四日 晴。午前新橋栄次郎來訪。午後亀井と梁啓超を訪ふ、在らず。中根、新橋を敲き帰る。小村俊三郎來訪。七時半小田切萬寿之助の招宴に正金銀行に赴く。余を主賓とし亀井、新橋、鷺澤、岡田、桑田、山田、上中、辻、神田、井上一葉、中根、以下八九人。小田切、実相寺兩人主人たり。十一時帰る。石原源、白須直、坂田長平の信至る。

五月十五日 晴天。午前辻を訪ひ小談。海軍、名和司令官、増田、有吉に報告を發す。午後公使を訪ふ、在らず。去て水野を訪ふ、又不在。森少將に抵り暢談。岡田を扶桑館に敲き市原の帰るを待て之と少談。七時半亀井陸良の招宴に長春亭に赴く。有賀博士、土井市之進、有柳篤恒、小松少尉、上仲、岡田、山田、市原、桑田等同座たり。市原は本日大連より來着せる者なり。十時半帰る。横山吏弓より大連に於て撮する所の写真を送り来る。横山と波多の信至る。

五月十六日 晴天。午前市原源次郎來訪、留て中食す。上海波多博、奉天横山吏弓に復書す。午後伊集院公使を訪ひ時事を談じ、帰途崇文門内に至り紙、缶詰を購て帰る。辻武雄來訪。

五月十七日 晴。午前野満來訪。午後四時市原源の大連に帰るを前門車站に送る。七時亀井と出て青木少將、工藤少佐を訪ひ、去て伊集院公使の晚餐に赴く。同座は亀井、高尾、小村の三人と公使夫人なり。十一時半辭帰。高橋謙、菊池貞二の信至る。是日漢口の電報に、第六鎮李純の兵を漢口より快利、江陵の二隻にて九江方面に輸送を開始せりと云ふ。蓋し袁世凱が江西の李烈鈞を威嚇せんとする者なり。

五月十八日 陰。北京經科大学卒業生浅井周治來訪。新橋栄、林出賢二郎來訪。海軍、並に有吉、増田に發信す。鮫島三生、辻岡、山田、中川等來訪。晚中川芳三郎の晚餐に其寓に赴く。同坐は鮫島、野満、中川某、岡本理治等なり。十時半野満等と月に歩して帰る。風氣清爽秋令の如し。

五月十九日 晴。朝桑田、辻を訪ふ。午後鮫島來訪。共に參議院に至り傍聴し衆議院に至り、六時野満、辻の東道にて前門外煤市街の致美齋に至り晚食し、歩して前門外の天橋に至り月を賞す。是夜陰曆四月望月に属し、一団の大月天壇の上に懸り夜色人に可なり。回顧すれば二十四年前井手、荒賀、北御門の諸友と月清風涼の夜常に此地に徜徉せり。俯仰今昔、恰も隔世の感有り。九時半帰る。梁啓超來訪せりと云ふ。波多、迫、西本、高木末熊の信至る。

五月二十日 晴。熊本宅、森茂、高木末熊、安村參謀、小早川、白須、中島為、加藤壮太郎、波多、西本、佐々布に致書す。白岩、佐原、菊池貞二に致書す。午後公使館、青木少將を訪ふ。小談、去て工藤大尉を訪ひ帰る。辻來訪。七時半亀井陸良の招宴に前門外大柵欄觀音寺の惠豐堂に赴く。同座は青木少將、寺尾、巖谷兩博士、日野中佐、工藤大尉、山田、辻、小川節等なり。十時散ず。山田勝治と月明に歩して帰る。



五月二十一日 晴天。午前単牌楼に至り理髪し、中根、豊島を訪ふ、在らず。森少将を訪ひ辻武雄を紹介して帰る。鷺澤来訪。午後三時辻と陳宝琛を西城に訪ふ。謹厚の君子人なり。革命以来節を守て動かず。小心翼翼として宣統帝に奉侍し世統と共に清末の双壁と称せらる。談話時を移て帰る。井上一葉、亀井来談。夜冨田巳十、米内山庸夫、古澤憲介、村田等来訪。海軍吉田大佐の信至る。

五月二十二日 晴。前八時半日野中佐の帰国を前門車站に送る。新橋栄、辻鏡太郎来訪。辻来談。是夜新支那社より晚餐の案内有り、事を以て之を辞す。亀井来談。朝鮮葉室の信至る。

五月二十三日 晴。新橋、野満来訪。船津、市原に信片を発す。午後海軍官舎に至り東京より送り来れる金子を受取て帰る。

五月二十四日 晴。八時半鷺澤の帰国を送り、亀井と青木少将を訪ひ小談。去て椿樹胡同に辜鴻銘を訪ひ、公使館に高尾、水野、鄭諸人を敲き、伊集院公使に抵り別を叙し、実相寺の午餐に正金に赴く。亀井同座たり。三時辞して小村、松平、林出を訪ひ叙別、帰途辻に抵り小談、帰る。神田正雄、豊島等来訪。夜報告を起稿して午前三時に至る。青島島田に致書。

五月二十五日 陰。午前浅井来訪。終日報〔告〕を浄写す。午後雷鳴電を雨らす。大指頭の如く地上忽ち白し。頃刻にして歇み一天如拭。報告を写し夜更之を畢る。済南森岡正平に致書す。

五月二十六日 晴。朝亀井、桑田、辻を訪ひ辞別。海軍に政況報告を発す。森少将を訪ひ別を告て帰る。三時半結束。順天時報社諸子に別を告げ亀井と同車前門車站に至り、四時半の汽車に上る。亀井、山田勝治、森脇少佐、中根、新橋、岡田晋、野満、中川、中川、浅井、二木、辻、桑田、神田、村田、実相寺、川上、外四五人来送。七時天津着。本田、水谷、鮫島、塚崎、副島以下五六人来迎。芙蓉館に投ず。入浴後同文書院出身者の招宴に神戸館に赴き一場の講演を為し、午前一時帰る。会者鮫島、塚崎、井坂、藺村以下二十一人。本田来談。

五月二十七日 晴。青島島田、済南森岡、大連市原に致書す。午前小幡領事を訪ひ、去て正金に小貫を訪ひ上海に為替を為す。岡幸七郎、河野久太郎、三浦夫人に信片を発す。鮫島来訪。晚小幡領事の招宴に柴竹林の公館に赴く。同座は茅崙、豊岡、森川、小貫、芝間等なり。九時辞帰。副島、本田来訪。北京居留民八百人、天津二千人。

五月二十八日 晴。是日山東済南に向はんとす。朝本田佐八、豊岡良平来訪。北京政況の報告を森少将、有吉領事に郵致す。九時旅館を出で停車場に赴く。九時四十分の汽車に上る。小幡総領事、副島、高市、本田佐八、水谷、外三人来送。午後一時半滄州、四時德州を過ぎ、五時平原県に至る。顔真卿大守たりし処。斜陽草樹漁陽の往事を追懐し低回久之。六時半黄河の鉄橋を渡る。此辺河幅甚狭く水面百余間に過ぎず。天津より許蒼玉珩と同車す。七時済南府に達す。森岡正平、佐藤、望月、岩城等来迎。上車南門外南新街余公館の森岡の寓に投ず。佐藤、望月送り来る。夜黒田大尉、楠文学士と談じ、深更就寝。

済南日本人合計百四十人、内教習八人、商人十名。余は婦人及び浮浪の徒なり。

独逸人の其居留地に在る者七八十人。

済南の兵力は第五師、並に巡防隊、都督衛兵を合せ約一万五千人。

山東嶧県を距る三十清里棗莊の中興煤礦は五百万円の合資会社にして、光緒二十四年初て土法を以て開掘し、宣統元年新法に改め独逸の技師一人を聘し工夫二千人を使役し一日一千噸を出せり。此の石炭は津浦鉄道に供給しつつあり。正經理は張蓮芬、副經理は許珩なり。株主中には独人デッドリング、張燕謀等有り。

五月二十九日 晴。午前森岡の東道にて上車歴山門を出で歴山に上る。一名千仏山と謂ひ寺觀甚多く、崖上仏像を刻する其数を知らず。頂上一望済南の府治襟帶の下に在り。城北兀立する一山を月山と稱し、其の左方に在る小山を華山と謂ふ。歴山は帝舜躬耕の処、府治第一の勝概なり。

済南府人口十五万人

午後森岡，黒田，佐藤，望月，岩城諸氏の東道にて上車坤順門を出て大明湖に至り画舫に乗ず。芦荻満望水路其間に通じ湖水の大観無し。歴下亭に至り船を停め小憩，更に船を旋して李鴻章，張曜の祠に至り，水門（北門）を一見して原乗の地に帰り上車，城内を過ぎ南門外の跑突泉を観る。一泓清池の中心に方て清水三ヶ処より噴出し沸々声有り。此泉は大明湖，歴山と共に地方の名勝なり。四時寓に帰る。晚森岡，黒田両氏主と為り佐藤，望月，岩城の三子と余の為に宴を設く。九時散ず。

五月三十日 晴。午前五時起床，結束し六時上車済南府西車站に至り膠済鉄道に乗す。車賃青島に至る十五元八角。七時開車，森岡正平，黒田大尉，佐藤，望月，岩城来送。十一時二十分青州着，午後一時維県を過ぐ。線路の左方に当て両城有り。二十六年前曾游の処なり。有詩。

過維県書感

遠林如帶山如鬢，一路薰風客意間，  
追憶昔游何所得，卅年萍跡鬢毛斑。

又

倦鳥歸林人未還，何時海上賦刀環，  
眼前風物那邊好，斜日兩分齊魯山。

昨日歴山訪帝舜之遺迹所得

南風薰罷世情間，弔古荒煙白草間，  
百代興亡真若夢，翠鬢無恙舜時山。

廿八日過平原県有感于顔魯公之事

燕南風物入麦秋，林落蒼茫感昔游，平原城郭千載古，斜陽草樹淚空流，  
憶昔漁陽声鼓動，大河以北皆倒矛，君家兄弟投袂起，七十余郡誓同仇，  
正氣千秋壯河嶽，忠烈万古罕匹儔，再造莫言李郭力，微公之故百事休，  
即今海内乱如麻，六龍潜影蒼生憂，名教亡兮綱常廢，妖雲漠々蔽九州，  
君不見沐猴衣冠列台閣，封疆小兒擬王侯，又不見朔方胡騎動地至，  
咄嗟直欲蹴北阪，誰掃胡氛安辺境，誰誅無道復皇猷，我行適過平原駅，  
觸景懷古幾回頭，長歌賦罷剪倚窓望，茫々中原夕陽浮。

済南より維県に至るの間，小丘所在に起伏し麦田相連る。河水皆涸れ淄河一水僅に小舟を通ずるのみ。維県以東丈嶺一帯地勢平坦にして麦浪天に連る。四時半膠州を過ぐ。線路の右側に在り。藍村を過ぐれば右に膠州海湾を望み，左に勞山の乱峯鋸齒の如きを見る。海風面を吹て涼味人を蘇せしむ。滄口を過ぎ六時半青島に達す。島田儀市，佐野恭，土井米市，内田来迎。島田等の東道にて旅館村田に投ず。晚佐野，内田，土井等余の為に宴を賓海樓に設く。九時半帰る。波多，西本の信達す。汪甘卿特に来て余を此に待てりと云ふ。

青島日本人二百人。

独逸人千六百人，兵四千人。

五月三十一日 晴。理髮。午前佐野，汪甘卿来訪。午後大阪朝日特派員井出勝治来訪。内田，島田来訪。島田儀市の東道にて三井に至り井手千次，百瀬信好，山本中尉等と談じ，去て島田宅に至り小坐。馬車にて青島政庁の前より植物園に至り徜徉す。百樹叢生蔚然密林を成す。日本の桜樹千余株有り。花時の景致思ふ可し。此地は明治三十年十二月独逸の占領に帰してより辛苦経営，寥落たる一漁村化して高樓鱗次の都会と為り，坦々たる大道四通八達し，当年の赭山は変じて樹木蒼翠の佳山と為り，礪确不毛の赤地は化して沃壤膏土と為り，人事天功を奪ふの感有り。植林園を過て築港を観る。大埠頭三条有り。両側一万噸以上の船各三四隻を繋ぐべく中央に軌条を布き貨車の運転に便し，軌条に沿て倉庫を設置せり。此の附近に大船渠の設け有り，設備至て完全せり。海水浴場も二ヶ所有り。

青島全市を一周し、五時帰る。六時島田宅の晩食に赴く。山本中尉同座たり。七時辞帰。八時恭親王より送られし馬車にて汪甘卿と共に王府に赴く。恭王出迎握手、礼意甚だ恭し。劉廷琛幼雲、汪甘卿、顧某、及王の家人某陪坐す。王と時事を談じ十時帰る。恭王本年三十余歳、気魄不凡識見過人、袁世凱の誤国を憤り宗社の回復を以て己れの任と為す。親貴中第一の傑物なり。平原県顔真卿を思ふの長篇を王に贈て帰る。

#### 青島

青島の総人口約三万人中独逸千六百、軍隊四千、日本人二百、他の外国人百余人。

産物は牛皮、棉花、落花生、草蓼真田等なり。

輸出額約一年三千万、輸入四千万。日本品の輸入貿易額の七割を占めたり。而して我輸入品の重要な者は綿糸、雜貨、撫順炭等なり（日本人の直接輸入のもの二割）。独清大学は現学生三百九十人にて医科、器械工学、法律、国家学、農芸の諸科に分れ教師人を得て成績良好なり。是れ独逸思想を注入する上に於て最有力の機関なり。

青島には目下建築盛に起り、支那大官巨室の土地を購ひ永住の計を為す者多し。現に此の地に在る旧大官の重なる者左の如し、恭親王、軍機吳郁生、两江督張人駿、兵部尚書呂海寰、郵部侍郎于式枚、大学堂総弁劉廷琛、山東巡撫余則達、两江督周馥、東三省督趙爾巽、李家駒、周学熙、雲貴督李經邁、李經義、李德順（李蓮英の甥にして前津浦線北段総弁なり。官金数百万を私して此地に利殖せり）、洪述祖、軍機徐世昌、胡建樞（前山東巡撫）、朱鎮琪（前奉天布政使）、蕭應椿（前奉天勸業道）、徐世光（東海關道）。

六月一日 晴。是日青島を辞し再び済南に帰らんとす。早起行李を收拾し、八時村田旅館を出で八時半の汽車に上る。島田、佐野、内田、土井、米市来送。大汚河駅にて貴族院議員一行の汽車と遇ふ。三時張店を過ぐ。博山支線の分岐点にして二時間にて達す。午後六時済南西站着。森岡、佐藤、望月来迎。上車森岡の寓に投ず。夜黒田大尉周一、森岡、佐藤と会食す。済南青島間二百五十六哩。

六月二日 微雨。是日森岡、黒田両氏と泰安に至り登嶽を試んとす。雨を以て止む。

#### 済南府

人口十五万。軍隊は第五鎮と巡防隊、並に都督の衛兵を加へ約一万五千人、師団長は靳雲鵬なり。

新聞は山東日報（都督の機関）、大東日報（共和党）、岱宗報（共和）、齊魯民報（国民党）の四大社を除き、齊民報以下二三の小報と山東公報有り。

独文学館は青島政庁の補助有り。学生常に満員にて約百五十名なり。

済南府は全く袁世凱勢力の範圍に在り。国民党の勢不振なり。

#### 青島拾遺

独逸が明治三十年青島占領以来經營に費せし金額は經常臨時共に一億六千万馬克。毎年の政費約千六百万円、国庫より約半額の補助有るも十年後には經濟の獨立を得べし。

独清大学創立費は独より十八万円、支那より二万円を出し經常費は独逸より毎年三万八千円、支那より二万円つつ十ヶ年補助の約有り。

#### 独逸の山東經營一斑

独逸は青島を以て山東經營の根拠地と為し、済南を第二の立脚地として黄河流域の要部と河南、直隸、並に江蘇北部に向て大に手足を伸さんとする。

現に独人の經營せる炭坑は坊子の炭田に二千三百余人の工夫を使役せると博山の炭坑に三千八十二人を使役せり。坊子は炭質不良、博山炭の売上高は一ヶ年四十万噸にして皆欠損なり。

金嶺鎮の鉄坑は長六哩、幅二哩、深五百呎にして東洋稀有の鉄坑と称す。未だ開掘に至らず。

曾て北京に在るの日王樹枏の武漢戦紀を読む。其中他日の備考と為るべき者を摘録すれば左の如し。

武昌革命の首唱者は張振武、孫武、楊鴻勝等を第一とし、熊丙坤、方維、蔡濟民、王光国、鄧玉麟

等工程隊を提て先づ事を起し、振武、済民等黎元洪を擁して大都督と為し、張振武之れが総參謀と為り、新旧の軍隊を收拾して四協と為し、第一協統に呉北麟、第二協統に何錫藩、第三協統に楊開甲、第四協統に杜錫鈞を挙げ部処を定めたり。後に至り黃興來り湘人数千人を募て之と合せり。

初め革命軍の起るや、黎元洪は四川人朱芾煌をして袁世凱を彰德府に説かしむ。袁の子克定之と会見す。朱二事を以て要求する所有り。曰く、一は攝政王を廢すること、一は馮国章の兵柄を撤すること、如此にして事成るの後に大總統を以て之を奉ぜんと。袁の意甫て決し革命の局成る。

六月三日 晴。午前森岡氏と上車普利門を出で商埠の大文洋行に至り佐藤を訪ひ、共に公園に遊び物産陳列館を觀、大文に帰て中食し四時帰寓、入浴晚餐。六時黒田周一、森岡正平二氏と津浦車站に至り、七時半の汽車にて泰安府に向ふ。佐藤、望月、岩城來送。九時半泰安着、小車に乘じ西関外の湯淺洋行出張所に投ず。夜店内喧雜不成眠。

六月四日 陰。是日泰山に登らんとす。午前六時半山轎に乘じて發し、嶽麓の小店に投じ朝食し、石磴を登て一天門を入り壺天閣を過ぐ。道の両側老柏蔚然静寂太古の如し。廻馬岑門を出れば山廻り道輒じ險阻愈よ加はれり。中天門に至り茶を啜る。道の左側唐槐一株有り。老幹奇古甚だ珍とすべし。十時五大夫松に至る。秦皇避雨の処老松三株有り。高二三間此辺両側の斷崖古今人の題字甚だ多し。左方の右上七十二君封禪輦道の八字を刻す。仰で南天門を望めば磴道一線遙かに之に通じ天上に登るの感有り。十一時半頂上に達し碧霞祠、東嶽廟を觀て最高峯に上る。孔子小天下処、並に巍々蕩々、雄峙天東の三碑有り。多くは明末の建る所。頂上の最も高き処に乾隆帝の詩碑有り。極月四望東北万山怒濤の如く、大小の河流蜿蜒として其間を流る。西南は概ね開豁し蒼茫として際涯無し。正南パン河を隔て徂徠山を望む。天下の壯觀此の右に出る者無し。天風衣を吹き細雨時に至り時に止む。去て無字碑を觀る。高三間幅五尺許、古色蒼然秦皇の建る所、或は曰、漢の武帝之を建つと。孰れか真なるを知らず。大名張銓の詩碑有り、左の七絶を刻す。

奔盞天風万里吹、玉函金櫃至今疑、袖携五色如椽筆、來補秦王無字碑。

南天門に下り中食す。山上産する所の草葉を油炸せるもの味殊に美。午後一時半轎に乘じて山を下る。乱峯飛嶽左右に起伏し、雲煙起滅虚に歩して降るが如し。午後二時五大夫松に至る。泰山の絶景は大夫松下の朱欄橋より南天門に至るの間に在り。此間の山腹老松林を成す。相伝て漢武の植る所と為す。四時半泰安府西関の湯淺洋行帳房に至り晩食す。山轎一台僅に二円左右に過ぎず。食後北門外の玉皇閣に至り孫真人の木乃伊を見る。二百年前の物。北門を入り岱廟を一覽す。規模甚大。七時宿処に帰る。夜半雷雨。泰山海拔千二百尺（二百間）、石磴六千七百級有り。

六月五日 雨。午前十時湯淺店を出で車站に至り十時十八分の汽車にて曲阜に向ふ。大汶口を過ぎ南方一帯の山脈故山に酷似せるを望む。一路平坦麦隴相連る。午後一時曲阜着。馬車を賃して曲阜県城に向ふ途上泗水を渡る。幅四十間許水清ふして深からず。十八里北門外の聖林に達す。門を入れば老柏道を挟み蔚々として山中に在るが如し。洙水橋を渡る。橋側孔子手植の檜有り。洙水幅三間許。宿水汚濁乱草水面に蔓蕪し一溝の汚水たるに過ぎず。亨殿を入れば右に楷亭有り、子貢手植の楷有り。古幹を存するのみ。進で孔子の墓に謁す。一堆の土塚雜草之を掩ひ牧童樵夫其上を往来す。墓前碑有り、題して大成至聖文宣王墓と曰ふ。墓前に子貢廬墓処の碑碣有り。即ち孔子卒後子貢三年此に廬せし処なり。小屋を設けて其址を紀念せり。孔墓と相並で泗水侯の墓有り。述聖子思の墓は其前に在り。聖林一に孔林と云ふ。規模宏大なりと雖も荒涼廢頽見るに堪へず。此の靈地に対し心誠に崇敬の忱を表する者無し。以て人心の変を卜す可きなり。聖林を出で曲阜県城の北門を入り顔回の廟を見る。門上復聖殿の三字を題す、規模頗大。陋巷故址の碑有り。其傍陋巷井を保存す。殿中には顔子の像を安置せり。虎皮松一株有り。

白幹緑葉蓋千余年の物なり。廟前の順興店に投じ中食し、小休の後小車に乘じ大成殿を觀る。嚴として一城廓の如し。本殿の正面大理石彫龍の大柱十二本有り。殿宇高八十七尺、幅百尺許、孔子の神像



有り、其左右に十哲、並に孟子、朱子の像を配す。殿中万世師表、斯文在茲、生民未有等の匾額柱聯を掲ぐ。多くは康熙乾隆以下帝王の捧げし所なり。正門内碑碣林立、多くは名君賢相の建る所。宋以後の物最も多し。大成殿の隣右に聖府有り。孔子七十二代の孫衍聖公の居る処。此辺一帯を闕里と称す。曲阜県城内荒涼落寞を極め民俗狡詐毫も遺徳流風の見るべき者無し。斯道の煙没浩嘆に禁へず。私かに疑ふ、本国に於て道の行はれざる古も猶今の如く、孔子の道は徒らに文字口舌の間に伝統して今日に至りしに非ざる乎。心誠に斯道を崇奉して己れを修め、以て治国平天下に推及せし者は蓋し甚だ罕なり。

六月六日 晴。朝再び顔廟に至り陋巷の故址を觀、午前七時馬車を賃し順興店を出で兗州府に向ふ。此を距る三十里闕里門を過ぎ城の南門を出づ。県城平野に位置し西北遙に小山を起伏するを見るのみ。午前十時泗水を度て兗州東門外車站附近の通遠達客店に投ず。直に張勳に東して会見を求む。使者帰り報じて曰く、此間袁總統の命を奉じ何人と雖も会せずと云ふ。蓋し曩きに黃興の使者張の処に来てより務て嫌疑を避くるに汲々たると。一には徐宝山暗殺以来自ら警戒して人に接せずと云ふ。

兗州に於ける張勳の兵力は左の如し

歩兵六營、騎兵二營、砲兵八營（内二營機關銃□）。一營は五百人にして兵營は北門内に在り。隊号を武衛前軍と号す。

是日津浦鉄道にて南下せんとす。夜に入て雨。十二時兗州の通遠達客店を出で車站に至る。午前一時の汽車に上る。黒田、森岡両氏と南北に分手す。両子は済南に帰る者也。

雨甚しく衣袂皆沾ふ。

六月七日 陰。午前六時徐州着。城は車站の西に在り。形勢雄大、江北の重鎮なり。九時南宿州を過ぐ。地勢平坦麦田弥望山を見ず。十一時半淮河を度る。船舶多く此に泊す。水量亦大。十一時半蚌埠、十二時臨淮関を経て小溪河を過ぐれば、地勢一変□□を為し水田漸く多し。四時四五分浦鎮を過ぎ津浦終点の浦口に達し直に渡船に乗ず。乗客雑踏上下の別無く炎氣如燬。五時半下関着。馬車を賃し鼓樓西の領事館に投ず。浴後船津氏と晚餐し樓台に上て涼を納る。快殊に甚し。

六月八日 陰。打田正六來訪。午前船津と馬車鶏鳴寺に至る。眼下に玄武湖を望み紫幕府富貴の諸山一望の中に在り。帰途道を転じて貢院前に至り秦淮を見る。幅十余間。画舫甚多し。午後帰て中食す。五時船津氏と瀛華俱樂部を見る。日本支那両国人の設くる所。昨日始て発会式を举行せる者なり。現に会員約八十人有りと云ふ。現に南京在留の邦人約二百三十人有り。都督程德全の參謀は民政長広徳閔にして、大小の事多く此人の方寸より出づと云ふ。是夜上海に帰るの予定なりしも風雨の爲め明日に延期せり。夜領事館員一同と会食す。過日泰山と孔子墓書感の詩二首左に録す。

登泰山觀無字碑

雲梯攀登万仞頂、魯山齊水望離披、秦皇遺跡何辺是、風雨千年無字碑。

曲阜展孔子墓

曲阜訪靈域、林末夕陽平、洙泗游且濁、聖源悲不清、荒草蔓墓上、牧童其上行、周道煙滅久、斯文存空名、流風与遺徳、何處覓光明、聖人真聖乎、伝道或不誠、大疑横胸臆、難禁古今情、墓門低徊去、聖林晚鴉鳴。

○南京の兵力

第八師 師長陳之驥、日本士官校出身、馮国璋女婿、參謀長袁華選

歩兵三ヶ聯隊約三千人、砲兵一ヶ聯隊八百、工兵一ヶ大隊四百、騎兵一ヶ聯隊三百

第八師中より湖南に派遣せる者左の如し。

歩兵一ヶ聯隊、砲兵一ヶ中隊、機關銃隊一ヶ中隊、騎兵一ヶ中隊

第一師 師長章梓、第一師兵数約六千、福字營 營官劉福彪

六月九日 晴天。午前船津氏と連名にて旧知二十余人に信片を發す。中食後領事館を辞し馬車船津氏と

共に下関に至り、午後一時の汽車にて上海に向ふ。船津来送。三時鎮江、六時蘇州を過ぎ七時四十分上海着。佐原、波多、西本、井手、川口、加来、小笠原、島田、増田、秋元来迎。波多の処に晩食し東和洋行に投ず。姚文藻、波多来訪。秋元勢蔵、澤村秀雄、東洋協会、遠山一治、上妻博路、成泰静雄、石丸素一、田鍋安之助、海軍々令部臨時費送金通知書、並に上妻母堂、辛島格、佐々木利助の訃音に接す。

六月十日 晴。午前波多、井手、香月、齋藤少佐来訪。午後内人、海軍に帰着を報ず。松寄来訪。二時出て理髪し、増田、秋元を訪ひ、去て有吉を敲き、帰途井手、島田、佐原を訪ひ帰る。海軍より七、八、九、三ヶ月分手当、並に臨時費を送り来る。夜佐々布、松寄、佐原来訪。

六月十一日 晴。海軍に手当の領収証を發す。上妻兄弟、辛島知己、佐々木利助に弔詞を發す。上妻は其母堂死去、辛島は其父格君の逝去せるを以てなり。東洋協会に元年十一月より二年五月に至る七ヶ月分の会費を送る。帰途西田、齋藤を訪ひ帰る。午後齋藤徳次、門田正経の紹介にて来訪。岡来談。加藤中佐の信至る。晩佐原の晩餐に赴く。波多、長尾、西本、松寄同座たり。十時帰る。

六月十二日 晴。岡幸七郎、茅原華山の信至る。午前堤嘉三、勝木恒喜来訪。白岩、伊集院に致書す。船津辰一郎、吉田大佐に致書す。午後増田高頼、岡田有民来訪。夜岡本武平、平岡小太郎来訪。

六月十三日 微雨。北京亀井陸良に致書す。午後深水十八、齋藤徳次来訪。三時増田を訪ひ海軍に電報を發す。勝木、深水、増田と談じ、六時帰る。是日午前香月を訪ひ小談。去て孫逸仙を訪ひ時事を談じ、転じて姚文藻を訪ふ。河口虎夫の信至る。夜川口市之助、学生某を伴ひ来訪。

六月十四日 陰冷。柴田乙次郎、井野某来訪。齋藤徳次の為に漢口岡、角田、長安に紹介す。午後香月来訪。共に出て弓術を見る。七時根津一の歓迎会に俱〔楽〕部に出席、九時帰る。根津一來訪。

六月十五日 微雨。海軍に報告を發し、別に清子、虎夫に致書す。山東森岡、黒田に札状を發す。森岡の信至る。午後増田、西本来訪。鳥居に泰山の石刻二枚を送る。夜加来、小笠原、宮田、同文書院生徒来訪。

六月十六日 晴。伊集院公使、実相寺貞彦に致書す。九州日々社に通信を發す。午後秋元少佐、平賀大佐来訪。

袁世凱は李烈鈞の免官に引続き、十四日を以て広都督胡漢民を西藏鎮撫使に任命し、胡の後任は護軍使陳炯明を以て之に充てたり。是れ袁が国民党に対する第二の圧迫なり。夜同文書院熊本學生三名来訪。

六月十七日 雨。八時平賀大佐を豊陽館に訪ひ其帰国を送り、増田、秋元、齋藤と談じ共〔に〕寺尾博士を訪ひ帰る。午後清藤、並に角力協会の若島、海山等来訪。吉田大佐に致書す。波多来訪。姚文藻の信至る。姚の子息の為に寧波大瀧八郎に致書す。夜佐原来訪。

六月十八日 陰天。上妻兄弟の信至る。井野春隆、佐々布来訪。午前九時同文書院に至り支那の政況に就き二時間に亘る講話を為し、根津一氏と中食し、終て安河内等と談じ帰る。佐原を訪ふ、在らず。篠寄、井手、島田を訪ひ、六時帰る。夜佐々布来訪。

六月十九日 晴。午後西田畊一來訪。夜香月、高島醇来談。上妻兄弟の信至る。

六月二十日 陰。午前増田を訪ひ、去て宮崎、何天炯、寺尾博士等と談じ、帰途佐原の処に中食して帰る。根津の信至る。

六月二十一日 晴。午前吉田親一、勝木恒喜来訪。吉田を留め中食す。加来来訪。根津に復書す。午後増田中佐来訪。同文書院より二十九日卒業式の案内状至る。香月、加来の為に宣紙数枚に近作の詩を書す。七時熊本県人会に倶楽部に出席す。四十余人来会。十時散ず。雨。同文書院卒業生は岩木、檜木野兩人たり。済南黒田大尉周一の信至る。

六月二十二日 陰。午前理髪、光永眠雷を訪ふ。西郷南洲翁の肖像を贈る。十一年の歳月を費して作製せる者なり。現に荒尾精の肖像を画きつつ有るを以て之に助言を与へ、帰途増田、秋元と小談、帰

る。午後大倉洋行と香月を訪ひ、転じて波多を敲き帰る。内人の信至る。夜波多、西本、加来、佐々布来訪。無芸会に新六三に出席。石井、村井、西田、秦、山田、前島、神津等同座たり。十一時散ず。微雨。

六月二十三日微雨。留守宅に致書、金三百円を郵送す。午前有吉、増田を訪ひ、佐原宅に中食して帰る。松寄来訪。長沙村山の信至る。七時増田の招宴に杏花楼に赴く。同座は佐原、秋元、並に軍令部森少佐、淀艦長保坂中佐、千早艦長白石中佐、小杉等なり。九時散ず。伊集院中佐俊、田中清司、鳥居素川の信至る。

六月二十四日 晴。清藤幸、森少佐の帰国を送る。迫良高に復書す。姚文藻、汪甘卿、勝木来訪。大瀧八郎、吉田大佐の信至る。午後松寄来訪。海軍に致書す。二時森少佐、清藤の帰国を送る。西本、波多、篠崎、堤来訪。夜八時より日本人倶楽部に至り実業協会の為に支那の政況に付き二時間の講演を為し、十一時帰る。

六月二十五日 晴。午前上海日報に至り海軍よりの為替受取を托し、去て増田、秋元を訪ひ十二時帰る。西本、松寄来訪。是日本月分経費を領事館より受取る。午後北京水野幸吉に致書す。夜根津の招宴に杏花楼に赴く。同座は有吉、金万、村上、増田、秋元、篠崎、安河内、佐原等なり。九時半帰る。

六月二十六日 晴。午後増田、松寄来訪。領事館に至り、去て上海日報に井手を訪ひ、共に出て光永眠雷に抵り荒尾の肖像を修正して帰る。成泰、迫の信至る。

六月二十七日 積陰。有留、実相寺の信至る。露国上田仙太郎、青島島田儀市に致書す。

午前佐原を訪ふ。正午湖南紳士葉德輝、並に浙人金蓉鏡を六三園に招飲す。長尾、佐原、平岡、衾崎、高□を合せ主客八人なり。三時散ず。岩本某来訪。夜風雨。秋元を訪ひ、去て春日丸に松寄の帰国を送て帰る。

一昨夜漢口に於て謀叛の嫌疑を以て国民党員二十人を捕へて之を斬れり。武昌の四ヶ所に火起り物情恟々たりと云ふ。

六月二十八日 晴。午前吉田親一、勝木恒喜来訪。午後香月、並に熊本出身同文書院学生三名来訪。一人は修学旅行の為め湖南に赴くを以て岡本武三、成松静雄に添書を与ふ。夜川口市之助、吉田武平来訪。

六月二十九日 微雨。日曜日。午前深水十八来訪。午後増田を豊陽館に訪ひ、同車同文書院の卒業式に列す。六時帰る。

国民党は武昌にて事を挙げんとして発覚し其の五十余人斬殺され、武昌にて百五十余人の死傷有り。首魁詹大悲、蔡濟民、李雨森等は身を以て免かれたり。又た仙桃鎮の三十一団は已に事を挙げ、河南の賊白狼と聯絡し武穴、田家鎮、黄州と声氣を通じ活動を開始せんとす。白狼は已に京漢線の一部を破壊せりと云ふ。

李烈鈞は江西の俞応麓の留任を勧め全省を結束して北軍に当るの決心を取れり。

六月三十日 晴。海軍に発信す。午後郵便局、上海日報に至り、転じて豊陽館に深水、勝木、吉田等と談じ、五時帰る。増田高頼、波多博、堤等来訪。波多に本月分社宅料、並に諸雜費五十五元を渡す。

日本より外国へ輸出の大宗は生絲にて一億二千八百万円、輸入品の大宗は棉花の一万四千六百万円を首とし、鉄類の四千七百万円、米の千七百万円、豆の千百万円。

輸出入約九億万円にて輸入超過一億二千七百万円に上れり。

従来輸入品中多額を占めたりし沙糖は台湾占領以来全く之を駆逐して却海外に輸出するに至れり。将来朝鮮に於ける棉花の成績良好なるに於ては輸入超過を防止して国富を増進するを得し。米の如き豆の如きも久しからずして朝鮮、満洲の産を以て其の不足を補ふて余有るべきなり。外債二十億の利子毎年約七千万円。之を入超に合すれば二億万以上の正貨は毎年海外に流出せり。

上海の貿易総額輸出入一年二億六七千万円。

七月一日 晴天。午前八時根津の帰国を送らんとして及ばず。十時孫文を訪ふ、在らず。去て香月を訪ひ正午帰る。姚文藻来訪。午後増田を訪ひ佐原等と談じ、五時帰る。安河内来訪、留て晩食す。波多来談。河野通器の信、並に井手、松倉、瀬上等の信片至る。

安徽都督柏文蔚、陝甘籌邊使に転任を命ぜらる。

七月二日 晴。北京実相寺貞彦、九江有留重利、村山正隆に復書す。小幡天津領事、中根斉、山田勝治、辻、野満、中川、本田、佐藤、村田、下平、二木、辻岡、望月、岩城等に致書す。佐原、波多来訪。安村中佐、松崎雀男の信至る。夜佐原を訪ふ、在らず。波多に抵る。佐原在焉。十時帰る。

七月三日 晴天。報告を作る。勝木来訪。午後報告を發す。上海日報と増田を訪ひ、理髪して帰る。内人の信至る。岡幸七の信片至る。夜川口市之助来訪。熱甚九十七八度に上れり。

七月四日 雨。中久喜信周の信至る。長崎山崎武洪に致書す。終日報告を作る。午後波多に抵り浄写を托し、佐原を訪ひ帰る。山田純来訪せりと云ふ。増田中佐、齋藤少佐来訪。

七月五日 陰。海軍に報告を發し、安村介一に復書す。秋元を訪ひ転じて姚文藻を敲き、正午帰る。松崎雀雄の信至る。檜木野、勝木来訪。夜海軍宮田某来訪。熊本島崎の人なり。

七月六日 雨。午後波多、佐原を訪ひ、去て増田、秋元を敲き帰る。迎英輔、佐々布来訪。夜島田、西本来談。

是日北洋第四師の兵三營許運送船にて来着す。袁世凱が上海国民党幹部に対する威嚇なり。又た湖北に在る第六鎮の一部を九江の上游二哩の処に送り江西を威脅せしとする者の如し。

夜佐々布来訪。

七月七日 晴。吉田大佐に發信す。佐原来訪。午後深水を訪ひ小談。名和司令官の帰着を聞き之を訪ひ、六時帰る。

李烈鈞本日九江に向て上海を發し、九江侵入の北軍と戦を交へんとす。

佐原より菓子を贈り来る。夜姚文藻来訪。佐原来談。

七月八日 晴。午前香月、秦を訪ふ。午後佐原を訪ふ。清藤の信至る。是夜有吉より六三に招宴、辞して行かず。

七月九日 陰。午前有留重利、副島綱雄来訪。御幡夫人、小森正鋭の信至る。夜今井を訪ひ、九時帰る。佐原来訪。

七月十日 陰。吉田親一來訪。熊本宅、吉田大佐に致書す。午後上海日報、増田を訪ひ齋藤等と寛談。平原文三郎来訪、南洋に赴く者なり。沖繩宮崎盛の信至る。六時川口市之助、今井邦三の招邀にハレスホテルに赴き、晩食後三人張園に至り天勝の奇術を觀、十二時帰る。

李烈鈞昨日湖口を占領し南昌德安より九江の北軍を攻撃せんとすとの情報有り。

七月十一日 陰。午前大河平隆則来訪、長沙に赴任する者なり。午後末永と小談。一時半の船にて軍艦対馬に名和司令官を訪ひ、三輪艦長、四竈參謀等と会談し晩食の饗を受け七時半辞帰。松岡玄雄、平原文三郎の信至る。夜齋藤俊来訪。佐原来談。

七月十二日 晴。午前香月、齋藤少佐来訪。

李烈鈞湖口県を占領し、歐陽武南昌より之に応じ九江の北軍を龍開河以西に駆逐せりと云ふ。

午後秋元、大河平、岡田を訪て帰る。勝木、姚文藻来訪。夜秦長三郎来訪。

七月十三日 晴、熱甚。午前副島来訪。出て佐原を訪ふ。午後香月、佐原、増田来訪。海軍より本年度第二回分機密費二百円を送り来る。夜佐原を訪ふ。遠藤麟太郎旅行より帰来。

昨日午後四時九江城外五哩の十里舖に於て第六師一個旅団の北軍と南軍德安支隊林虎の兵と開戦し、李烈鈞は同日湖口に於て討袁軍の組織を布告せり。

七月十四日 晴。大河平領事、勝木、波多来訪。海軍に報告を發す。軍令部副官に臨時費の領収証を送る。加藤中佐に政況報告の原稿を郵寄す。漢口有働政喜、岡幸七郎の信至る。午後佐原、西本、吉



田、井手来訪。小谷節夫の信至る。熊本宅、九州日々、亀井に致書。夜井手を訪ひ金四百円を熊本に送る。郵便局、増田を訪ひ、去て井手を訪ふ、在らず。佐原に抵り十時帰る。吉田親一來訪。

上海の国民党幹部は愈よ主戦に決議し、先づ南京の第八、第一師を基礎として北方に対抗の計画を定め近日之を實行せんとす。

七月十五日 晴。午前七時春日丸に井手友喜、香月夫人を送る。井手金四百を熊本に托送す。軍令部に発信す。大倉の船で涯山埠頭に至り河野久太郎を八幡丸に迎ふ。齋藤少佐来訪。白岩龍平の信至る。

昨午後黄興南京に赴き軍隊を統一し直に討袁軍を組織し其主旨を發表せりと云ふ。

午後名和中将、三輪大佐、四竈参謀、勝木来訪。吉田来訪。川口、香月来訪、晩食を共にし新公園附近の角力場に至り京阪合併の角力を観る。横綱太刀山の土俵入頗る見事なり。十時香月と帰る岳陽丸に大河平の長沙行を送て帰る。

七月十六日 晴。午前理髮、増田を訪ふ。午後姚文藻、佐原を歴訪す。六時副島、町田武次郎、前島次郎、齋藤少佐来訪。夜雨。

黄興南京に入り都督程德全を擁して江蘇の独立を宣言せしめ、程の名を以て討袁軍を組織して黄興を総司令官に任命せり。第一師長、並に要塞司令官は黄興等の為に殺害せられたり。

七月十七日 雨。波多、勝木来訪。夜佐々布、波多、秦来訪。

七月十八日 晴雨無定。午前平岡、副島来訪。午後佐原来談。二時増田を訪ひ、波多と同文書院に至り福岡、土屋を訪ひ小談。土屋と出て機器局に到り新着北軍の状況を視察す。昨日松江の兵一千龍華に着し上海は独立を宣言し、李平書本日機器局に至り北軍に降を勧むれども可かず。滬軍都督に再任せし陳其美は呉淞砲台に令し北来の軍艦運船を砲撃せしむ。本日午後呉淞にて駆逐艦を砲撃し五名を殺傷せりと云ふ。夜河野、佐原来訪。

七月十九日 雨。海軍に発信す。長崎山口武洪の信至る。夜佐原を訪ふ。

七月二十日 陰。波多、吉田来訪。海軍に致書す。午後五時河野宅の旧雨会に出席す。光永眠雷筆荒尾精の肖像を潤色して之を完成せしむ。終て会食す。同座は香月、光永、秦、土井、澤本、深水等なり。香月と留談。風雨甚暴。十二時帰る。神尾茂土宜を携へ来訪せりと云ふ。

七月二十一日 雨。午前河野来訪。支那革命紀念の黄白金混成の鈕一對、並に狐囊を贈る。午後増田、佐原を訪ふ。長沙成泰の信至る。夜賀来来訪。八時半機器局方面、方て遙に銃声を聴く。直に結束、堤、加来と車を駆て斜橋に至る。機器局無事。柳堤明月に歩し十時帰る。

七月二十二日 晴。美濃部生の信至る。午前副島来訪。夜大倉に今井、賀来と談し九時帰る。佐原来訪。

七月二十三日 晴。午前三時叛軍機器局を攻む。海軍中将鄭汝成の統督する北方より来れる二千の守備兵は之に応戦せり。午前四時結束して、高瀬、堤の同寓者と馬車を馳せて斜橋に赴く。銃砲の声殷々天地を震撼し暫くも間斷無し。大小の流丸頭上を過て眼前に作裂する者甚だ多く、仏国租界は海軍より発する砲丸の爲め危険少なからず。七時寓に帰て朝食。佐原、増田を訪ふ。九時有留を伴ひ仏租界の愛光社石崎の処に至り戦を観る。石藤豊太、永井参謀、波多、神尾等来会。機器局附近の軍艦より発射する砲丸屢ば屋上に爆裂し負傷者を生ずるに至れり。晌午波多、神尾と仏租界水道高塔に登り眺望す。正午石崎の処に中食し、一睡の後午後四時波、神兩人と機器局附近に至り両軍対陣の状況を視察し、同文書院に福岡を訪ひ八時帰寓。波多来訪。十一時再び開戦。神尾、波多と馬車藤瀬宅に至り楼上より戦を観、午前二時帰る。

北軍の主力は北洋より来りし第四師楊善徳の兵一千五百と新来の北兵五百を加へ総数二千内外。海軍中将鄭汝成之を督し浦江淀泊の軍艦肇和、応瑞、海籌、海琛、鏡清の五艦、並に列字、宿字の二水雷艇之に属す（北軍七月六日到）。

南軍は松江軍（七月七日着）一千、鎮江軍千五百、六十一、三十七の二聯隊、第八師の一部、福字軍、滬軍營、広東軍八百を合せ総数七千以上にして、討袁軍司令陳其美之を督す。

是日の戦午前三時正午に至る九時間に亘り、北軍は機器局を本拠として滬杭鉄道線の踏切を中心として半円を画き、両端を局の東西江畔に接し、中心斜橋街道に面し砲列を布き、又た東西両端に砲列を構へ以て南市、斜橋、龍華三方面の敵に對す。南軍は南市に司令部を置き（後聞北に移す）、停車場北方と日暉橋附近に砲列を布き、同く半円を画て両端を黃浦江に結び、東は南市、西は龍華、中央は西門外に予備隊を置き約五千の兵を挙て之を攻め抜くこと能はず。南軍死者二百、傷者之に倍し、北軍は僅に六名の戦死者を出せしのみ。

七月二十四日 晴。午前平岡、副島來訪。鳥居の信至る。正午日野大佐強來着、本日来着せりと云ふ。午後河野、副島來訪。海軍に戦況を報ず。

是日午前の戦南軍大敗。十時より十一時の間に於て北軍の為に駆逐せられ斜橋を渡り西門外に潰走せりと云ふ。

午後四時波多と愛光社に至る。晩食後郡島を訪ふ。本日帰來せる者なり。本人曰く、現に李烈鈞は呉城に在り、南昌には俞応麓樞要に踞し李の命を受けて政務を理せり。南昌軍の主力は皆徳安に派遣せられたり。軍資の欠乏と大砲、並に銃砲丸の補給に苦めり。夜佐原を訪ひ九時歸る。九時四十分機器局の正面に於て銃砲の聲に大に起り機関銃の響恰も急雨の窓を打つが如く轟々殷々暫くも間斷無く激戦の状有るを以て、十時半波多と車を駆て仏租界に赴きしも戦況少く衰へたるを以て折回せり。十一時以後銃聲斷続龍華方面に向て南軍の退却せる者を追撃せる如し。十二時十分南市兵火に罹り煙焰天を蔽ひ欠半月半穹中空に懸り、銃聲夜陰を破りて至り光景凄絶たり。午前二時に至り就寢。

海軍總長劉冠雄軍艦四隻を率ひ本日芝罘を發し上海に向へりと云ふ。上海工部局に革命党首要人物の租界内に居住するを以て治安に害有りと為し、本日午後七時半孫文、黃興、陳其美、李平書、王一亭、王寵惠 等 名に上海退去の命令を發せりと云ふ。

七月二十五日 晴。午前幡生、江崎、副島、川口來訪。熊本宅、並に海軍に戦況を報ず。増田を訪ふ。

午後姚文藻、汪甘卿、神尾、前島、齋藤來訪。村山の信至る。九州日々社に上海戦況を報ず。河野、郡島來訪。夜波多と藤瀬宅の露台上に上り觀戦。九時十分開戦。南軍は斜橋街道を挟み湖南會館より四明公所の西北に主力を置ける者の如し。機器局前の野砲、並に軍艦より南軍を砲撃し弾着頗る正確なり。十一時十分藤瀬宅を辞し十二時歸寓。此時南軍全力を挙て攻撃を開始し機関銃、小銃の音盛に起り、海軍亦た巨砲を開て之に応じ、午前五時終はる。南軍の一部は城内に、一部は龍華方面に退却せるが如し。

七月二十六日 晴。岡幸七郎の信至る。午前副島、河野來訪。午後前島、香月、郡島、深水、井手、澤本等來訪。夜佐原を訪ひ、波多、賀來を拉してハレスホテル露台上に上り、十一時半機器局の開戦を待てども遂に起らず、只だ南市方面に火災を生ぜしのみ。

七月二十七日 晴。朝江崎、堤來訪。午前平岡、勝木、江崎、副島、土井、齋藤來訪。海軍に発信す。正午遠藤麟太郎の送別會に新六三に出席す。三時散ず。河野を訪ふ。平岡、香月、勝木在焉。共に小督一番を謡ひ五時歸る。北京野満四郎の信至る。夜佐布、岸田、波多、神津來訪。是夜無戦。

本日工部局は租界治安の起見よりして南北兩軍に直接の關係有る者を居留地外に退去を命ずることに決し（昨日決定發表）、本日午前十一時南軍司令部の閘北に在る者に対し撤退を迫りしも、応ぜざるを以て海軍陸戦隊の力を借り強力を用て放逐せり。南軍司令陳其美は呉淞に遁れ、兵卒百五十人は潰散し、砲六門、小銃四百挺、機関銃一門を遺棄し狼狽逃去せり。此の退去区域は公共租界の西北兩部に属する租界外の地域をも包含せり。

七月二十八日 晴天。午前副島、西本來訪。出て理髮。増田、末永を訪ひ歸る。午後正金に至り為替を受取り、白岩を日清汽船に訪ふ。阪西利八郎、中根齋の信至る。晩白岩の招邀に新六三に赴く。同座は郡島忠二郎、香月等なり。夜郡島、遠藤の歸国を送らんとせしも、九時より機器局開戦銃砲の聲盛に起る。白岩、香月とハレスホテル露台上によらんとせしも流丸二個飛來せしが為め閉鎖して上る能は

ず。夜半銃砲の声益す盛にして火災各所に起り砲丸の公共租界に落下する者少なからず。午前二時より四時の開戦最烈。翌朝五時に至りて歇む。同文書院砲弾の為に焼失す。

七月二十九日 晴。朝江崙，副島来訪。北京阪西，中根に復書し，熊本宅，並に亀井陸良に致書す。野満に復す。佐原を訪ふ。

江西の湖口県遂に北軍の占むる所と為る。

緒方，細川忠雄男，伊集院俊，迫，松寄奎，井手三郎の信至る。副島，江崙来訪。夜堤，波多と大馬路樓外樓の露台に上り観戦。九時高昌廟の西方に小戦有り，少時にして歇む。十二時帰る。

七月三十日 晴。明治天皇御一年祭に付き領事館に至り聖影を拝し，帰途増田を訪て帰る。香月来訪，留て中食す。土井来談。内人，鳥居の信至る。川口，中村新太郎来訪。市川信也来訪。

昨日黄興南京を逃亡せりと説有り。孫文も明日広東に赴かんとす。

香月と平岡の処に至り会食。同座は永末春日丸艦長，吉田等なり。十一時帰る。

七月三十一日 陰。午前江崙，福岡，山田，副島来訪。午後真島次郎，波多来訪。柴少将五郎を訪ふ。

午前白岩を訪ふ，在らず。佐原に抵り小談，帰る。深水来訪。橘三郎の信至る。鳥居，緒方に復書す。松寄奎雄に復す。白岩来訪，留て晩食を共にす。夜工藤常三郎来訪。

八月一日 陰。午後郵便局，末永，増田，上海日報，篠崙を歴訪。五時末永の招邀に赴く。佐原，平岡，永末，香月，深水，島田，吉田，外二三人来会。九時散ず。

八月二日 晴。午前柴少将，深水，齋藤登喜，副島，勝木来訪。海軍に報告を發す。佐原を訪ふ。河野久太郎来訪，留て晩食す。勝木来訪。古閑信夫，郡島忠二郎の信至る。再び海軍に發信す。

孫文昨日上海を發し広東に赴けりと云ふ。

八月三日 晴。深水来訪。増田，福岡来訪。午後川口，篠崎来訪。福岡，姚の信至る。

八月四日 晴天。午前平岡来訪。鳥居に致書。岡本武三来訪，本日長沙より北京に出で帰来せりと云ふ。正午同文書院焼失後の善後策に付き俱樂部に於て福岡，土屋，白岩，西田，神津等と商量，中食を共にし，二時姚文藻宅に汪甘卿，惲祖祁と会し，五時帰る。有働政喜の信至る。真島来訪。晚白岩の招邀に新六三に赴く。同座は木幡，江崙，河野等なり。十時帰。

孫文，胡漢民は台湾に逃れたり云ふ。

八月五日 陰。副島来訪。松寄奎雄に致書す。小笠原来訪。午後波多，小笠原来る。共に黒獅路に至り家を看，佐原を訪ひ帰る。福岡，村上貞造，深水，勝木来訪。

南軍の形勢非なるに方て各省競て独立を取消し討袁の旗幟一朝にして討黄に變じ人情の反覆反掌の如きもの有り。

詩有り。

呼正呼邪誰識方，豆萁相煮国将亡，人情反覆若反掌，朝号討袁夕討黄。

八月六日 晴天。海軍に報告を發し，北京小村俊，山田勝，大連森，田岡に詩信を發す。午前増田を訪ふ。晌午帰る。副島，村上貞造来訪。午後香月，狄葆賢，篠原政信，深水来訪。鳥居，東京根津，田中清司，菅村夫婦，上妻，青木喬，加藤壮太郎の信至る。鳥居に復書す。夜姚文藻，今井邦三来訪。

八月七日 晴。朝副島来訪。十一時姚文藻を訪ひ，共に出て南陽路に至り鄭孝胥を訪ふ。正午鄭の案内にて鄭の長子と主客四人滄州別墅に至り中食し，再び鄭宅に帰り小坐辞帰す。途福岡を訪ふ。有留，篠原政信，入倉栄璋，波多等来訪。岡幸七郎の信至る。香月，勝木，河野来訪。晚河野宅に至り鰻飯を会食す。白岩来会。

八月八日 晴。熊本宅に致書す。午後佐原を訪ふ。夜河野，深水，白岩，菅沼峨峨艦長来訪。

八月九日 晴。午前前島，副島，深水，小越平陸，香月等来訪。小越中食。河野来訪。鳥居，岡，澤村幸夫，阿部野の信至る。甲斐靖来訪。

是日機器局の北京二千五百ニューポイントの東方より上陸，呉淞砲台の南軍を攻撃せんとす。南京

第一師長杜淮川馮国璋の処に赴きし留守に乗り、何海鳴討袁軍司令と号し再び独立を宣言せり。第八師長陳之駿之に反対し將に武力を以て対峙せんとす。第一、第八の両師の一部独立に賛成し、一部之に反対せり。鎮江に於ける軍隊と楊州徐宝珍の軍隊との確執解けず、鎮江の全市混乱を極め將に大變動を惹起せんとするの危機に逼れり。

八月十日 晴天。日曜日。漢口角田隆郎、岡幸七郎に信片を發し九州日々社に通信を出す。午前増田を訪ふ。江崎真澄來訪。午後平岡來訪。名和司令官より柳葉魚の干物を贈り来る。村上夫人を訪ひ五時帰る。夜佐原を訪ふ。

南京にて再び独立を宣し討袁軍司令と為れる何海鳴（漢口大江報主筆）は第八師長陳之駿の為に捕縛され營倉に監禁せられ、南京の独立は半日にして取消されたり（八日の出来事なり）。何海鳴は社会党にして、詹大悲、凌大固、季雨霖の同志にして武昌に事を挙んとして失敗し、久しく黎元洪物色中の人物なり。

八月十一日 晴。午前香月、副島、深水、波多、西本來訪。外務の経費七月分を受取る。午後増田、深水を訪ふ。夜波多、神尾、小笠原と江湾の戦を観んと欲し月に乗じて江湾附近の鉄橋に至る。待つ之を久ふするも戦声起らず。十一時帰る。

是日午後四時半呉淞の南軍約六百江湾の北軍を襲ひ幾んど之を破らんとして兵力敵せず。七時に至りて退却せりと云ふ。

八月十二日 晴天。午前五時起床、結束郵船埠頭に至り七時大倉の汽船に乗り軍艦千代田の後に尾行して呉淞に至り千代田に移乗する予定なりしも、艦の出口遅延せるを以て八時千代田を辞し先發呉淞江口に至る。北軍の軍艦海圻、海容、海琛、永豊の四隻（この後、八月十五日の途中まで記された1ページ分欠）

八月十五日の途中から

本月十三日張勳の軍下関の下游より上陸して紫金山を占領せしに對し、十四日に至り獅子山、天保城、富貴山の各砲台より之を砲撃し激戦中なりと云ふ。

有蘭、穴沢喜三次の信至る。午後齋藤少佐來訪。

八月十六日 晴。海軍々令部に報告を發し、加藤中佐に致書す。篠原來訪。佐原宅を訪ふ。本日満鉄新造船輪丸初航にてアットホームの案内有り、辞して行かず。七時平岡宅に至り香月、末永、川本、永末、海津等と鯛茶漬を会食、十時帰る。

八月十七日 晴。勝木、波多、呉泰壽來訪。午前波多と同文書院に至り兵火の跡を観る。廢礎断壁光景慘憺、大講堂及び南風閣大小の彈痕無数にして壊裂の状形容す可からず。十一時帰る。午後安河内弘、小越平陸來訪。夜波多、佐原を訪ふ。

八月十八日 晴、熱甚。熊本殉難志士五十年紀念会に金拾円寄附の通告を為す。柴少將より六三亭に招宴、七時半之に赴く。同座は名和司令官、有吉、各艦長、參謀、領事館員なり。十一時散ず。夜熱眠る能はず。気温九十六度に上れり。

八月十九日 晴。午前柴少將五郎來訪。波多、副島來談。正午柴少將の帰国を春日丸に送り、帰途豊陽館に名和司令官、増田中佐に会し中食を共にし、五時帰る。佐野直喜、軍令部、石橋藤次郎の信、並に名和中將より明日アストルハウスにアットホームの案内至る。夜佐々布來談。熱甚。

八月二十日 晴。午前副島、白岩、澤本、陸大尉野中、同佐藤嘉平次、海大尉津田静枝來訪。葉室侃、石橋藤、佐野に復書す。午後五時名和第三艦隊司令官の主催に係はるアットホームにアストルハウスに列席。五時半白岩と辞して馬車静安寺に赴き小憩して帰る。

八月二十一日 晴天、涼。午後三時河野と軍艦對馬に司令官、艦長、參謀を訪ひ寛談。辞して新高に至り艦長を訪ひ、六時帰る。小越來訪。夜川口市之助來談。



八月二十二日 雨天。今井邦三来訪、香港に赴くと云ふ。軍令部吉田大佐の信至る。午後河野来訪。夜波多来談。

八月二十三日 晴天。朝台湾総督府木村増太郎来訪。午後増田を訪ひ、三時井手三郎、神喜正助を近江丸に迎へ、井手の処に小談帰る。

八月二十四日 晴天。日曜。午前白岩、香月と河野宅に会し中食。五時白岩と辞し馬車楊樹浦の郊外を一週して帰る。井手三郎来訪せりと云ふ。齋藤徳次、安村中佐の信至る。

八月二十五日 晴。内人、小森正鋭、有蘭、澤村幸に復書し、軍令部に報告を發す。午後神尾、角田来訪。夜報告を作る。小越来訪。十一時郵船に至り投函す。

八月二十六日 陰。午前副島、佐原来訪。午後香月、井手来談。鳥居赫雄、清水崑の信至る。夜賀来来訪。

八月二十七日 晴天。午前増田を訪ひ、津田少佐、永井参謀と談じ、帰途佐原を訪ひ帰る。午後西本、河野来訪。漢口角田の信至る。夜川口、小越来談。

八月二十八日 晴天。西本来訪。領事館より本月份経費を受取る。午後井手、佐原を訪ひ帰る。夜波多を訪ふ。井上保昌の信至る。

八月二十九日 晴天。午後増田、齋藤、香月を訪ひ帰る。夜川口を訪ふ。松寄奎の信至る。井手来訪。

八月三十日 陰。朝小越来訪。松寄に復書す。午前香月来訪、留て中食す。井手三郎、上野貞正来訪。晩土井宅の旧雨会に出会す。井手、香月、甲斐、澤本、河野、白岩、秦、勝木等なり。十時散ず。

八月三十一日 晴。是日今上陛下の天長節たり。正午増田中佐来訪。夜佐原を訪ふ。

九月一日 半晴。小越、前島次郎来訪。南京船津に籠城見舞状を發す。南京南北両軍開戦後已二十日間籠城せるを以てなり。午後書家渡辺鳥城来訪。晩河野、波多来訪。

本日張勳の兵南京太平門を破て入り、城内の南軍は南門より潰走し南京始て北軍の有に帰せり。或は曰く、本日前十時朝陽門先つ破れ太平門之に次ぎ北軍入城。叛徒南門より逃れ城外雨花台方面にて戦闘、今尚継続せりと云ふ。

九月二日 晴。午前勝木来訪。中西重太郎病氣に付き見舞として十元を贈る。午後佐原を訪ひ、五時帰。夜小越来訪。

九月三日 晴。海軍に報告を發す。午後増田、井手を訪ふ。夜波多宅の晚餐に赴く。島田、西本同座たり。松倉、安達の信、並に内人の信至る。

九月四日 晴。午前河野、高島、勝木、小越等来訪。午後理髪。井手、篠寄を訪ふ。吉田親一、甲斐靖来訪。吉田は本日帰国、甲斐は本夕起程四川に赴くと云ふ。夜甲斐を訪ひ別を告げ、佐原に至り九時帰。

九月五日 陰。小越、香月、平岡来訪。晩秦宅の旧雨会に出席す。食後井手、河野、土井、勝木、秦と謡曲二番を謡ひ、九時帰る。

是日夕刻外務省政務局長阿部守太郎刺客の為に殺さる。支那問題に関し外務の政策に不満を抱ける者の所為なるべし。

九月六日 雨。午後波多、白岩来訪。二時半香月、末永、前島の帰国を春日丸に送り、帰途白岩と金万を訪ひ小談。去て井手に抵り五時帰る。

九月七日 雨。午前岡山源六、白岩来訪。午前河野宅に至り井手、白岩と四人会食に食、熊野一番を謡ふ。(七日途中から十日の途中までの1ページ欠)

(九月十日の途中から) 増谷太一来訪。二時開船。

九月十一日 晴。午前八時半南京着。日清公司の躉船に至り小休。齋藤、白岩と軍艦新高に至り名和司令官を訪ひ、小松、永井両参謀、高倉副長等と寛談。十時半辞して出で三人馬車に乗じて下関を發

す。途中馮国璋の第二軍、並に徐軍の凱旋に会ひ、兵馬雜還道塞て行く可からず。漸くにして儀鳳門を入り領事館に至る。途上護衛の爲め第三艦隊より水兵二名を附せられたり。船津の病を訪ひ寛談。中食後文德里に至り秋元少佐、野中大尉を訪ひ小談。辞して下関に躉船に帰る。迎英輔鎮江より來会。吉田大佐に致書す。

下関殷盛の区全部兵燹に罹り変じて瓦礫の場と爲り荒涼を極む。南京に在りし馮国璋の兵は撤退して浦口に退き雷震春、徐邦珍の皆も已に撤去せり。現に張勳の兵一万五千（四十營と号す）にて之を守備せり。南京攻城の時南軍の兵力は第八師、第一師を主として約八千許。北軍は張勳の部下七千、徐邦珍の兵二千、馮国璋の軍五千、雷震春の所部千二百にて総数約一万五千許。兩軍にては第八師の二十九団勇悍にして善く戦ひ寡を以て衆に当り常に北軍を苦めたり。此の一団は湖南出身者によりて成立せり。開城後馮国璋は二十九団の精鋭を愛し其の残兵を收容するに力め居れり。

九月十二日 雨。午前六時半躉船の羽根田宅を辞し、白岩、迎と下関車站に至り七時半の上海行汽車に乗ず。鎮江に至りて迎英輔辞去。十一時半常州を過ぐ。雨大に至る。午後一時蘇州を経、三時半上海に達す。内田友義、有留重利、成泰静雄の信に接す。夜佐々布、高島、河野、波多來訪。東京軍令部より電報至る。豊陽館に至り復電す。

九月十三日 陰天、小雨。午前有吉領事、井手、副島來訪。晌午姚文藻を訪ふ。午後佐原に抵り小談。

加藤壯太郎、末永節、眞藤夫人フサ子の信至る。眞藤駿士本月五日死去せりと云ふ。

九月十四日 陰。午後平岡小太郎、河野久太郎を訪ひ、五時河野と出て井手宅の旧雨会に出席。九時帰る。有留重利の信至る。

九月十五日 晴。是日陰曆中秋節たり。午前川口、津田を訪ふ。午後河野、小越、今井來訪。五時半姚文藻の招宴に赴く。同座は鄭孝胥、沈曾植（子培）、潘若海、吉田正春、井手等なり。十時帰る。小越、河野、白岩來訪。是夜八月望に当り月蝕皆虧なり。報告を作り深更に至る。

九月十六日 陰。午前報告を写す。菅沼嵯峨艦長來訪。有吉領事、津田大尉、井手を訪ひ、晌午白岩の帰国を筑前丸に送て帰る。正午齋藤少佐、神崎正助と新六三に中食し、午後正金に至り海軍よりの爲替を受取り、井手と小談帰る。晩村上貞吉の晚餐に赴く。九時帰。雨。

九月十七日 雨。午前増田を訪ふ。名和司令官、有留に致書す。午後波多來訪。鳥居、吉田親、松寄崔等の信至る。波多と佐原を訪ふ。夜島田來訪。

九月十八日 雨。午前河野、井手、山王丸豊治來訪。午後領事館に有吉を訪ふ、在らず。

金万、西田と小談。上海日報に井手を訪ひ、理髪して帰る。晩増田中佐の宴に赴く。同座は井手、齋藤、河野、波多、神尾、津田等也。十時散ず。岡幸七郎に致書す。

九月十九日 晴。明日啓程熊本に帰らんとす。行李を戒む。午前井手來訪。十一時有吉を訪ひ告別。午後波多來訪。時報館より半季分三百円を送り来る。姚文藻來訪、張勳の電報を示し余の南京行を求む。之を辞す。夜佐々布、小越、川口、今井、神崎來訪。海軍への報告を作り之を發す。佐々布等十二時に及で去る。

九月二十日 陰天。是日近江丸にて帰国せんとす。行李を整頓す。村上夫人、河野、島田、西本、吉田正春來訪。村上夫人より紅茶一箱、副島綱雄より紫檀台二個を餞す。中食後東和を出で豊陽館に増田を訪ひ、一時近江丸に上る。増田中佐、齋藤少佐、津田大尉、金万副領事、齋藤延、古谷栄一、井手父子、小笠原、島田、河野、川口、高瀬博士、今井、児玉英、岡田有民、西山、岡、小越、佐々布、賀来、篠原、木下温知、篠崎、神寄、福岡、児玉秀、中村、神尾、澤本、塚原、村上貞、堤等來り送る。二時半開船。

九月二十一日 半晴。前五時起床入浴。午に近て海上漸く穩。午後六時夕陽濟州島の漢羅山を望む。

九月二十二日 快晴。前七時長崎港口に入る。八時檢疫終て入港。十時税関の検査を受け獵銃輸入手續の爲め梅ヶ崎警察署に赴き許可証を得て再び税関に至り、十一時土佐屋に投ず。大阪毎日記者宮田文

作、長崎日々社村上憲弘来訪。熊本宅に電報を發す。上海増田、津田、金万、古谷、齋藤、齋藤、井手、島田、菅沼、河野、村上、神崎、副島、吉田、沢本、高瀬、小越、秦、辻、堤、山田等に礼状を發す。

九月二十三日 晴。午前八時半土佐屋を出て車站に至り、九時十分の汽車にて發す。三谷一二来り乗ず。大村に至れば師団長神尾光臣乗車。二十年前の知人なり。鳥栖に至り換車。根津一の大村同文書院に赴くに会す。三谷とは早岐にて分手、神尾中将とは久留米にて握別す。九州日々社員某此地に来迎。午後四時半上熊本着。河口、田中、菅沼来迎。直に新屋敷の宅に帰る。

九月二十四日 快晴、冷氣如深秋。午前佐々干城、佐々布遠、古庄韜来訪。午後松倉、井手友喜、古閑、田中、石原来訪。夜山田珠一來談。

九月二十五日 快晴、冷氣透衣秋意可人。鳥居赫雄の信片至る。午前上車。大江、古庄、井場、井芹、菅沼、田中、佐々布、山田、河口、九州日々社、鎮西館、阿部野、正木、住田、中島、古閑宅を歴訪す。園田郭六、小早川秀雄来訪。上妻博路来訪。五時古閑、住田を訪ひ、去て山田珠一の招宴に静養軒に赴く。同座は赤星知事、川口高等工業校長、中津親義、小早川、阿部野、緒方等なり。洋饌の饗有り。九時半散ず。

九月二十六日 雨。午前阿部野、友野盛来訪。末永節、四竈中佐孝輔の信至る。午後松倉を春日に訪ひ、五時帰る。

九月二十七日 半晴。午前警部白井信喜、外一名支那亡命客の事に付き来訪。清水崑来談。午後平山岩彦、中路新吾来訪。三時内人と内藤儀十郎氏を訪ふ。夜高等学校生徒井上孚麿、並に石原醜男、菅村夫婦来訪。

九月二十八日 快晴。日曜日。午前山本少将来訪。西本、波多、岡幸七郎の信至る。岳父、米原繁藏、生田清範、武藤巖男諸氏来訪。晌午家族と水前寺に遊び旗亭に投じ中食、三時帰る。上妻、佐々布宅を訪ひ、転じて石原、武藤諸氏を敲き帰る。池田市郎来訪。夜

九月二十九日 晴。午前大江を訪ふ。午後久野尉を訪ふ。三浦喜傳來訪。大野謙二郎に致書す。井手、河野大連行途上榊丸よりの無線電報、並に岡本源次の信至る。

九月三十日 快晴。狩野直喜、根津一、波多博に致書す。午前高道に至り齒を療し、去て河口に至り帽子、時計を購て帰る。午後

十月一日 快晴。午前三浦、小早川、河口、鎮西館を訪ふ。小濱為五郎、佐々正之に致書す。

十月二日 健晴。午前理髮、齒療。井芹来訪。中食後新市街の肥後相撲館開館式の招待に赴く。方屋祭、開口、並に方屋開、三つの構等の式有り。吉田追風父子之を掌る。式終て横綱太刀山峯右衛門以下東西力士の角力の余興有り。五時帰る。

十月三日 陰。上海波多より九月分外務省手当の中二百五十円を送り来る。午前坪井郵便局に至り金子を受取り、山本銃砲店にて銃獵用品を購ひ、鎮西館に平山中知、河田等と談じ、正午帰る。篠崎都香佐の信至る。之に復す。波多に金子領収証を送る。

十月四日 晴。午前齒を療す。午後井手友喜、松村某来訪。右田以德。久野尉太郎来訪。

十月五日 晴。午前田中清司、松倉善家来訪。松倉と出て久野を訪ひ、去て見性寺に岐部熊雄を訪ふ、在らず。朽木家に至り庭園を觀、去て平山岩彦、長江虎臣、右田を訪ふ、皆在らず。松倉と小談。右田を塗師屋に訪ひ、五時帰る。世界一週會員風間、浅見兩人より第二会〔回〕白星会を京都に開催の通知至る。之に復す。

十月六日 晴。午前池部霍彦柿を携へ来訪。井手、外一人来訪。上海増田中佐、波多、佐原、西本、有留の信、並に漢口岡幸七郎の信至る。佐原、波多に復書す。

十月七日 半晴。波多、姚文藻、大野謙次郎の信至る。姚の手紙を清浦奎吾氏に転寄す。波多、大野に復書す。大野よりは西郷南洲の真蹟を送り来る。午後武藤巖男氏を訪ひ小談。去て通町へ至り新論を

購ひ帰る。是日銃猟免許状を受取る。

十月八日 晴。午前井芹来訪。菅口上妻の信至る。

十月九日 晴。井手、河野山海関より連名の信片至る。吉田大佐、増田中佐に致書す。午前長江虎臣来訪。午後内人と上車本妙寺を展し宝物館に肥州公の遺物を観、転じて柿原の天福寺に遊ぶ。松篁林を成し山門清迷雅趣画くが如し。寺内に小休、茶を啜り遊賞時を移し、五時半帰る。松倉、右田以德来訪せりと云ふ。

十月十日 晴。有留重利の信至る。上海佐原に週刊雑誌「上海」の題字を書して之を送る。午後内人と別所の金刀比羅宮を展し其神事を観、五時帰る。加藤中佐の信至る。夜佐伯好郎来訪。

十月十一日 雨、九時に及で晴る。松倉を春日に訪ひ、帰途銃猟用品を購て帰る。午後阿部野、緒方を訪ふ、在らず。波多に新論二冊を贈る。狩野直喜の信至る。頃者欧洲より帰来せる者也。

十月十二日 半晴。井芹を訪ふ、在らず。午前内藤儀十郎氏来訪。宮崎盛の信至る。松寄奎雄の信至る。

十月十三日 晴。午前内人と物産館に至り熊本製産品陳列場を一覧し、帰途藤崎宮を展して帰る。中食後塗師屋に岐部熊雄、右田以德、松倉と会し、五時帰る。諸人と連名にて鳥居、林、狩野に信片を發す。米原来訪せりと云ふ。夜雨。

十月十四日 半晴。中久喜、有留、波多、大野謙の信至る。午前白水館に深水清を訪ふ、在らず。菅村、井上致廣を訪ひ、晌午帰る。夜菅村夫婦来訪。夜雨。

十月十五日 晴。午前四時結束、春日に松倉を誘ひ輕鉄にて檜崎に至り、二番新地に鳴猟を為す。発射四十七回にして僅に鳴一羽を獲、三時猟区を發し六時家に帰る。松倉親敬亦同行、余に先て帰る。是日松倉の流弾にて鼻側に微傷を受く。佐原、同文会の信至る。

十月十六日 晴雨無定。午前菅村を訪ひ、去て通町に至り理髮。河口、鎮西館、深水清を訪ひ帰る。午後古莊、深水来訪。菅村夫婦を邀へ晚餐を共にす。

十月十七日 陰天、風強。上海増田中佐、波多、有留の信至る。井手、河野、中島眞雄列数人合作の信片安東県より到る。

十月十八日 陰。午前九時友枝能楽堂に至り観能。頼政、熊野、安宅、枕慈童、昭君の五番を演ず。友枝三郎の安宅、喜多六平太の熊野尤も出色にして入神の妙技たり。七時散ず。鳥居の信至る。

十月十九日 快晴。日躍。午前九時より内人と能楽堂に至り観能。鞍馬、忠度、花筐、黒塚、小鍛冶の五番を演ず。五時帰る。増田、波多、軍令部、白岩、岡本源次の信、並に井手、佐々正之、林市藏、佐野、大村等朝鮮より合作の信片至る。郡司廣喜、若林来訪。

十月二十日 快晴。午前阿部野、緒方、鎮西館、河口を訪ひ、去て散弾を購て帰る。午後家族と出水神社の神事を拝して帰る。夜郡司、若林、井手三郎来訪。井手は昨夜満韓より帰来せりと云ふ。

十月二十一日 陰。午前井手を訪ふ。午後高道竹雄、松倉善家、緒方、河田巖、中路等来訪。

十月二十二日 晴。午前五時上車。田崎輕鉄車站に至り江島永年、河田巖、松倉三人と二番新地に猟し鳴七羽を獲、三時猟区を去て百貫に渡り輕鉄より帰る。六時到家。

十月二十三日 快晴。波多の信至る。午前大江に至り、午後内人と物産館より菅村宅に至り、四時帰る。晩大江を招待す。

十月二十四日 晴、冷氣頓に加ふ。内藤儀十郎、佐々干城、佐々布遠、武藤巖男諸氏に明日晚餐の招待状を發す。午後緒方、阿部野、並に書肆川島を訪ひ帰る。松倉親敬来訪。

十月二十五日 晴。大野謙次郎、岡本源次に致書す。午後宇野貞度来訪、講に加入を請ふ。一と口之に応ず。晩内藤、武藤、佐々、佐々布諸氏を招宴す。十時散ず。

十月二十六日 晴。武藤巖男、佐々布遠二氏来訪。加藤壯太郎、白岩、佐原、岡幸七郎、西本、有留、上妻に復書す。

十月二十七日 晴。午後内人と花岡山に上り頂上の樓霞亭に休憩。是日秋晴如拭。飽託の平野秬稻黄



- 熟，山阿壚落，紅葉之を粧点し風光画くが如し。三時下山，春日，松倉宅に至り小坐，五時帰る。
- 十月二十八日 晴。正午上車春日に至り，十二時半の汽車にて宇土に赴き法華寺，城山の先塋を展し，奥村宅に小坐。帰途浅井寅喜を小学校に訪ひ，去て細川子爵邸に行雅公子を訪ひ家従岡川，田中と談じ，四時の汽車にて帰る。夜古閑信夫来訪。
- 十月二十九日 陰。大掃除を為す。松倉の信片至る。
- 十月三十日 晴。岡本源次の信至る。午前理髪。午後武藤翁に十三経註疏一函を贈り富田大鳳の真蹟を贈られしに報ゆ。井手三郎来訪せしを以て往て之を訪ふ，在らず。久野を敲き，去て古莊嘉門翁を訪ひ，五時帰る。井手友喜来訪。久しく同家に預け置きし金千円を返却し来る。林市蔵に致書，岡本身上の事を托す。
- 十月三十一日 晴。是日今上陛下初度の天長節たり。十一時鎮西館の拝賀式に列す。佐原，有留の信至る。兩人に復書す。夜家族と河口宅に至り提灯行列を観る。
- 十一月一日 晴。午前四時半結束，松倉善家を春日に訪ひ，五時五十分の汽車にて小川に至り下車。沙川堤防の山鳴嶺を為し僅に一羽を獲，三時の汽車にて帰る。是日鴨に一射，山鳴に八射を試み結果不良。從來無き所なり。佐々干城氏より鮒を贈り来る。
- 十一月二日 晴。午前河口，山本に至り晌午帰る。武藤巖男氏より鯛を贈り来る。晩山田珠一，井芹，井手兄弟を招き会食す。十時散す。
- 十一月三日 晴。波多より十月分金百六十円を送り来る。有留重利，川口市之助の信至る。午前肥後銀行に至り同行新株払込額五百円を納め，同支店に至り六百円を預入れて帰る。午後郵便局に至り貯蓄債券十枚の保管手続を為し，緒方，阿部野を訪ひ鎮西館に至り，四時帰る。川口市之助，波多博に復書す。夜田中清司来訪。
- 十一月四日 陰。午後松倉来訪。五時東亜同志会の招待に静養軒に赴く。会する者新雨旧雨五十余人。井手と共に一場の支那談を為し，終て杯酒言歡十時帰る。佐野直喜夫人死去の事を聞き弔詞，並に奠儀五円を送る。
- 十一月五日 快晴。佐野に発信。午前内人と菅村夫人を誘ひ十時半の菊池軌道の軽鉄にて池田に至り下車，歩して柿原を経，成道寺に遊ぶ。林泉清雅，紅楓水を照らし秋色掬すべし。泉石に対し行厨を開き二時帰途に就き，三時半池田の軽鉄にて広町に至り菅村宅に小坐して帰る。
- 十一月六日 陰，午後微雨。午前物産館に至り肥後殉難志士五十年紀念会に金拾円を寄附し，去て春日に松倉を訪ふ，在らず。汽車にて上熊本駅に至り軽鉄にて帰る。午後内人と物産に至り展覧会の日本絵画を觀，帰途道を枉て大江を訪ひ，四時帰る。
- 十一月七日 雨。終日在家。
- 十一月八日 晴。午前出て理髪。阿部野を訪ひ帰る。井手友喜来訪，明日より上海に赴くと云ふ。夜石光真臣を静養軒に招宴す。同座は井芹，緒方，阿部野，松倉，行徳，小早川，平山，黒川，二子石，本田，沼田以下五六人たり。九時半帰る。
- 十一月九日 微雨。是日家族と住吉に游ばんとす。天気不好を以て之を止め，菅村家族一同と立町より軽鉄に乗り亀井に下車し八景水谷に遊び，旗亭に投じて行厨を開き溪山の間を徜徉す。紅葉染むるが如く緑樹の間に粧点し，秋色如画心襟為に清し。三時堀川より上車帰る。佐野直喜の信至る。
- 十一月十日 晴。五時獵装車を賃して春日に至り，松倉と六時の汽車にて小川に至り氷川の堤防を獵し山鳴四羽を獲，午後一時の汽車にて帰る。友野盛来訪せりと云ふ。吉田大佐に致書す。武藤巖男来訪，米田監物，高木紫溟，加屋霽堅，辻橋見直の真蹟を贈らる。
- 十一月十一日 晴，寒気漸加。午後岡本次七郎来訪。夜大江を訪ふ。緒方，阿部野，石原，平山に案内状を發す。
- 十一月十二日 快晴。香月梅外の信至る。之に復し別に長崎土佐屋に致書。午前内人と菅村夫人を誘ひ

輕鉄にて池田に至り、徒歩島崎に至り村井別墅を看、去て岳林寺に赴き甘藷を煮中食の饗を受け盤桓時を移し、三時池田に出で輕鉄にて広町に返り菅村家に小坐、帰宅。夜角田政治來訪。

十一月十三日 半晴。晚平山岩彦、緒方二三、石原醜男を招宴。石原より加屋霽堅の歌一首を贈る。

菅村夫婦來訪。夜雨。

十一月十四日 陰寒、風強。波多博の信至る。

十一月十五日 晴。終日在家。六時より師範学校に至り学生職員に対し一場の講演を為し茶菓の饗を受け、九時帰る。

十一月十六日 快晴。午前八時半上車家族と田崎に至り河口、菅村の家族と会し、九時の輕鉄にて百貫に至り家族を馬車にて送り、菅村と共に徒歩河内に向ふ。梅洞、近津を過ぎ盜島より海岸に沿ふて行く。左方海を隔て温泉嶽を望む。是日秋空洗ふが如く海平かにして波たたず。道路蜿蜒々長汀曲浦の間を縫ひ、風色名状す可からず。塩屋を過ぐれば沿道の山腹柑橘漸く多し。十一時半河内村に達す。百貫此に至る二里、海岸の潮鳴館に投じ中食す。此地温泉有り、浴客少なからず。食後弁天祠に上る。眺望極て佳。山を下り溪流の右岸に沿て進む。両側の山柑橘望黄珠を綴り景致甚饒。路傍の村舎に投じ甘藷を吃ふ。味極美。是日秋晴に加ふるに日曜を以てし遊人織るが如し。午後三時半馬車にて帰途に就き、五時百貫に達し直に輕鉄に移乗す。擁擠殆ど足を挿むの地無し。五時半田崎に達し一行に分れ車を賃して帰る。松倉親敬、猿渡辰男來訪せりと云ふ。

十一月十七日 半晴。井手友喜、上妻博路、波多博の信片至る。

十一月十八日 晴。午前佐野直喜來訪、昨夜來着せりと云ふ。井手三郎來訪。午後二時高麗門妙永寺に至り佐野直喜夫人の葬儀に列し、帰途小沢町渋谷嘉藤次宅に至り其栽培する所の菊を觀、晚餐の饗を受く。同座は村上一郎、山田珠一、井手、平山、岡、中路、古莊韜、佐藤敬太、大畑、小早川、緒方、以下三四人。九時散ず。帰途佐藤と通町に至り菊池千本槍を看て帰る。高等学校教授江部淳夫、学生二名を伴ひ來訪せりと云ふ。

十一月十九日 晴。午前佐野を声取坂に訪ひ小談。去て小沢町に渋谷を訪ひ菊を觀、春日に松倉兄弟を訪ひ、帰途理髮。是日大隈伯來着。井上致廣來訪せりと云ふ。午後合田良平來訪。

十一月二十日 晴。午前佐野、阿部野、古莊、長江を訪ふ。晚佐野直喜、渋谷嘉藤次、古莊韜、松倉、阿部野を招き晚餐を共にす。九時半散ず。是日渋谷に觀菊の詩一首を贈る。

三径菊花香欲浮、籬辺対酒忘千憂、君家清福孰能較、占得淵明以上秋。

十一月二十一日 雨。上海増田中佐の報告、並に有蘭の信至る。午前佐野を訪ひ輕鉄にて上熊本に至り、十二時半佐野の朝鮮に行くを送て帰る。晡時石原醜男を訪ひ富永守國の歌、並に其先人運四郎氏の筆蹟を得て帰る。池部雀彦來訪せりと云ふ。

十一月二十二日 晴。午前内人と小沢町渋谷宅に至り菊を賞す。佐藤敬太等來会、茗話之を久ふし、去て祇園神社、清水を拝し春日駅前の中食し、去て松倉を訪ひ、四時帰る。角田政二、松倉親敬、奥村等來訪せりと云ふ。大阪鳥居の信片至る。夜菅村宅を訪ふ。

十一月二十三日 快晴、午前五時起床。七時長江虎臣を誘ひ坪井川に沿ひ八景水谷を経て梶尾に獵し、秧鶏四羽を獲、六時帰る。不破來訪せりと云ふ。夜米原繁藏來訪。

十一月二十四日 快晴。波多博の信至る。

十一月二十五日 晴。午前三浦喜傳來訪。午後菅村、長江を訪ひ、五時帰る。松倉來訪せりと云ふ。夜菅村夫婦來訪。

十一月二十六日 半晴。午前二時半起床。四時長江虎臣の來るを待ち、間道より中ノ瀬橋に出で残月如鎌曉色可人。黎明著の渡を呼て之を渡り緑川の堤防を獵して吉野山に入る。熊本より此に至る三里許山を下り隈ノ庄に赴き獵す。水鶏、玉鳴六羽を獲、天候俄に變じ雨頻に至る。沿道の小溝を獵し高村の茶店に投じ休憩、緑川を渡る。秋雨蕭索墮葉道を埋め舟中の人宛然画図の裡に在り。薄暮八王子、

- 田迎を経、六時家に帰る。衣帽尽く沾ひ全身浴するが如し。是日水鶏五羽、玉鳴三羽、千鳥一羽を獲。増田高頼の報告、並に佐野直喜、上妻博路の信至る。
- 十一月二十七日 陰。有蘭善行来訪。午後五時鎮西館に至り諸人と静養軒の三浦喜傳の送別会に臨む。本人不日東京細川侯邸家扶に転任するを以て也。九時散ず。
- 十一月二十八日 晴。午後長江虎臣を訪ふ。
- 十一月二十九日 晴。島田常吉来訪。上海有留重利より小松帶刀、篠原國幹両氏の真蹟を送り来る。有留、増田に復書す。午後河口、井芹を訪ふ。
- 十一月三十日 微雨。午前六時の汽車にて長江と宇土に至り下車。立岡、花園、善導寺、宇土の田野に獵し水鶏三羽、玉鳴五羽、地鳴二羽、鶉一羽を獲、午後一時半の汽車にて帰る。波多の信至る。夜松尾某来訪。
- 十二月一日 雨。午前池部雀彦、並に五校仏教青年会幹事宮田正明仏教会館建設寄附の事に付き来訪、五円を寄附す。午後松倉善家来訪、其獵獲の鴨二羽を贈る。内人と大江を訪ひ、五時帰る。鳥居の信片至る。土屋連名なり。
- 十二月二日 陰。佐々干城氏来訪。午後出て理髮。夜菅村宅を訪ふ。
- 十二月三日 陰。夜井手三郎来訪。
- 十二月四日 晴。鳥居、波多に復書す。海軍々令部より明年正月より三月に至るの手当六百円を送り来る。午後長江を訪ふ。
- 十二月五日 陰。午前五時五十分の汽車にて長江と小川に出獵す。獵犬来らざるを以て待て八時に至り、沙川の堤防を獵す。山鳴三羽を獲、午後有佐に赴く。獲る所無し。三時四十分の汽車にて帰る。五時上熊本着、歩いて家に帰る。
- 十二月六日 陰。三浦喜傳來訪、明後日より東京に転居すと云ふ。午後内田康哉を研屋本店に訪ふ、在らず。去て春日松倉に至り、四時帰る。雨。夜菅村夫婦来訪。
- 十二月七日 晴。朝岡本源次来訪、昨夜岡山より帰来せりと云ふ。午後宇留毛桜山に殉難志士の五十年祭に列す。三時帰る。雨。松倉来訪。
- 十二月八日 晴。午前三浦喜傳を訪ひ、去て鎮西館、緒方を訪ひ、晌午帰る。午後一時半上熊本に三浦の上京を送る。帰て物産館に至り殉難志士遺墨展覧会を觀る。終て鎮西館に至り平山、江島等と談じ、四時家に帰る。
- 十二月九日 半晴。上海波多より十一月分百六十円を送り来る。午後大野謙二郎に致書す。午後松倉に抵り与に出て岡本源次を万月に訪ふ。
- 十二月十日 陰。上海旧雨会の信至る。午前緒方、阿部野を訪ふ。午後河口を訪ふ。晩菅村の案内に家族と共に静養軒に至る。和洋両菜の饗を受け七時より菅村家族と大和座に至り天勝の奇術を觀、十一時帰る。
- 十二月十一日 晴。午前五時半射場坂にて河口、外二人に会し、共に本妙寺、天狗山に獵し鶉二羽を獲、二時半帰る。松倉来訪。井手の信至る。内田康哉より案内状至る。之に復す。
- 十二月十二日 陰。午前阿部野、緒方を訪ふ。午後五時内田康哉招待会に静養軒に出席す。会者三十余名。九時帰る。
- 十二月十三日 暗。午前九時より長江と牧崎より成道寺一帯に獵し、玉鳴五羽、水鶏一羽を獲、四時帰る。浅井寅喜来訪せりと云ふ。
- 十二月十四日 晴。午前理髮。午後井芹経平来訪。
- 十二月十五日 雨。波多博の信至る。午後内人と大江を訪ふ。
- 十二月十六日 雨。鳥居、大里の信片至る。午前長江虎臣来訪。鳥居に復書し西村天囚に信片を發す。午後出て火薬、銃袋等を購ふ。五時岡本源次招待会に南山楼に出席、八時半帰る。

十二月十七日 微雨，風大。午前七時長江と上熊本より上車高瀬に至り，高瀬町を過ぎ高瀬川を渡り山溪の間を獵して木ノ葉に至り，午後四時半の汽車にて帰る。水鶏二羽，玉鳴一を獲たるのみ。

十二月十八日 陰寒。午前九時味噌天神にて岡本源次，加来信人，衾倉兄弟，椿等と会し兎を竜田山に狩る。最後に至り岡本の手にて僅に一頭を獲，五時帰る。佐々干城，古閑信喜二氏來訪せりと云ふ。

十二月十九日 陰寒。上海波多博，佐々布質直に致書す。三時半上車松倉を訪ひ，五時共に出て春日三浦に至り内田康哉の招宴に列す。会者四十余名。八時半帰る。海軍少将竹下勇の信至る。菅村夫婦來訪。

十二月二十日 快晴。佐原，波多，安村介一，西村時彦の信，並に伊藤俊三，御幡芳子の訃音至る。石原，佐原，竹下少将に復書す。午前佐々布遠來訪。午後一時半山田，井手，以下国権黨員二十余名の上京を上熊本に送り，二時春日に至り松倉親敬を訪ひ，共に出て岡本源次を訪ひ，帰途松倉善家と小談，五時帰る。宇土細川行雅君に致書，明後日海東会獵の事を告ぐ。夜河口來訪。長江虎臣來訪。

十二月二十一日 雨。前八時研屋本店に内田康哉の帰京を送る。田中清司來訪。午後岡本來訪，之を留て晩食を共にす。

十二月二十二日 陰。午前五時五十分獵装春日に至り岡本源次，松倉を待つ，至らず。独り上車宇土に至り，高月某と会し伊津野城塚方面に獵し僅に鵝四羽を獲，四時の汽車にて帰る。春日に松倉を訪ひ小談，五時家に帰る。

十二月二十三日 半晴。浅井寅喜，西田敬止に致書す。午後園田に至り朝鮮飴四箱を求め各人に送る。帰途長江，菅村を訪ふ。徳丸作藏本月十日病死の訃に接し遺族に弔詞を發す外，伊藤俊三の訃，御幡家の訃音に接し，弔詞を發す。安村介一，深田豊一に復書す。他出中細川行雅君來訪，菓子一折を贈られたり。

十二月二十四日 陰寒。増田中佐，佐々布の信到る。増田，岡本源，大野謙に信片を發す。午前銀行に至り預金して帰る。

十二月二十五日 晴。午前六時の汽車にて長江と宇土伊津野方面より石橋善導寺一帶に獵し羽斑鵝五羽を獲て，四時の汽車にて帰る。美濃部，波多の信至る。波多より冬筍一包送り来る。浅井寅喜の信至る。

十二月二十六日 陰。浅井寅喜，高月利男，並に細川行雅君に復書す。夜井口忠次郎來訪。午前田中清司を訪ふ。

十二月二十七日 晴。午前五時五十分の汽車に独り宇土山に獵し鵝一羽を獲，四時の汽車にて帰る。三浦喜傳，古城，土屋の信至る。夜菅村夫婦來訪。

十二月二十八日 晴。午前河口介男，浅井寅喜，奥村來訪。浅井，奥村と中食す。午前理髮，岡本源次，緒方，佐々布の信至る。夜河口を訪ふ。

十二月二十九日 晴。

十二月三十日 微雪。大野謙の信片，並に鳥居，土屋，右田等連名の信片至る。

十二月三十一日 晴。波多に信片を發す。田中來訪。是日大正二年の尽日なり。残燈夜を守り，十二時寝に就く。